

B区第6号住居跡(第52図)

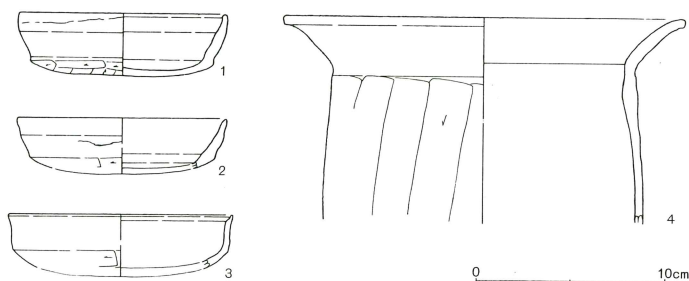
調査区西端のD-1区に位置する。北東コーナーに第7号住居跡が重複する。調査時には本住居跡の方が新しいものと捉えられているが、第7号住居の形態からみると或いは逆転する可能性もあろう。形態は方形を呈し、規模は長軸3.94m、短軸3.84m、深さ10~15cmを測る。主軸方位はN-2°-Wを示す。

床面は平坦である。覆土は基本的に同一色調で、下層に向かってやや褐色味が強くなると同時にしまりも弱くなる。全体に風化したロームブロックが多く含まれていた。

カマドは北壁に設置される。煙道部が25cmほど壁を切り込んでおり、燃烧部は壁内に納まるものと考えられる。壁ラインに平行する断面の観察を行ったが、袖部は全く確認できず既に流失してしまったものと判断された。燃烧部底面は床面を僅かに掘り込んでおり、被熱により焼土化していた。

貯蔵穴は存在しない。ピットは2本検出された。P₁は断面観察により住居を切っていることが判明したが、P₂の帰属は不明である。壁溝は南壁西側で部分的に確認された。深さ8cmを測る。

出土遺物(第51図1~4)は少なく、図示した以外には土師器壺の口縁部小片が1点あるのみである。1・4はほぼ床面、2・3は覆土から出土した。1・2は小型化した有段口縁坏であるが、確実に白色針状物質を含み在地産である。1はほとんど摩滅しておらず、黒色処理もなされない。2は黒色処理されるが、外面は不明瞭。3は比企型坏で風化している。有段口縁坏と甕から稲荷前IV期に比定される。



第51図 B区第6号住居跡出土遺物

B区第6号住居跡出土遺物観察表(第51図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	10.9	3.3		A B C J	A	橙	95%	No.4 床面(+2cm)
2	坏	(11.0)	2.6		A C	B	にぶい橙	10%	覆土
3	坏	(11.8)	2.8		A C	B	橙	5%	覆土 風化により赤彩不明
4	甕	(20.8)	10.7		A E J	B	浅黄橙	15%	No.5 床面(+1cm)

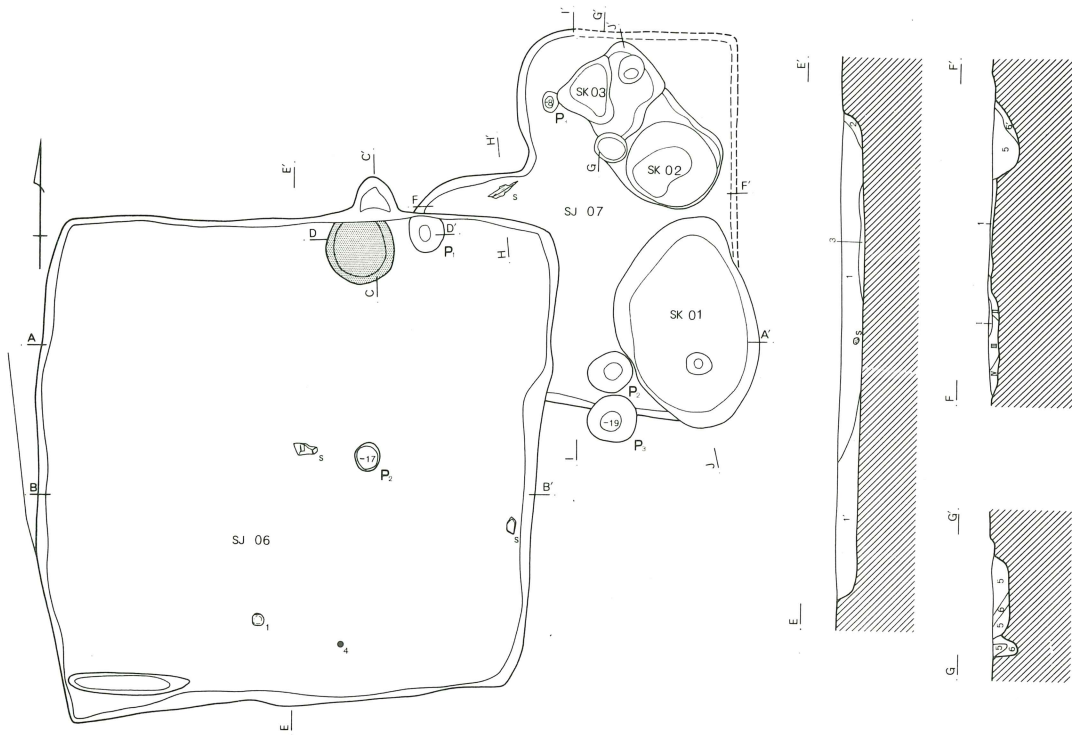
B区第7号住居跡(第52図)

調査区西端のD-1区に位置する。第6号住居跡にカマドを切られる。また3基の土壌(S K01~03)とも重複するが土壌上面に貼床は認められず、土壌の方が新しいものと判断された。住居跡は全体に掘り込みが浅く、東壁の立ち上がりは把握できなかった。形態は不整長方形を呈し、残存規模は長軸3.16m、短軸1.60m、壁高は9cm以下である。主軸方位はS-89°-Wを示す。

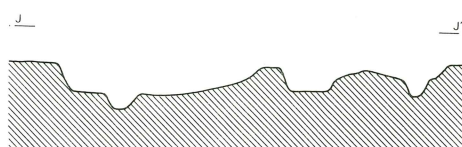
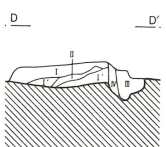
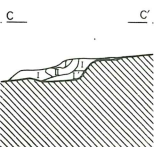
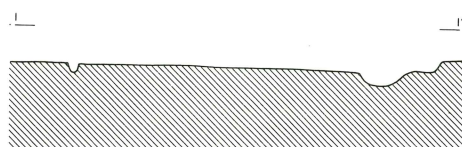
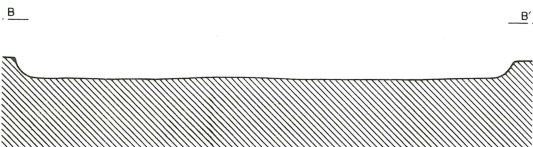
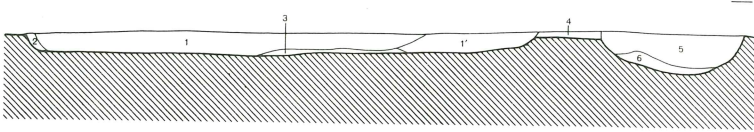
床面は凹凸があり一定しない。覆土の堆積状況も不明である。

カマドは西壁に設置され、壁を大きく(86cm)掘り込んでいる。カマド北壁側には袖石と考えられる板状の片岩が埋設されており、燃烧部は壁外に位置するものと推定される。

ピットは3本検出されたが住居に伴うか否かは不明である。



A 30.70

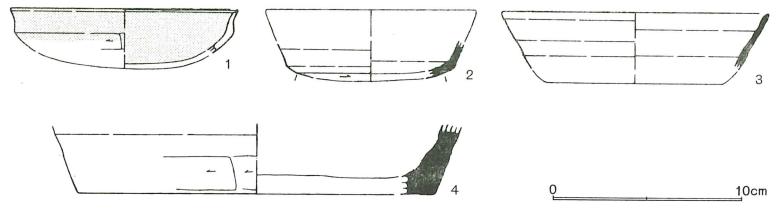


- | | | | | | |
|-----------|--------------|---|-----------|--------------|------------------------------------|
| 1 | 10YR 黒褐2/2 | ローム粒子多量に含む地点と少量含む箇所が存在する。I'は相対的にローム粒子が少ない。風化したロームブロックを混入する。 | III | 10YR 黒褐3/2 | ロームと焼土ブロック少量混入。(P ₁ 覆土) |
| 2 | 10YR 黒褐2/2 | 炭化物粒子を混入し、しまりは弱い。 | IV | 10YR 暗褐3/3 | ローム粒子を多量に混入する。(P ₁ 覆土) |
| 3 | 10YR 黒褐2/2 | 砂粒を少量混入する。(SJ07覆土) | S J 07カマド | | |
| 4 | 10YR 暗褐3/3 | 焼土粒子を少量混入する。 | I | 2.5YR 明赤褐5/6 | 焼土ブロック多量に混入。 |
| 5 | 10YR 黒褐2/2 | 焼土粒子を少量混入する。 | II | 10YR 黒2/1 | 焼土粒子・ローム粒子少量混入。 |
| 6 | 10YR 黒褐2/2 | 風化したロームブロックを多量に混入する。6'はロームブロックの風化が弱い。 | III | 10YR 黒褐2/2 | 焼土ブロック粒子を斑点状に混入する。 |
| S J 06カマド | | | IV | 10YR 黒褐2/3 | 焼土ロームを少量混入し、しまりは弱い。 |
| I | 10YR 暗褐3/3 | 焼土粒子・同ブロック・ローム粒子多く含まれしまりが強い。I'はロームの混入量が少ない。 | | | |
| II | 2.5YR 暗赤褐3/4 | 多量の焼土ブロックと微量のローム粒子混入。 | | | |

0 2m

第52図 B区第6・7号住居跡

出土遺物は少なく、全て小片である。4点を図化した。第53図1は覆土、2～4はSK01内から出土。時期を限定する資料とはいえない。



第53図 B区第7号住居跡出土遺物

B区第7号住居跡出土遺物観察表(第53図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.0)	2.3		B	A	浅黄橙	5%	覆土 赤彩
2	坏		2.0		A B C	B	灰	10%	SK01内覆土
3	坏	(14.0)	3.0		A B	B	灰白	10%	SK01内覆土
4	甕		3.6	(19.0)	A B C	A	灰白	5%	SK01内覆土

B区第8号住居跡(第55図)

調査区西端のE-1区に位置し、西壁は調査区外に掛かる。形態は方形を呈し、規模は長軸3.36m、短軸3.18m、深さ10～15cmを測る。主軸方位はN-62°-Eを示す。

床面は緩やかな凹凸をもつ。覆土は基本的にロームを多量に含む黒褐色土で構成され、大きな土層変化はみられない。人為的な埋め戻しの可能性もあろう。

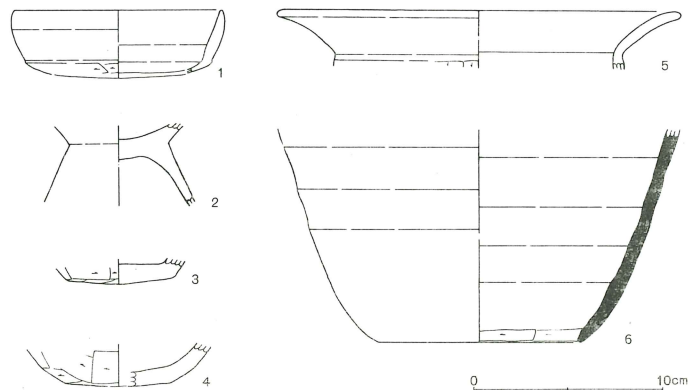
カマドは東壁の中央から南に偏った位置に設置される。煙道は幅30cmで、壁外に108cm延び先端はピットと連結する。このピットはカマドに伴うもので排煙口かもしれない。燃烧部は壁内に納まり奥壁は壁ラインとほぼ一致するが、床面を掘り込んだ痕跡は見い出せない。また、袖の有無を確認するため燃烧部を横断するラインを設定し断面観察を試みたが、第5層が袖構築材の一部かと推定されるものの原位置を全く留めておらず、明確な袖部は検出できなかった。

貯蔵穴はカマド脇の南東コーナーに設けられる。楕円形を呈し、規模は長径62cm、短径48cm、深さ9cmを測る。ピットは5本検出されたが、主柱穴配置は明らかにできなかった。

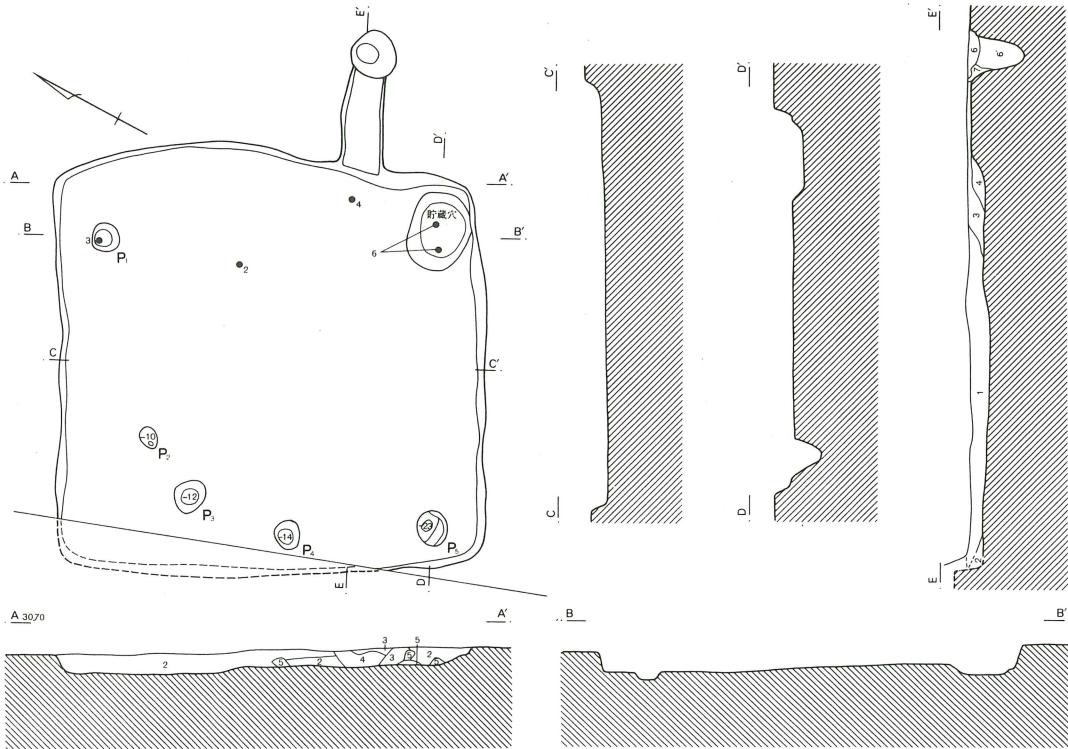
出土遺物は土師器坏、甕、台付甕、壺と須恵器坏、甎の各器種が検出されているが、量的にも少なく、また全て破片である。6点を図化した(第54図1～6)。

2は床面出土であるが古墳時代前期の台付甕と思われ混入品である。

6の須恵器甎は貯蔵穴内から出土したもので孔部は50%弱残存しており、土師器甎と同様な単孔(底抜け)形態である。焼成は甘くやや風化しているが、白色針状物質を含み在地産(南比企窯跡群産)と考えられる。稻荷前V期頃と考えておきたい。



第54図 B区第8号住居跡出土遺物



- | | | | |
|---|---|---|---|
| <p>1 10YR 黒褐2/2</p> <p>2 10YR 黒褐2/3</p> <p>3 2.5YR 赤黒2/1</p> <p>4 2.5YR 極暗赤褐2/2</p> | <p>ローム粒子・微砂粒を比較的多く含み、粘質土の本層はしまりが極めて強い。</p> <p>ロームブロックを多量に混入する。ブロックは風化している。他の混入物は1層と同じである。2層はほとんど混入物は含まない。</p> <p>1層中に焼土小ブロックを混入する。3層は更に炭化物粒子を混入する。</p> <p>焼土ブロックを多量に炭化物を少量混入する。</p> | <p>5 10YR 黒褐3/2</p> <p>6 10YR 黒褐2/3</p> <p>7 10YR 黒褐3/2</p> | <p>ロームブロックを主体に少量の焼土粒子を混入する。</p> <p>粘質を帯びた土層中に焼土小ブロックを混入する。6層はより暗色を呈する。(ビット)</p> <p>風化したロームブロックを混入。(ビット)</p> |
|---|---|---|---|

0 2m

第55図 B区第8号住居跡

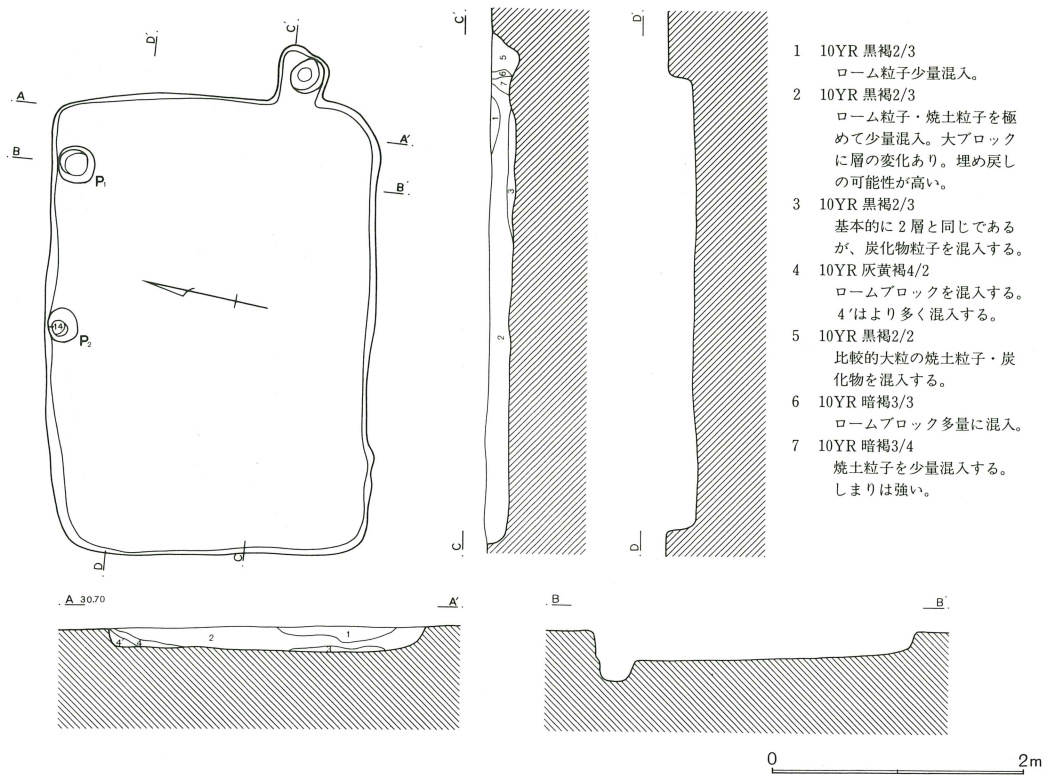
B区第8号住居跡出土遺物観察表(第54図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(11.0)	3.3		ABE	C	にぶい褐	10%	覆土
2	台坏甕		4.3		ABE	C	橙	70%	No.14 床面 混入か
3	甕		1.3	5.8	ABCJ	A	にぶい橙	50%	No.16 P1覆土(-4cm)
4	甕		2.2	5.6	AJ	B	浅黄橙	25%	No.8 覆土(+8cm)
5	甕	20.6	3.0		ABEJ	B	橙	5%	覆土
6	甗		11.1	10.6	ABC	D	灰白	30%	No.2,3 貯穴内(-2cm)

B区第9号住居跡(第56図)

調査区西端寄りのE-1・2区に位置する。西側に第8号住居跡、東に10号住居跡が隣接する。形態は長方形を呈し、規模は長軸3.60m、短軸2.58m、深さ約20cmを測る。主軸方位はN-85°-Eを示す。

床面は凹凸が比較的顕著である。覆土は7層に分けられ、5~7層はカマド埋土である。4層は第1次堆積と思われるが、2層は大きなブロック単位に層の変化(不整合)が認められ人為的な埋め



第56図 B区第9号住居跡

戻しの可能性が高いものと考えられる。

カマドは東壁の南東コーナーに寄った位置に設置される。小規模なカマドで最大幅42cmを測り、壁外に44cm掘り込まれる。A-A'断面を観察してもカマドに由来する堆積物はみられず、燃烧部自体が壁外に存在するものと想定される。燃烧部は床面と同一深度で、底面には径30cm、深さ10cmの浅いピット状の掘り込みが認められた。

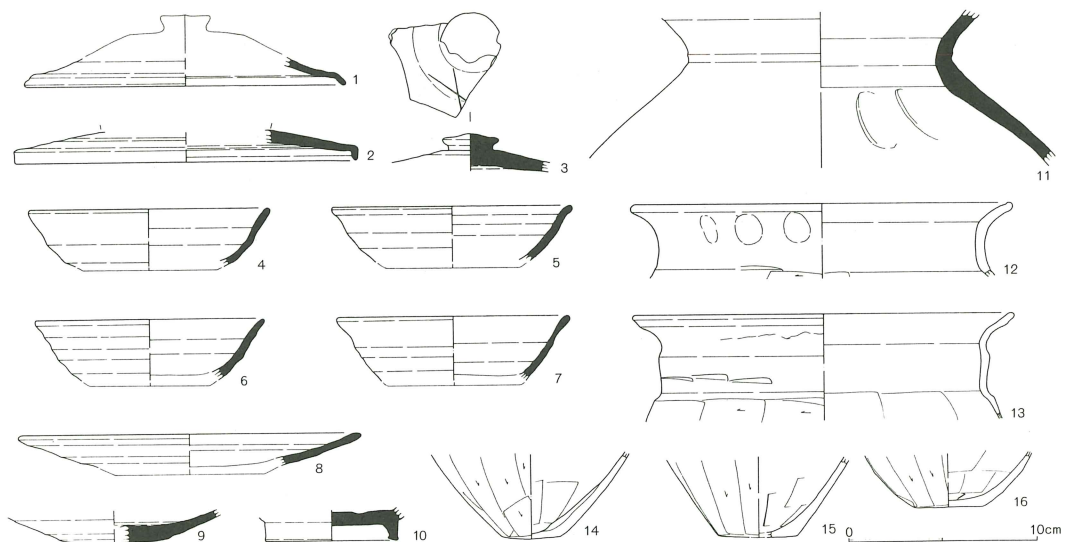
ピットは2本検出された。P₁は深さ17cmで覆土の状態から住居に伴う可能性が高いが、P₂は住居よりも新しい段階のものと考えられる。

貯蔵穴と壁溝は検出されなかった。

出土遺物は土師器坏・甕、須恵器坏・高台坏・椀・皿・蓋・甕・緑釉皿が検出された。完形品はない。須恵器坏が最も多く口縁部破片数で27点、次いで土師器甕が同破片数11点を数える。他は3点以下である。土師器坏は混入である。

図化したものの中では第57図1の蓋がカマド内から検出された他は覆土出土で、確実に遺構に伴うものは抽出できない。

第57図2の蓋は混入、3は天井部に「×」状のへら記号が残される。時期決定の根拠に乏しいが、須恵器坏(4~7)は底部が遺存しないため形状は不正確な部分があるものの口縁部の外反はまだ弱い段階と思われる。また、須恵器皿を含むことや共伴する土師器甕は「コ」の字状口縁を呈することから稻荷前X II期~X III期に比定されよう。



第57図 B区第9号住居跡出土遺物

B区第9号住居跡出土遺物観察表(第57図)

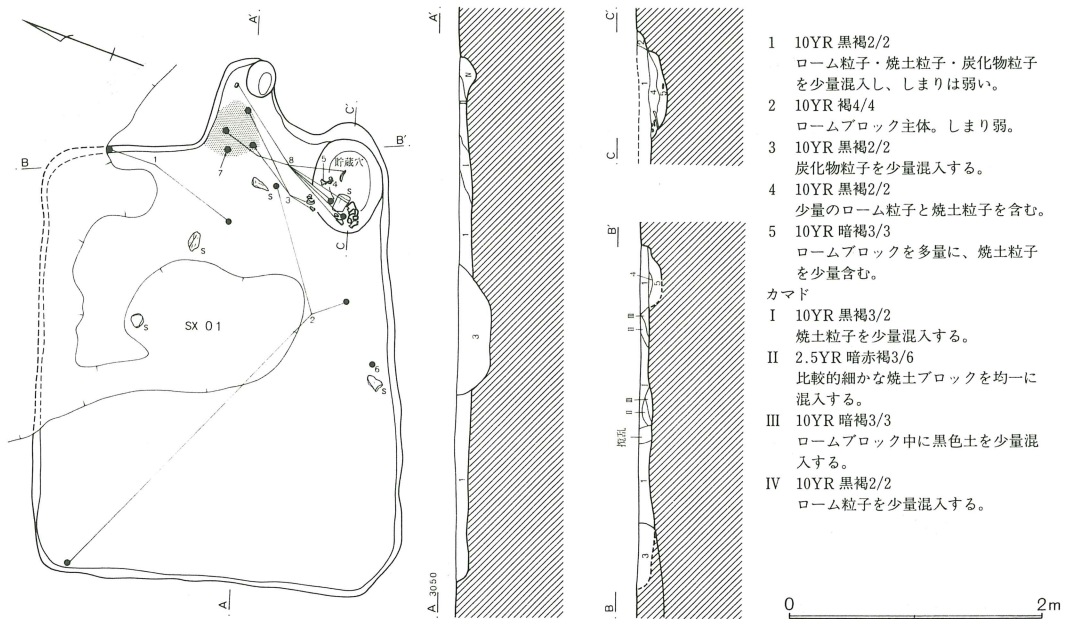
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	蓋	(16.7)	1.5		ABC	B	灰	10%	No.42 カマド内覆土
2	蓋	(18.0)	2.1		ABC	A	灰白	10%	覆土
3	蓋		2.0		AB	A	灰白	25%	No.18 覆土
4	坏	(12.5)	3.0		AB	A	灰	20%	No.41,45 覆土
5	坏	(12.5)	2.9		C	B	灰白	15%	No.48 覆土
6	坏	(12.0)	3.2		ABC	C	オリブ灰	25%	No.52 覆土
7	坏	(12.0)	3.4		ABC	B	灰	20%	覆土
8	皿	(17.6)	1.7		AJ	B	浅黄橙	10%	No.12 覆土
9	皿		1.7		ABC	B	灰	40%	No.47 覆土
10	高台坏		1.7	7.0	ABC	A	灰	95%	No.25 覆土 混入か?
11	甕		8.4		ABC	A	灰	35%	No.30 覆土
12	甕	(19.6)	3.8		BE	A	にぶい橙	10%	No.61 覆土
13	甕	(19.7)	5.6		BE	A	橙	20%	No.20 覆土
14	甕		4.5	(3.2)	BE	A	にぶい黄橙	25%	No.10 覆土
15	甕		4.2	(4.2)	EH	A	にぶい橙	25%	No.66 覆土
16	甕		2.8	(3.6)	BE	A	にぶい橙	35%	No.54 覆土

B区第10号住居跡(第58図)

調査区西端に近いD-2区に位置し、西側に第9号住居跡が近接する。住居北コーナー部と中央部に性格不明の土壌群(SX01)の攪乱を受ける。形態は長方形を呈し、規模は長軸3.40m、短軸2.80m、深さ8cmを測る。主軸方位はN-69°-Eを示す。

床面はやや凹凸がある。覆土は基本的に黒褐色土単層(第1層)で、土壌覆土(第3層)が切り込んでいる。埋没過程は断定はできないが人為的埋め戻しの可能性がある。

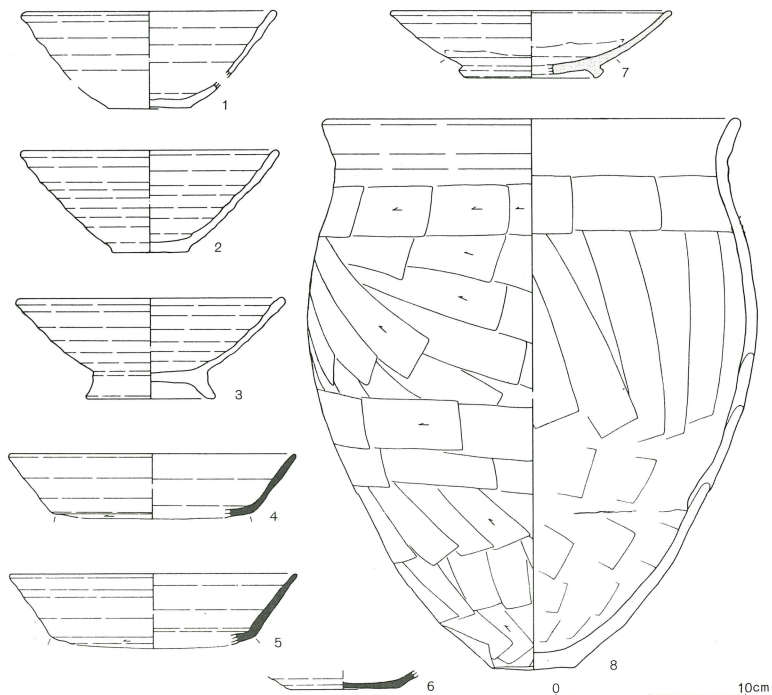
カマドは東壁中央よりも南に寄った位置に設置される。最大幅約90cm、壁外に65cm延びる。断面観察に拠っても袖は確認できず、燃烧部が壁外に存在するものと考えられる。燃烧部は床面と段差



第58図 B区第10号住居跡

なく連続し、先端部に径30cm、深さ8cmのピットが穿たれていた。底面は平坦であり、北壁寄りの部分が強い被熱を受け焼土化していることから掘り込み底面を火床面としていたものと推定される。

貯蔵穴はカマド脇の南東コーナーに設けられる。楕円形を呈し、規模は長径74cm、短径58cm、深さ14cmを測る。埋土は2層に分けられ(第4・5層)、土器は4層中に流れ込んだ状態で出土した。ピット、壁溝は存在しない。



第59図 B区第10号住居跡出土遺物

出土遺物は少なく総数26点に留まる。8点を図化した(第59図1~8)。器種としては非ロクロの土師器(混入)・甕、須恵器(混入)・高台杯・甕と灰釉陶器の碗がある。遺物はカマド及び貯蔵穴周辺に纏まる傾向が認められる。3と8はカマド内と貯蔵穴付近の遺物が接合し、2の坏はかなり離れた位置の破片同士が接合する。また、片岩系の礫が数点出土している。特に集中する様子はみられない

が、本来カマド内の施設として使用された可能性がある。

1～3は体部が直線的に延び、肥厚した口縁部に至るもので、須恵器同様のロクロ整形であるが焼成は酸化焰焼成と思われ、須恵器の範疇から逸脱するものといえる。4・5の須恵器坏は明らかに混入である。7の灰釉椀は内外面に灰釉が漬け掛けされ、体部下半から底部は回転ヘラケズリされる。胎土から東濃産と推定される。8は器形的には所謂「コ」の字甕の影響もみられるが、ケズリ範囲や器厚が異なり、成・整形も雑であるうえ、白色針状物質を含み在地産と考えられる。武蔵型甕の型式的連続性が崩壊した段階以降に位置づけられよう。1～3、7・8を基準に稻荷前XIV期に含めたが、様相としては新しく、該期としても新段階とすべきである。

B区第10号住居跡出土遺物観察表(第59図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(13.0)	5.1	4.2	A B C J	C	にぶい褐	25%	No.8～10 床面
2	坏	(13.4)	5.3	4.0	A B C J	C	にぶい橙	35%	No.5,7,22 床面
3	高台坏	(13.8)	5.3	6.6	A B C J	C	淡橙	45%	No.16,18他 カマド底面+床面
4	坏	(15.0)	3.7	(10.8)	A B C J	B	灰	25%	No.36 貯穴内(-3cm)
5	坏	(15.0)	3.3	(10.8)	A B C J	B	灰	20%	No.35 貯穴上面(±0cm)
6	坏		1.0	(5.6)	A J	C	浅黄橙	30%	No.2 床面 底部外面風化
7	椀	(14.6)	3.5	6.8	J	A	灰白	35%	No.13 カマド底面(+2cm) 東濃産 灰釉
8	甕	21.6	28.8	4.4	A B J	C	橙	35%	No.12,14他 カマド+貯穴内(-5cm)

B区第11号住居跡(第60・61図)

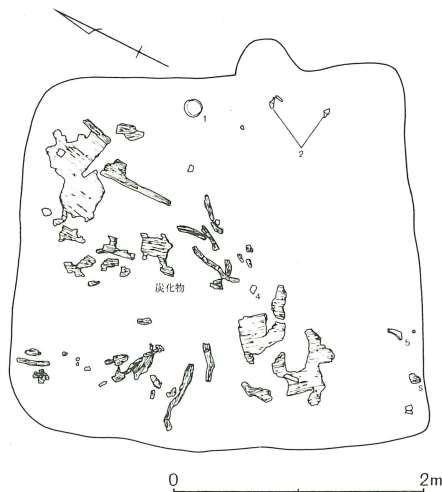
調査区北西寄りのC-2区に位置し、第2・7号方形周溝墓を切って構築される。形態は不整形を呈し、規模は長軸3.16m、短軸2.96m、深さ3～12cmを測る。主軸方位はN-60°-Eを示す。

床面は凹凸が顕著で一定しない。本住居は焼失家屋と考えられ、床面には炭化材が多数残されていた(第60図)。覆土は焼失時の埋土と思われる。焼土混じりの暗褐色土で構成され大きな変化はない(第1・2層)。

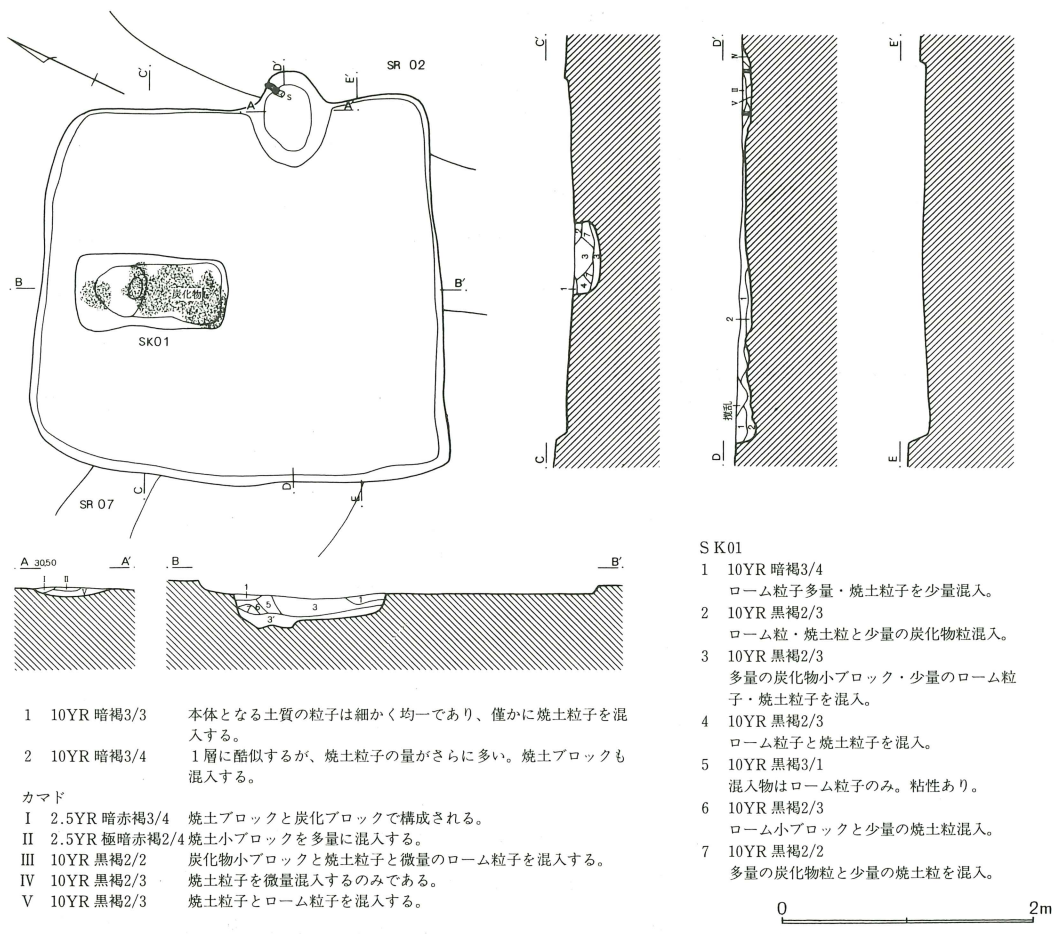
カマドは東壁の中央からやや南に寄った位置に設置される。焚口幅60cm、壁外に28cm延びる。燃烧部は壁外にあると思われ、断面観察によっても明確な袖は検出されなかった。底面は皿状に凹み、奥壁は緩やかに立ち上がる。また、燃烧部中央から北に寄った位置に径6cm程の棒状礫が残存していた。石製支脚と考えられる。

貯蔵穴及びピットは存在しない。

その他、住居北壁寄りの床面に土壌が1基存在する(S K01)。長方形を呈し、規模は長軸120cm、短軸60cm、深さ25cmを測る。主軸方位は住居主軸に直交する。上面に炭化材が覆っていることから住居に伴うか、それ以前の所産である。



第60図 B区第11号住居跡炭化材出土状況

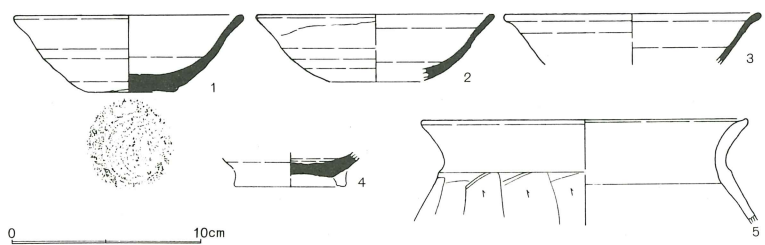


- 1 10YR 暗褐3/3 本体となる土質の粒子は細かく均一であり、僅かに焼土粒子を混入する。
 - 2 10YR 暗褐3/4 1層に酷似するが、焼土粒子の量がさらに多い。焼土ブロックも混入する。
- カマド
- I 2.5YR 暗赤褐3/4 焼土ブロックと炭化ブロックで構成される。
 - II 2.5YR 極暗赤褐2/4 焼土小ブロックを多量に混入する。
 - III 10YR 黒褐2/2 炭化物小ブロックと焼土粒子と微量のローム粒子を混入する。
 - IV 10YR 黒褐2/3 焼土粒子を微量混入するのみである。
 - V 10YR 黒褐2/3 焼土粒子とローム粒子を混入する。

- SK01
- 1 10YR 暗褐3/4 ローム粒子多量・焼土粒子を少量混入。
 - 2 10YR 黒褐2/3 ローム粒・焼土粒と少量の炭化物粒混入。
 - 3 10YR 黒褐2/3 多量の炭化物小ブロック・少量のローム粒子・焼土粒子を混入。
 - 4 10YR 黒褐2/3 ローム粒子と焼土粒子を混入。
 - 5 10YR 黒褐3/1 混入物はローム粒子のみ。粘性あり。
 - 6 10YR 黒褐2/3 ローム小ブロックと少量の焼土粒混入。
 - 7 10YR 黒褐2/2 多量の炭化物粒と少量の焼土粒を混入。

第61図 B区第11号住居跡

壁面は強い火熱を受け焼土化し、南側壁面には酸化面(焼土)の内側に薄い還元面が認められた。また、第3層上面には炭化物の薄い堆積層が存在した。これは一時に廃棄し



第62図 B区第11号住居跡出土遺物

たような状況で面的に敷設したというものではない。底面は鍋底状を呈し、短軸の一方が不規則に凹む。土層は炭化物・焼土混じりの黒褐色土で構成され、明らかに人為的な埋め戻しによるものと判断された。土壌内からは骨或いは土器等の遺物は検出されず、性格は不明である。

出土遺物には土師器甕・壺、須恵器坏・高台坏・甕があるが量的には少なく破片数で15点に留まる。第62図1・2・5は床面から出土した。1・2の須恵器坏は焼成が悪く、部分的にしか還元焰焼成されていないような土器である。5の土師器壺は混入である。稻荷前XIV期に比定される。

B区第11号住居跡出土遺物観察表(第62図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	12.0	4.0	4.5	A B C E	C	にぶい黄橙	100%	No.1 床面 半還元焰焼成
2	坏	(12.4)	3.4		A B E	B	にぶい黄橙	40%	No.3,4 床面 半還元焰焼成
3	坏	(13.4)	2.7		A B E	C	灰白	10%	覆土 高台坏か
4	高台坏		1.4		A B E	C	にぶい褐	40%	No.10 覆土 高台欠落 外面風化
5	壺	(17.0)	5.5		A B E	B	浅黄橙	25%	No.5 床面 全体に風化 混入

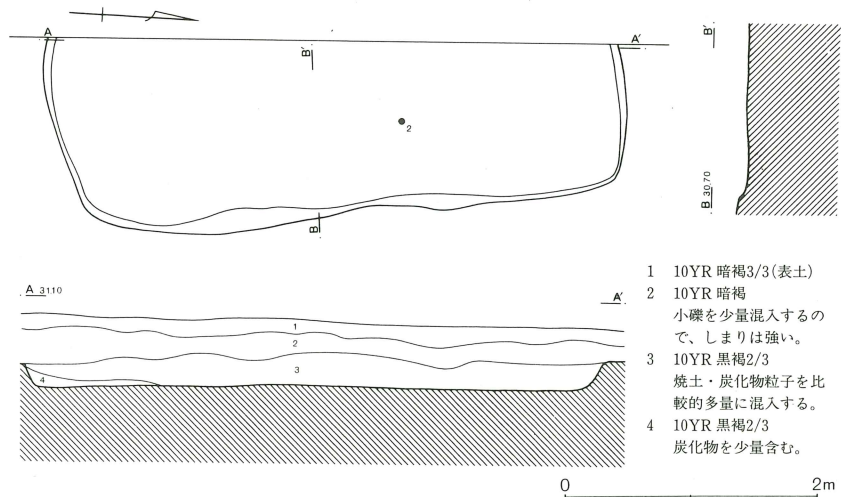
B区第12号住居跡(第63図)

調査区西端部のE・F-1区に位置し、大部分は調査区外に延びる。形態は方形を呈するものと推定されるが正確な規模は不明である。残存規模は長軸4.46m、短軸1.36m、確認面からの深さ約20cmを測る。主軸方位は東壁を基準にするとN-7°-Wを示す。

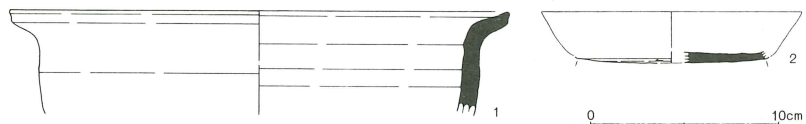
床面はほぼ平坦で貼床されていた。掘方面は床面から10cm前後不規則に掘り下げられていた(図化省略)。覆土は焼土・炭化物混じりの土層で大きな変化はない(第3・4層)。

カマドは調査区内には存在しない。おそらく北壁に設置されたものと思われる。貯蔵穴、ピットは存在しない。

出土遺物は極めて少なく土師器甕、須恵器坏・鉢と弥生土器の破片が各1点出土したのみである。第64図2の坏は底径が大きく、全面回転ヘラケズリされていた。8世紀前半であろう。



第63図 B区第12号住居跡



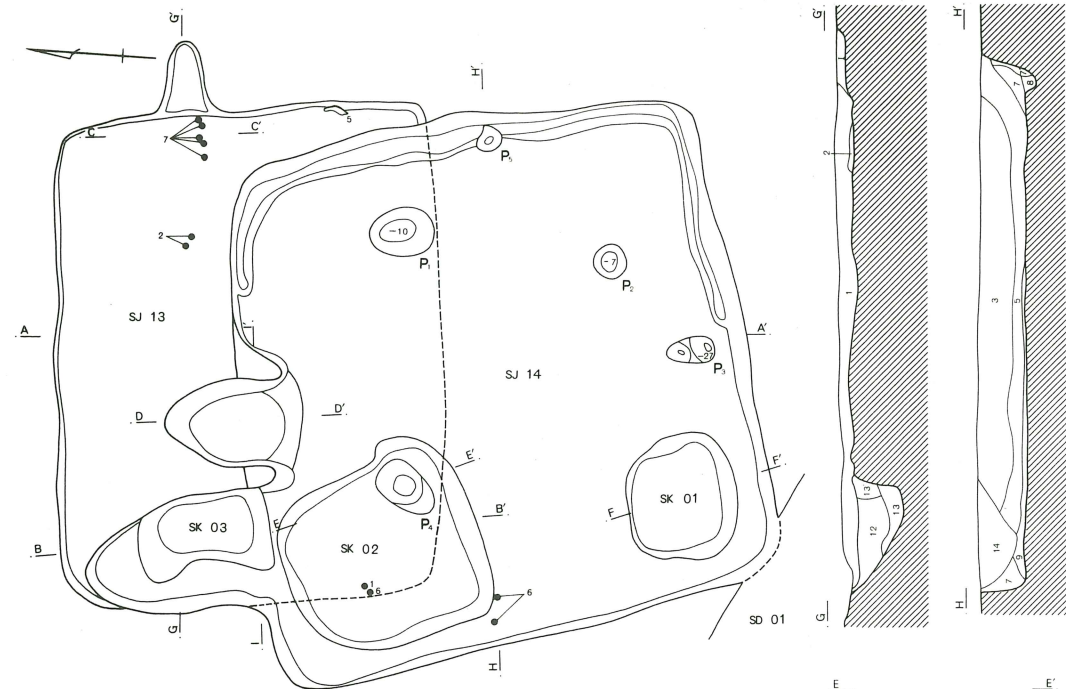
第64図 B区第12号住居跡出土遺物

B区第12号住居跡出土遺物観察表(第64図)

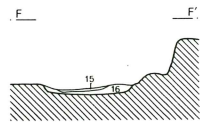
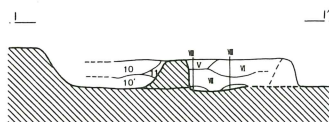
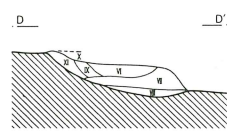
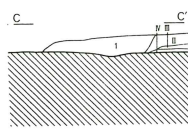
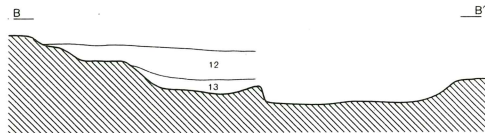
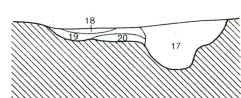
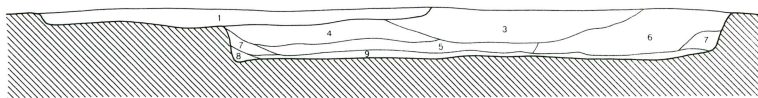
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	鉢	(26.3)	5.4		A B C	A	灰白	15%	覆土 胴部ロクロナデ
2	坏		0.6	(10.0)	A B C	A	灰	25%	No.1 床面 底部回転ヘラケズリ

B区第13号住居跡(第65図)

調査区西端部のE・F-1・2区に位置する。第14号住居跡と南壁部で切り合い、本住居の方が新し



A 3.070



- 1 10YR 黒褐3/2 比較的多数の焼土粒子と少量の炭化物混入。しまり強。
- 2 10YR 黒褐2/2 炭化物多量混入。しまり弱。貼り床不明瞭。
- 3 10YR 黒褐3/2 ローム粒子多量・焼土粒子少量混入。
- 4 10YR 暗褐3/3 風化した砂礫多量含む。しまり極めて強い。
- 5 10YR 暗褐3/3 砂礫ほとんど含まない。
- 6 10YR 暗褐3/4 ロームブロック多量混入。霜降り状を呈す。
- 7 10YR 暗褐3/3 ローム粒子・焼土粒子少量混入。7'はローム粒子多量含む。
- 8 10YR 黒褐2/2 ローム粒子少量混入。しまり弱。
- 9 10YR 黒2/1 炭化物主体。焼土粒子・ローム粒子少量混入。
- 10 10YR 黒褐2/2 ローム粒子・炭化物微量混入。10'は含まない。
- 11 10YR 黒褐2/3 ローム粒子・焼土粒子多量混入。
- 12 10YR 黒褐2/2 ロームブロック比較的大粒を少量混入。しまり弱。(SK03)
- 13 10YR 黒褐2/2 混入物殆ど無。しまり弱。13'ロームブロック混入。(SK03)
- 14 10YR 黒褐2/2 焼土ブロック・風化した小礫含む。しまり強。(土壌覆土)
- 15 2.5YR 暗赤褐3/4 焼土ブロック・炭化物ブロック薄く堆積。しまり極めて弱。
- 16 10YR 黒褐3/2 ロームブロック・斑点状に混入。しまり極めて弱。
- 17 10YR 黒褐2/2 砂質ローム・黒色土をブロック状に堆積。しまり極めて弱。
- 18 10YR 黒褐2/3 黒色土ブロック状に堆積。
- 19 10YR 黒褐2/3 炭化物粒子・焼土粒子を縞状に堆積。
- 20 10YR におい黄褐4/3 砂質ロームブロックを主体、黒色土少量混入。

S J 13カマド

- I 10YR 暗褐3/4 ローム粒子多量・焼土粒子少量混入。しまり強。
- II 10YR 黒褐3/2 ローム粒子・焼土粒子多量に混入。
- III 10YR 褐4/4 明瞭なローム粒子を主体とし、焼土粒子少量混入。
- IV 10YR 黒褐2/2 焼土粒子・炭化物粒子少量混入。

S J 14カマド

- V 10黒褐2/2 風化した岩の粒子を含む。
- VI 10YR 暗褐3/4 ロームで構成され、混入物なし。
- VII 2.5YR 暗赤褐3/4 焼土ブロック・炭化物ブロック混入。しまり弱。
- VIII 10YR 黒2/1 炭化物多量・焼土粒子少量混入。
- IX 5 YR 暗赤褐3/4 焼土ブロック少量・ロームブロック多量混入。
- X 10YR 暗褐3/3 焼土粒子少量混入。
- XI 10YR 暗赤褐3/4 IX層より暗色を呈し、焼土粒子少量混入。

0 2m

第65図 B区第13・14号住居跡

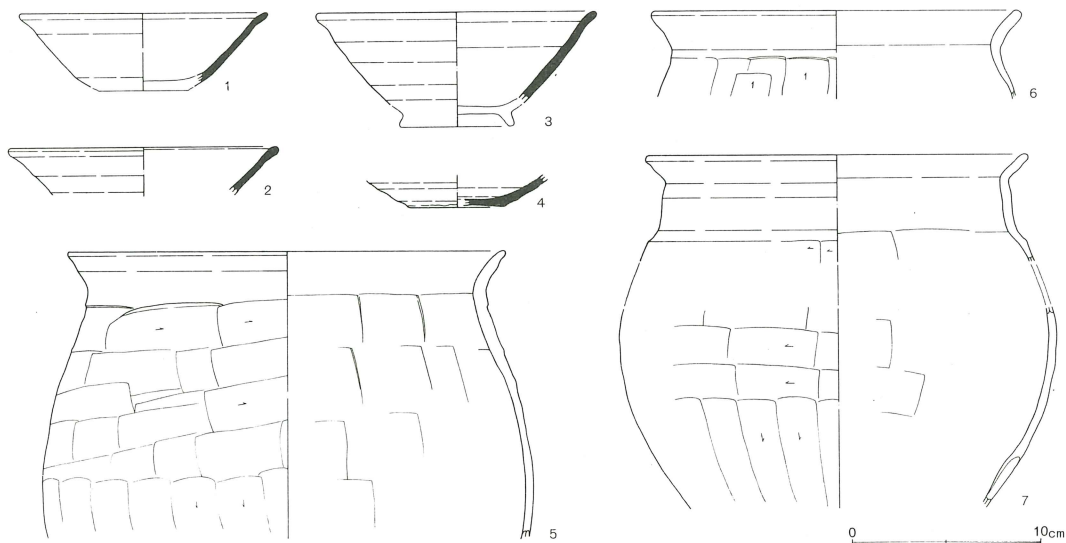
い。形態は長方形を呈し、規模は長軸3.88m、短軸2.90m、深さ7cmを測る。主軸方位はN-84°-Eを示す。

床面はかなり凹凸を持つ。覆土は黒褐色土単層で土層変化は観察できなかった。

カマドは東壁中央からやや北に寄った位置に設けられる。小規模なカマドで最大幅45cm、壁を56cm切り込む。底面は住居床面から段をもって立ち上がるため、壁外部分は煙道と考えた方が理解しやすい。断面観察では袖は確認されず、存否は不明である。

貯蔵穴及びピットは検出されなかった。SK03は上面に貼床され、本住居の掘方と考えられる。

出土遺物は土師器甕・台付甕と須恵器坏類が破片数で22点検出された。須恵器坏類は体部が直線的に延び、口縁部が肥厚する。焼成は全体に甘い(第66図1~4)。土師器甕のうち6は混入かもしれない。7は一応「コ」の字甕の形態を保っているが胴部器壁が厚い。5は口縁部が「く」の字状に変化している。稲荷前XIV期に比定される。



第66図 B区第13号住居跡出土遺物

B区第13号住居跡出土遺物観察表(第66図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.8)	3.9		AJ	D	淡黄	15%	No.11 床面 半還元焰焼成
2	坏	(14.0)	2.5		AB	A	灰	20%	No.1,2 床面
3	高台坏	(14.6)	4.8		ABCJ	D	灰黄	30%	覆土 焼き悪く、軟質 全体に風化
4	坏		1.7	(5.0)	AB	C	浅黄橙	20%	覆土
5	甕	(21.0)	15.0		AE	B	におい褐	20%	No.8 床面 内面風化
6	甕	(19.0)	4.6		ACJ	C	におい橙	10%	No.10 床面 内面風化
7	甕	(19.8)	18.5		ABCE	B	橙	15%	No.3~7 カマド底面

B区第14号住居跡(第65図)

E・F-1区に位置する。第13号住居跡に北壁側を切られているが、本住居の方が掘り込みが深い

ため床面は遺存する。また、南西コーナーを第1号溝跡に僅かに削られる。形態は略方形を呈し、規模は長軸4.16m、短軸3.96m、深さ約35cmを測る。主軸方位はN-7°-Wを示す。

床面はやや凹凸が目立つ。覆土は自然堆積を基本としているものと思われるが、第6層はロームブロックを霜降り状に含み、人為的な関与も想定される。また、14層は床面まで達しない土壌の痕跡と思われ、明らかに住居埋没後に掘り込まれている。

カマドは北壁のほぼ中央部に設置され、上面を第13号住居跡に削平されている。燃烧部幅70cm、壁を約70cm掘り込む。焚口は壁内にあり燃烧部底面は皿状に凹む。袖はローム混じりの暗褐色粘質土で構築される。壁溝は住居の凡そ東半分を巡り、深さ3~5cmを測る。貯蔵穴は存在しない。

ピットは5本検出された。P₁・P₂は覆土が近似するが柱穴とするにはやや浅い。P₃は覆土上層に焼土粒子が多量に含まれ、少なくとも柱穴とはならないであろう。P₄はSK02を切っており住居に伴わない可能性が強い。P₅は壁溝内に掘り込まれている。

土壌は2基検出された(SK01・02)が、住居に帰属する可能性がある。SK02は底面に炭化物、その上層に焼土を多量に含む暗褐色土が堆積していた。性格は不明。

出土遺物は少ない。器種としては土師器甕、須恵器坏類・蓋・壺があるが、全て小片である。第67図6の台付甕は住居を切る土壌上面から出土したもので伴うものではない。須恵器坏類は8世紀前半~中葉頃のもの为主体となる。

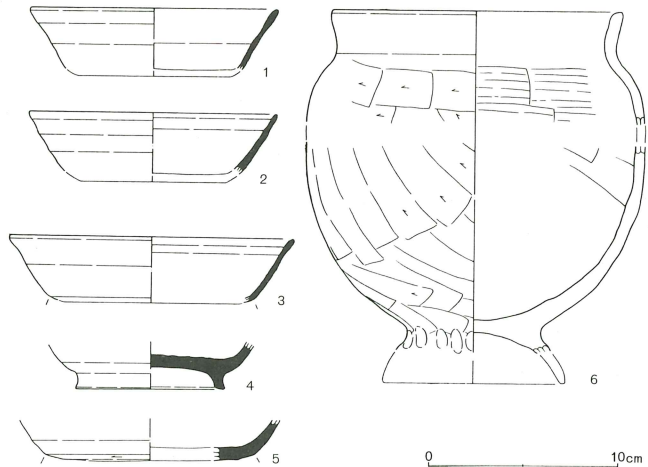
B区第14号住居跡出土遺物観察表(第67図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(13.0)	3.2		A B C	A	灰白	10%	覆土
2	坏	(13.0)	3.2		A B C	A	灰白	10%	覆土
3	坏	(14.8)	3.4		A B C	A	灰	10%	覆土
4	高台坏		2.5	(7.8)	B C	A	灰	25%	覆土 底部外面糸切り
5	椀		2.3	(11.0)	A B C	A	灰	15%	覆土 底部回転ヘラケズリ
6	台付甕	(15.0)	18.0		A B C J	B	にぶい橙	20%	SK02内No.10, 18 覆土上層

B区第15号住居跡(第68図)

調査区南西端部のF-1区に位置する。形態は長方形を呈し、規模は長軸3.80m、短軸2.70m、深さ15cmを測る。但し、当初の確認ラインは、北壁側が更に40cm程広く、カマド両側にテラス状の掘り込みが存在した可能性もある。主軸方位はN-7°-Wを示す。

床面はほぼ平坦である。住居覆土は、基本的にロームブロックを多量に含む黒褐色土(第1・1'層)



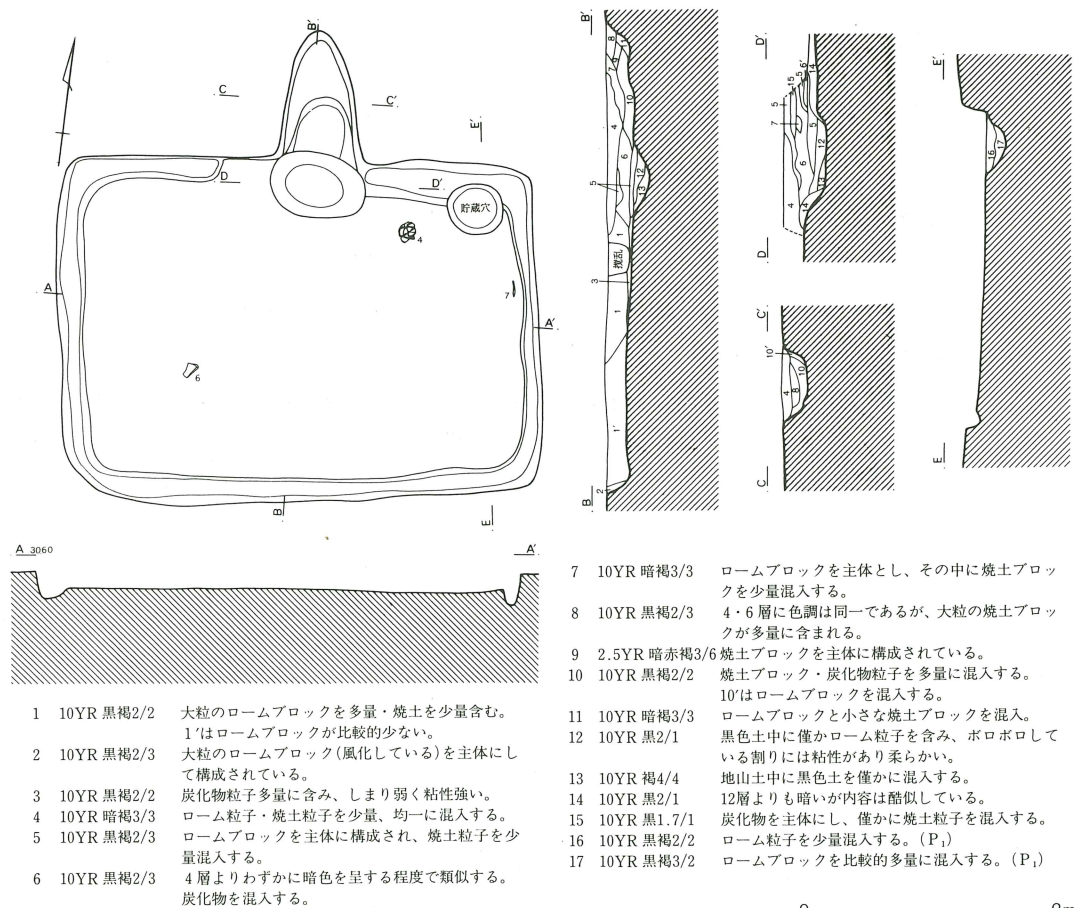
第67図 B区第14号住居跡出土遺物

の単一層で構成され、人為的に埋め戻された可能性が高い。また、数か所攪乱土層がみられ中世陶器が出土していることから、住居埋没後、中世段階の生活面として利用されたものと推定される。

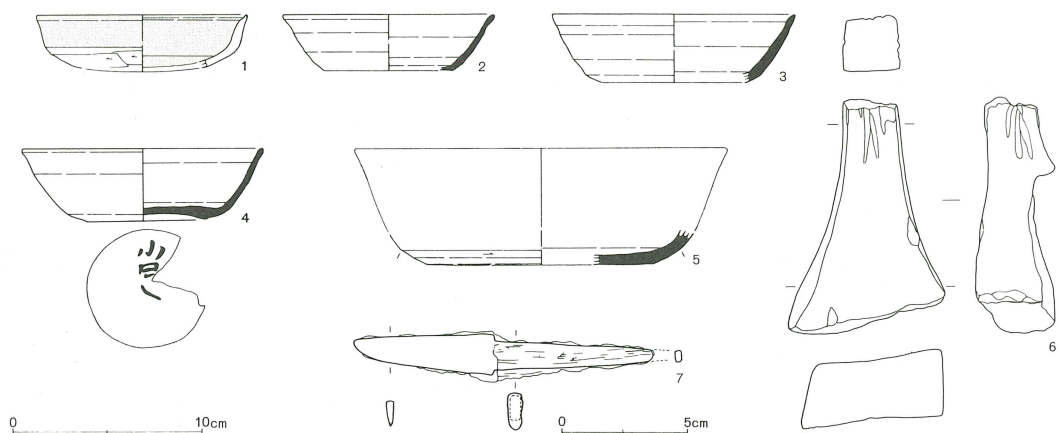
カマドは北壁中央部に位置する。全長150cm、最大幅72cm、壁外の掘り込みは100cmを測る。焚口部は楕円形土壙状を呈し、床面から12cmほど掘り込まれる。燃焼部と煙道部は明確な境界を作らず連続する。また、断面観察により、袖の有無を確認したがその痕跡は認められなかった。当初より存在しなかったのか、流失したのかは不明であるが土層中に粘土の堆積は認められない。若し、後者とするとロームブロックを多量に含む第5層がそれに相当するものであろうか。

貯蔵穴と思われる土壙は北東コーナーに位置する。径40cmほどの円形を呈し、深さ15cmを測る。ピットは確認できなかった。壁溝はカマド部分を除いてほぼ全周する。深さは一定せず東壁部が深く南壁部が浅い傾向にある。

出土遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・碗・蓋・甕・壺が44点検出された。その他に刀子と砥石が各1点、中世陶器が7点ある。主体を占めるのは須恵器杯類で、土師器杯と中世陶器は混入である。第69図3・4の須恵器杯と砥石(6)、刀子(7)は床面出土である。4の須恵器杯の底部外面には墨書「小口」が残される。7の刀子は両関式で柄部木質が遺存。稻荷前X～XI期頃と思われる。



第68図 B区第15号住居跡



第69図 B区第15号住居跡出土遺物

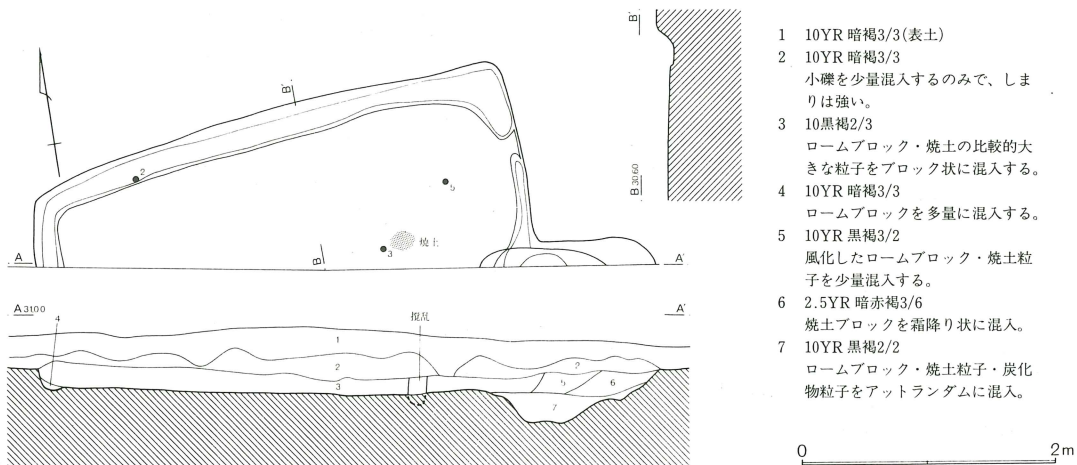
B区第15号住居跡出土遺物観察表(第69図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(11.0)	2.8		ABC	A	橙	15%	覆土 赤彩 混入
2	坏	11.0	2.9		ABC	A	灰	15%	覆土 底部回転糸切り
3	坏	(12.7)	3.6		ABC	B	灰白	15%	床面
4	坏	12.6	3.8	6.2	ABC	B	灰	60%	No.9 床面 底部外面に墨書
5	椀		1.7	(12.0)	ABC	A	灰	20%	カマド
6	砥石								床面 残長12.3,最大幅8.3cm 重量340g
7	刀子								No.4 床面 残長11.9cm 両関式

B区第16号住居跡(第70図)

調査区南西端部のF・G-1区に位置する。調査区外に大半が掛かり全容は不明である。形態は方形を呈するものと推定され、規模は長軸3.90m、残存短軸1.60m、確認面からの深さ5~9cmを測る。主軸方位はN-88°-Eを示す。

床面はほぼ平坦である。覆土はロームと焼土をブロック状に含む黒褐色土を基本としており大き

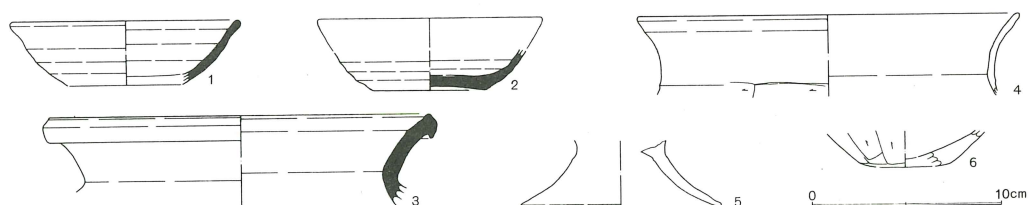


第70図 B区第16号住居跡

な土層変化は観察されない(第3層)。また、カマド前面の床面から約10cm浮いた位置に粘土板炉状の焼土が認められたが、住居に伴うものではなく性格も不明である。

カマドは東壁に設けられるが、調査区外に掛かり全体像は不明である。壁を約90cm掘り込んでいる。袖の有無について東壁に平行するラインで断面観察を行ったものの、その痕跡は確認できず当初から存在しなかった可能性が高いものと考えられる。焚口に相当する部分は床面から約20cm掘り込まれ、燃焼部は緩やかに立ち上がる。覆土の堆積状況からみると第7層は掘方と推定され、火床面は第7層上面であろう。壁溝は東壁で一部途切れる他は巡り、深さ約5cmを測る。壁溝底面には不規則な小孔が穿たれ凹凸が顕著である。貯蔵穴、ピットは確認されなかった。

出土遺物は極めて少なく、土師器甕・台付甕、須恵器坏・壺が破片総数で16点出土したに留まる。第71図2は須恵器坏底部で底部糸切り後無調整。4は所謂「コ」の字甕である。6は混入と推定される。出土遺物は良好な資料に欠けるが概ね9世紀前半代に位置付けられよう。



第71図 B区第16号住居跡出土遺物

B区第16号住居跡出土遺物観察表(第71図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	11.8	3.3		A B C	B	灰白	15%	カマド内
2	坏		2.1	(6.0)	A B C	A	灰白	35%	No.1 床面
3	壺	(20.0)	4.8		A B C	B	灰	10%	No.4 覆土(+10cm)
4	甕	(20.0)	4.3		A B E	A	橙	10%	覆土
5	台付甕		3.4	(10.3)	A E J	A	にぶい橙	45%	No.3 覆土(+5cm)
6	甕		1.9	(4.9)	A B E	A	橙	25%	覆土

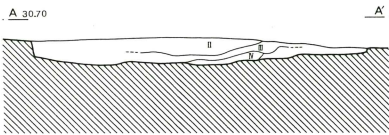
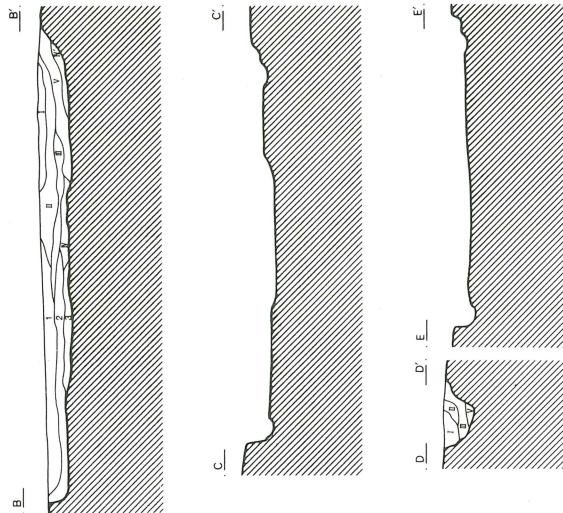
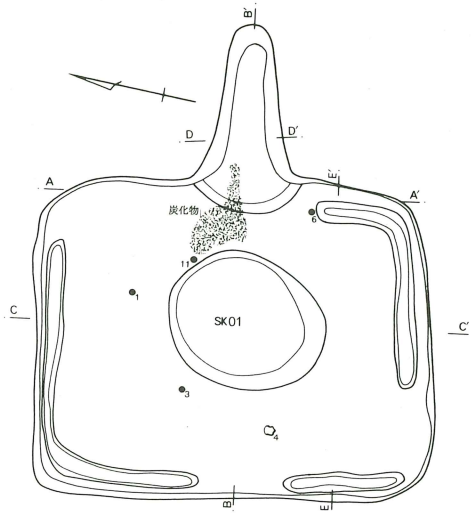
B区第17号住居跡(第72図)

調査区西部のE・F-2区に位置し、第5号方形周溝墓西溝を切って構築されていた。形態は長方形を呈し、規模は長軸3.12m、短軸2.54m、深さは部分的に異なるが5~20cmを測る。主軸方位はN-74°-Eを示す。

床面は平坦である。住居覆土は2層に分かれるが、カマド第III層が間層として存在するためで両層に大きな土層変化は認められない。

カマドは東壁に設置される。最大幅85cm、壁の掘り込みは大きく120cmを測る。焚口部は床面から5cm程凹む。燃焼部と煙道はそのまま続き明確な区別はない。袖は検出できなかった。袖に由来すると思われる土層は観察できず、当初より存在しなかった可能性が高い。また、カマド前面から焚口にかけて炭化物が薄く堆積していた。

壁溝は部分的に途切れる。壁面よりもやや内側に巡るが、建替えの痕跡は認められなかった。幅は10~20cm、深さは約5cmを測る。



- 1 10YR 黒褐2/3
焼土粒子・炭化物粒子・少量のローム粒子を混入する。
- 2 10YR 黒褐2/3
1層と類似するが、焼土粒子の量が少ない。
- 3 10YR 黒褐2/2
混入物は1層に類似するが、それぞれの粒子はより小さい。

- I 2.5YR 暗赤褐3/6
焼土ブロック・粒子を主体に構成される。
- II 10YR 黒褐2/2
1層に類似するが、各粒子は若干大きい。
- III 10YR 黒褐2/2
II層に類似。比較的多量に炭化物ブロック混入。
- IV 10YR 黒褐2/2
混入物は極めて少なく、わずかに焼土粒子を混入する。
IVはより混入物が少ない。
- V 10YR 黒褐3/2
焼土粒子と微量の炭化物粒子を混入する。

0 2m

第72図 B区第17号住居跡

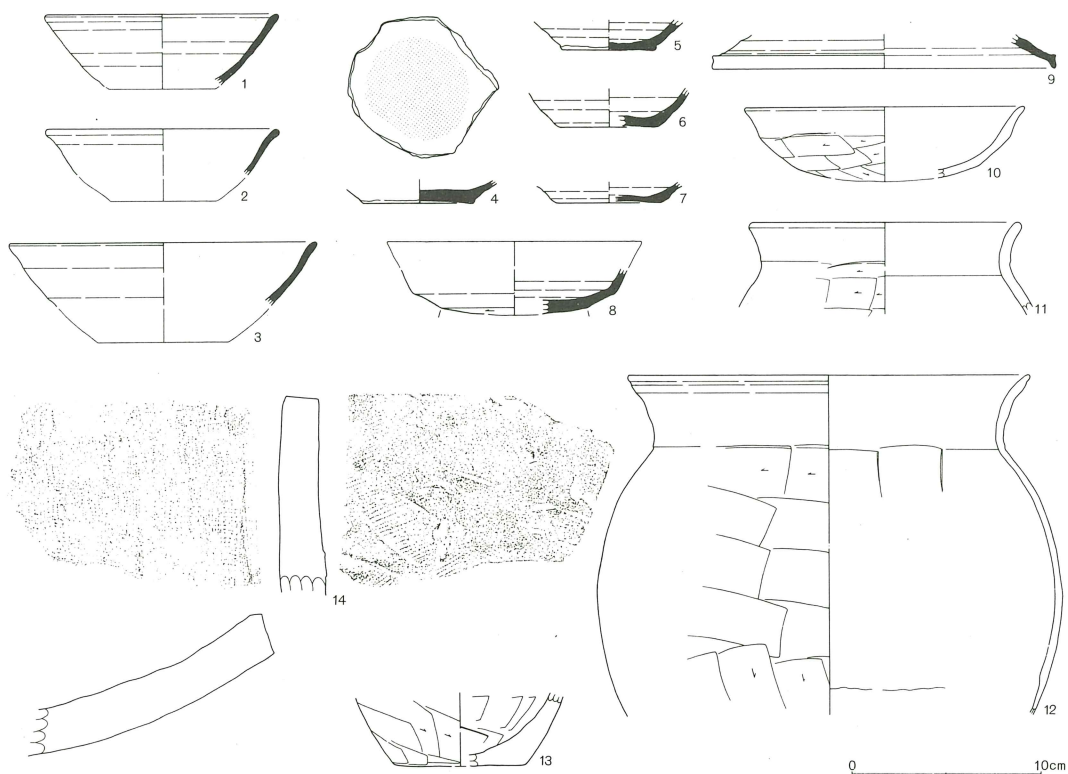
住居中央部には土壌が1基存在する。楕円形を呈し、規模は長径124cm、短径65cmを測る。深さは8cmと非常に浅い。上面の貼床は明確ではないが、一応床下土壌の可能性はある。貯蔵穴、ピットは存在しない。

出土遺物には土師器杯・皿・甕、須恵器杯・碗・蓋・甕と平瓦があり、破片数で104点を数える。時期的な纏まりがなく7世紀～9世紀までの遺物が含まれる。全て破片資料で出土状態が良好なものも少ないが、量的に主体を占めるのは須恵器杯で70点ある。

須恵器杯類は体部が直線的に延びるものが主体をなし、底部は径の小形化した糸切り底である(第73図1～7)。4は内面見込み部が著しく磨滅し転用碗の可能性はある。8、10～13は混入と推定される。14の平瓦は須恵質で杵板痕が観察される。凹面は布目、3×3cmあたり経糸16本、緯糸20本を数える。凸面の平行叩き後ナデ。端部はへラケズリ後ナデ。混入であろう。時期は確定できないが、主体となる須恵器杯の様相から稻荷前XIV期と考えておきたい。

B区第17号住居跡出土遺物観察表(第73図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	杯	(12.0)	3.7		A B J	A	灰	25%	No.10 床面 2片あるが接合しない
2	杯	(12.0)	2.4		A B C	B	灰	10%	覆土
3	碗	(16.0)	3.3		A B C	A	紫灰	15%	No.4 床面
4	杯		1.2	5.8	A J	A	灰黄褐	90%	No.1 覆土(+10cm) 転用碗と推定



第73図 B区第17号住居跡出土遺物

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
5	坏		1.6	(5.0)	ABC	B	灰白	20%	カマド 底部切離面2枚
6	坏		2.0	5.1	ABC	C	にふい黄橙	25%	No.22 覆土(+7cm)
7	坏		1.1	(5.5)	ABC	B	灰白	30%	覆土
8	坏		2.4	(7.8)	ABC	B	灰白	20%	覆土 底部回転ヘラケズリ
9	蓋	(18.0)	1.8		ABC	B	灰	5%	覆土
10	皿	(14.6)	3.7		AB	A	橙	20%	覆土 内面風化 無彩
11	小形甕	14.0	4.8		ABCE	B	にふい橙	15%	No.12 床面
12	甕	(21.0)	17.8		ABEF	C	にふい橙	10%	覆土 図上復元
13	甕		3.8	7.0	ABE	A	にふい黄褐	25%	覆土
14	平瓦					A	灰		覆土 須恵質

B区第18号住居跡(第74図)

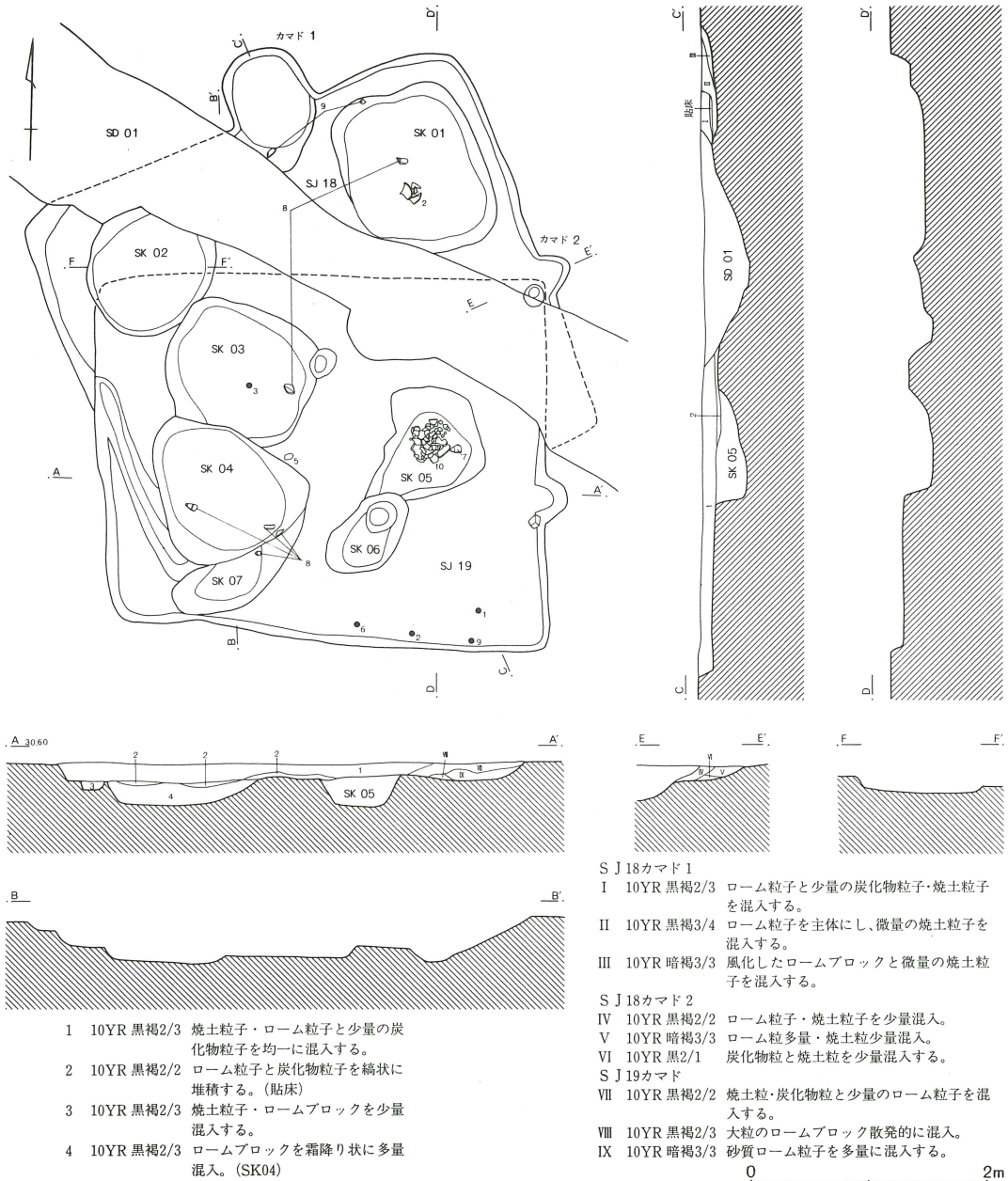
調査区西部のF-2区に位置する。第19号住居跡と第1号溝跡に切られ遺存状態は良くない。形態は方形を呈するものと推定され、規模は長軸4.00m、残存短軸3.34m、深さ10~15cmを測る。主軸方位はN-23°-Wを示す。

床面及び覆土の状態は遺存部分が少なく明らかにできない。

カマドは2基検出された。北壁に設置されたものを1号カマド、東壁のそれを2号カマドとする。1号カマドは全長104cm、幅75cmを測り、壁を54cm切り込んで構築される。断面観察に拠っても袖は確認できず既に消滅してしまったものと推定される。燃烧部底面は皿状に凹み、奥壁は緩やかに立

ち上がる。第I層下面に薄い貼床層が検出されたことから本カマドの方が古いものと推定される。2号カマドは壁を20cm余り切り込んでいるが、SD01とSJ19の攪乱が入り詳細は不明である。袖は断面観察によっても検出されなかった。

土壌は7基検出された(SK01~07)。SK01は不整長方形を呈し、規模は140×118cm、深さ12cmを測る。上面には貼床が認められず、2号カマドに伴う貯蔵穴とすることもできるが、やや大型である。SK02~06は上面に貼床が認められた。SK02については本住居構築段階の床下土壌、または掘方と考えるのが妥当と思われる。SK03~07は本住居に伴うのか第19号住居跡に伴うのか確認



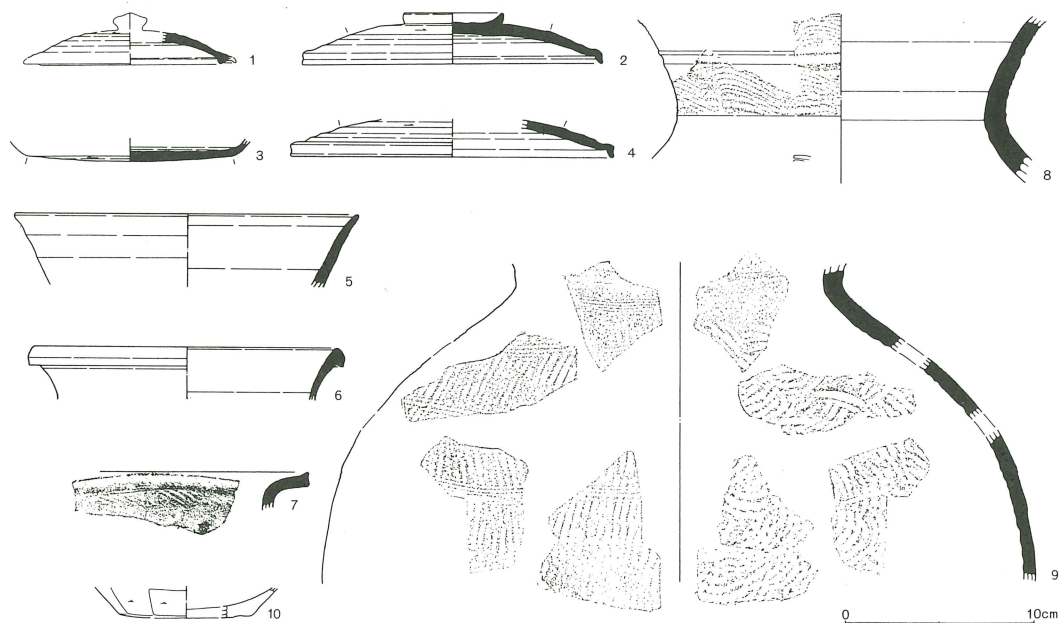
第74図 B区第18・19号住居跡

は得られなかったが、SK06・07まで本住居に含めると壁の推定ラインが著しく歪んでしまう。また、ピットは2本検出されているが、やはり何れの住居に伴うのか確定できない。

壁溝は西壁部で部分的に検出された。深さ約5cmを測る。

出土遺物は重複するSJ19と合わせて破片数で65点検出された。本住居に相当する部分から出土したものとして7点を図化した(第75図1~7)。

第75図1は覆土出土で本住居に伴う保証はない。小形のかえり蓋で、白色針状物質は確認できないが焼成等から在地産の可能性がある。2は環状つまみをもつ蓋で、平面的にはSK01内に位置するが周囲の床面レベルよりも約5cm浮いた位置から出土している。3は丸底風の須恵器坏底部で、全面回転ヘラケズリされる。SK02内から出土したもので、住居構築段階、またはそれ以前の所産と考えられる。5は磨鉢か。1の小形かえり蓋は7世紀代に遡るものと考えられる。他の土器様相から稲荷前V期~VI期に比定されよう。



第75図 B区第18号住居跡出土遺物

B区第18号住居跡出土遺物観察表(75第図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	蓋	(11.2)	1.7		AB	B	灰	10%	覆土 在地産の可能性あり
2	蓋	15.8	2.7		ABC	B	灰白	95%	No.65 覆土(+5cm)
3	坏		1.2	(11.0)	ABC	D	にぶい黄橙	20%	SK02覆土
4	蓋	(17.0)	2.0		ABC	B	灰	15%	覆土
5	磨鉢?	18.0	3.8		ABC	A	灰	10%	覆土 器種不明確
6	壺	(16.0)	2.7		AB	A	灰白	10%	覆土
7	鉢	(38.0)	2.0		AB	B	灰	5%	覆土
8	甕		8.8		ABC	A	灰	20%	No.16,60 SK01内(-1cm)+SJ19覆土(+9cm)
9	甕				ABC	A	灰		No.36他 SK01(-3cm)+SK02+カマド内
10	壺		1.5	(7.0)	ABE	A	にぶい橙	20%	カマド

B区第19号住居跡(第74図)

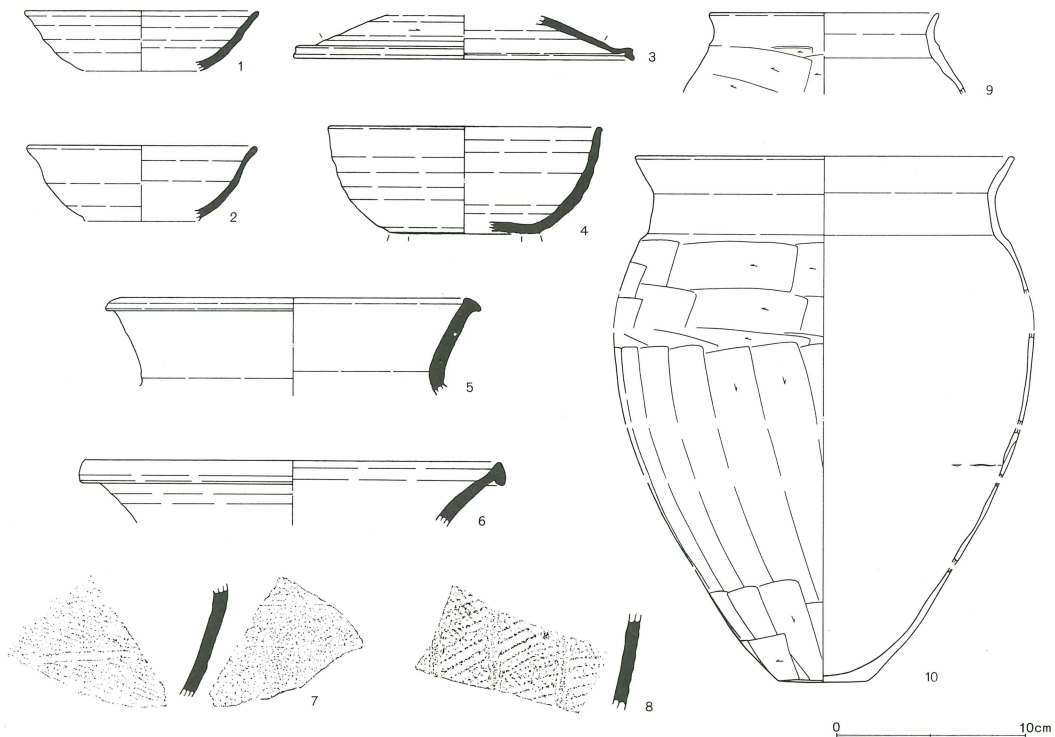
調査区西部のF-2区に位置する。第18号住居跡、第1号溝跡と重複し前者を切り後者に切られている。形態は長方形を呈するものと推定されるが北壁部分の立ち上がりは明確に検出できなかった。規模は南辺3.70m、西辺1.66mが確認され、深さは10~15cmを測る。東壁に直交するラインを基準にすると、主軸方位はN-88°-Eを示す。

床面はやや凹凸が顕著であるが、北壁部分は重複する第18号住居跡と同一深度で連続している。部分的に貼床(第2層)が認められ、主として土壌上部を覆っている。住居埋土はほぼ単一層で大きな土層変化は観察されなかった(第1層)。

カマドは東壁に設置される。小規模なカマドで幅40cm、壁外の掘り込みは僅か20cmほどである。焚口部~燃烧部の掘り込みはみられず床面から同一レベルで移行する。奥壁がそのまま燃烧部奥壁となるかどうかは明らかではないが、燃烧部自体は壁外に位置するものと推定される。カマド右袖に相当する位置には方柱状の礫が据えられていた。袖石と考えられる。左袖部には遺存していなかった。

土壌は5基(S K03~07)存在する。S K07は不明であるが他の土壌は上面に貼床が認められた。これらが本住居のものか否か確証は得られなかったが、重複する第18号住居跡に含めると推定壁ラインが大きく歪むこと、第18号住居跡の壁溝を切っているようにも見えることを微証とすると、本住居の床下土壌、または掘方と考える方がより妥当であろう。

貯蔵穴、壁溝は存在せず、ピットも伴うか否か不明である。



第76図 B区第19号住居跡出土遺物

出土遺物は第18号住居跡と合わせて破片数で65点検出された。完形品はないが、カマド前面から南壁にかけて比較的多く出土している。また、SK05上面に土師器甕の胴部破片が潰れたような状態で遺存していた。一応8点を図化した(第76図)。須恵器坏は浅身のもの(1)と深身で口縁部が外反気味のもの(2)がある。底部は遺存しないが他の破片をみると回転糸切り後無調整である。椀は底部調整を残すが口縁部は丸く収め、内傾する面を既に失っている(4)。土師器甕は典型的な「コ」の字甕である。床面出土は4と7のみでほとんどが住居廃絶段階かそれ以後の遺物と考えられる。須恵器の様相からみれば稲荷前XII期に比定されよう。

B区第19号住居跡出土遺物観察表(第76図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.2)	3.1	(6.2)	ABC	B	灰	25%	No.35 覆土(+9cm)
2	坏	(12.0)	4.0	(6.0)	ABC	A	緑灰	25%	No.28 覆土(+7cm)
3	蓋	(17.9)	2.3		ABC	B	灰白	30%	No.18 覆土(+20cm)
4	椀	(14.2)	5.6	(8.0)	ABC	B	緑灰	20%	No.37 覆土(+4cm)
5	壺	(18.3)	5.1		ABC	A	灰	10%	No.19 床面
6	甕	(22.0)	3.4		ABC	A	灰	10%	No.26 床面
7	鉢?				ABC	A	灰		No.48 床面
8	甕				AB	A	暗灰		No.21~24 SK04内覆土(-2~+10cm)
9	小形甕	12.0	4.3		ABE	B	橙	20%	No.31 床面 台付甕か?
10	甕	(19.6)	27.5	4.7	ABE	A	にぶい橙	40%	No.53 覆土(+4cm)

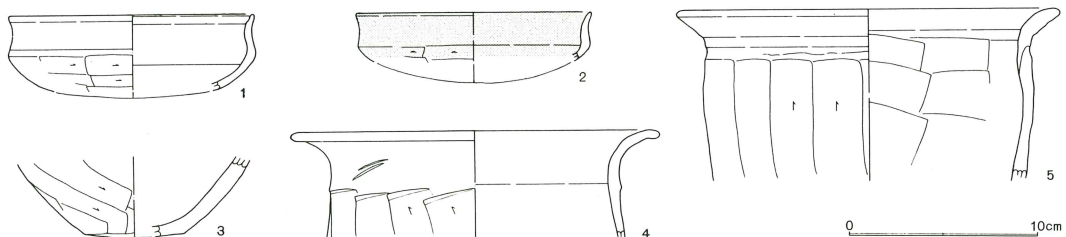
B区第20号住居跡(第78図)

調査区北西部のB-3区に位置する。最も近接する第11号住居から10m以上離れて単独で存在する。形態は長方形を呈し、規模は長軸3.20m、短軸2.66mを測る。深さは2~10cmと非常に浅い。主軸方位はN-77°-Eを示す。

床面は全体に堅く締まるが細かい凹凸が顕著である。

住居覆土は2層に分けられるが、層厚が薄く埋没状況は明確にできない。また、住居中央部に2か所、床面よりも僅かに浮いた状態で黄灰色を呈する生の粘土塊が検出された。性格は不明である。

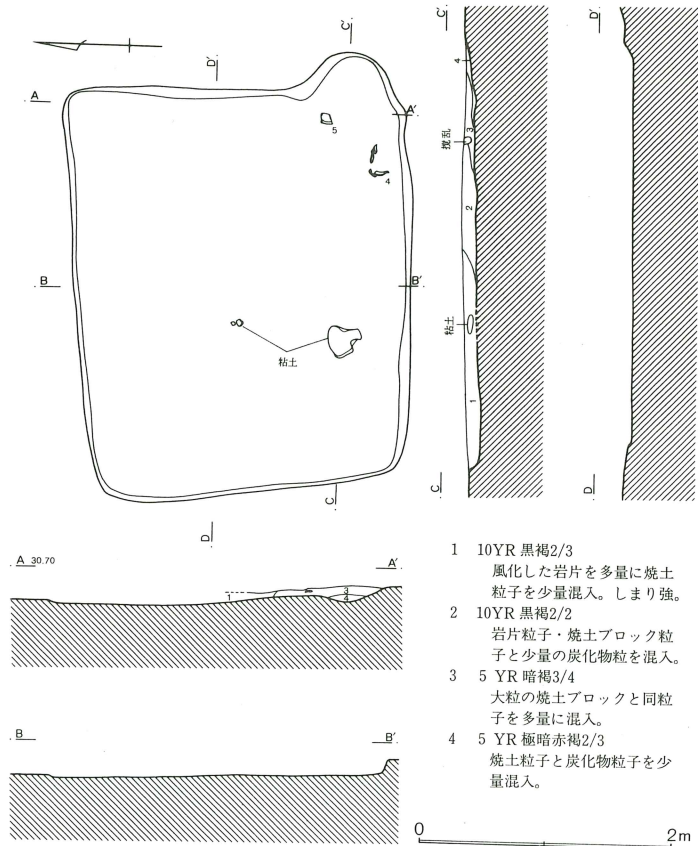
カマドは通例と異なり東壁の南隅に設置される。幅は80cmで壁外に36cm掘り込まれる。燃烧部は壁ラインを挟む位置がそれに当たるものと推定されるが不明瞭である。床面下の掘り込みはほとんどなく奥壁は緩やかに立ち上がる。煙道部は検出されなかった。袖部は横断面の観察によっても流出粘土等、その痕跡を見出すことはできなかった。特に右袖に関しては壁と接する位置にあるため



第77図 B区第20号住居跡出土遺物

事実上構築する余地があまり残されておらず、本来存在したものが否か、明確に判断することができなかった。仮に存在したにしても住居廃絶時には取り払われたものと推定される。貯蔵穴、ピット等の付属施設は存在しない。

出土遺物は全て土師器である。出土数を示すと、坏が15点、碗1点、甕5点、壺1点の計22点ある。第77図1・2は比企型坏で、前者は口縁部内面に沈線が巡るが赤彩痕は観察されない。後者は赤彩が施されているが口縁内面の沈線が認められない。4・5の甕はカマドに相当する位置から出土したもので胴部は縦方向のヘラケズリ調整。稻荷前II期頃の土器様相と思われる。



第78図 B区第20号住居跡

B区第20号住居跡出土遺物観察表(第77図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.8)	5.0		A B C E	A	にぶい橙	25%	覆土 無彩 接合しない3片から成る
2	坏	(12.4)	2.6		A B E	A	浅黄橙	10%	覆土 赤彩 口唇部沈線なし
3	甕		4.2	5.2	A B C	B	にぶい黄橙	25%	覆土
4	甕		18.6	5.6	A C J	A	にぶい黄橙	40%	No.5 カマド前面覆土(+5cm) 内面風化
5	甕	(19.6)	9.0		A B C J	A	にぶい橙	20%	No.1 カマド内覆土(+3cm)

B区第21号住居跡(第79図)

調査区北端のA・B-4・5区に位置する。住居北半は削平され詳細は不明である。形態は方形を呈するものと推定される。残存規模は長南辺5.06m、東辺3.40m、深さは南壁部で20cmを測る。主軸方位はN-22°-Wを示す。

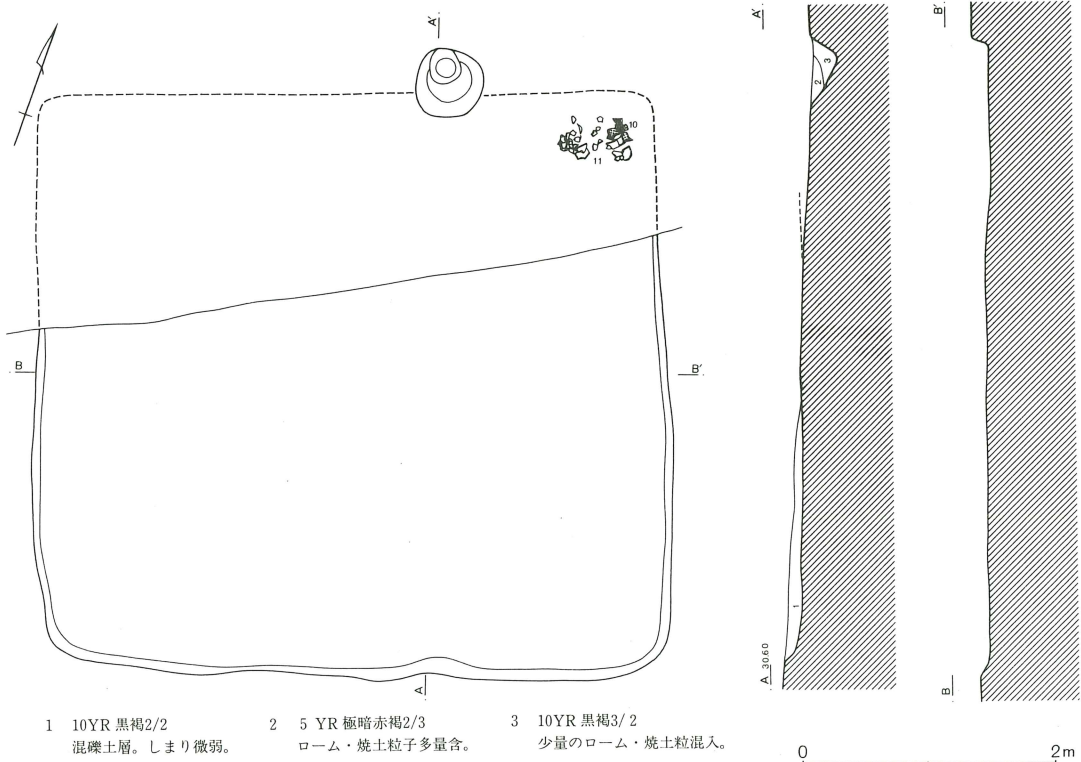
床面はほぼ平坦であるが、北半は削平され不明である。覆土の状況も不明であるが、残存部では礫の混入が非常に多い。

カマドは削平された北壁に存在したと思われる。直径50cmほどの円形を呈する土壇が燃烧部の一部と考えられる。埋土は焼土・ローム混じりの褐色土で充填されていた。

貯蔵穴も検出されていないが、やはり削平部に土師器を包含する浅い土壇状の掘り込みが認めら

れた。位置的にカマド脇の北東コーナーに相当し、おそらくこの部分に貯蔵穴が存在したものと推定される。ピット、壁溝は検出されなかった。

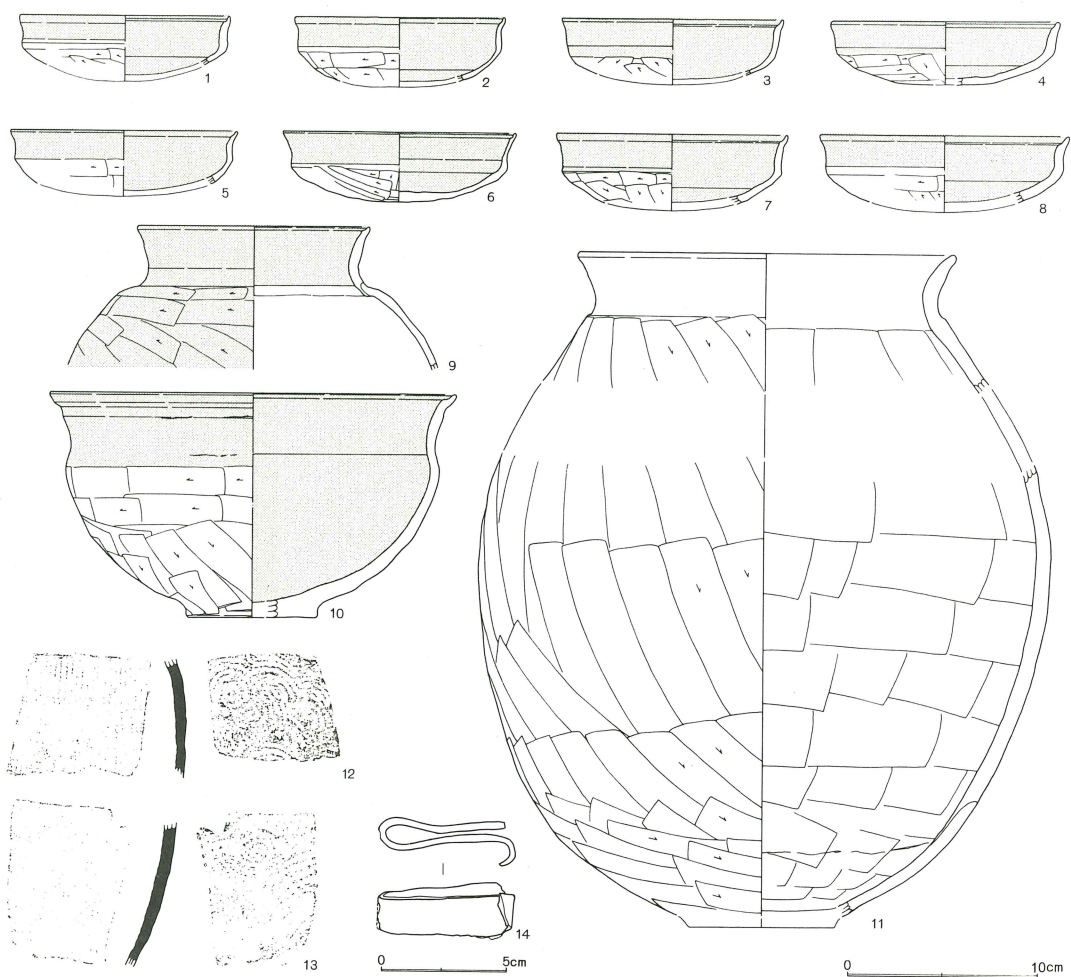
出土遺物には土師器坏・甕・小形甕・壺・鉢、須恵器坏・甕と鉄器があり、計23点検出された。須恵器坏は混入である。14点を図化した(第80図)。土師器坏は口縁部破片数で11点あるが全て小片である。比企型坏の系譜を引く一群(第80図2~4・8)と、口縁下の稜が明確で模倣坏の影響をも承けたと考えられる一群(1・5~7)がある。推定口径は11cm代が主体を占め、8のみ器壁が厚く口径も大きい。10の鉢と11の壺は貯蔵穴内と推定される位置から潰れたような状態で出土した。12・13の須恵器甕は同一個体と推定される。12は外面平行叩き後、カキ目を施す。内面青海波文。13にはカキ目が施されない。14は不明鉄製品。幅1.3~1.5cm、厚さ0.2~0.3cmの鉄板状をなし、折り重ねた状態で出土した。主体となる土師器坏の様相から、稻荷前III期に比定される。



第79図 B区第21号住居跡

B区第21号住居跡出土遺物観察表(第80図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(11.0)	2.6		ABC	A	にぶい橙	10%	覆土 赤彩
2	坏	(11.0)	3.4		ABC	A	にぶい橙	25%	覆土 赤彩
3	坏	(11.6)	2.9		AB	B	浅黄橙	10%	覆土 白色針状物質不明確 赤彩
4	坏	(11.8)	3.3		AB	A	橙	25%	覆土 白色針状物質不明確 赤彩
5	坏	(11.8)	2.8		ABC	A	浅黄橙	5%	覆土 赤彩
6	坏	(12.3)	3.7		ABC	A	橙	30%	覆土 赤彩
7	坏	(12.1)	3.6		ABC	A	にぶい橙	20%	覆土 赤彩



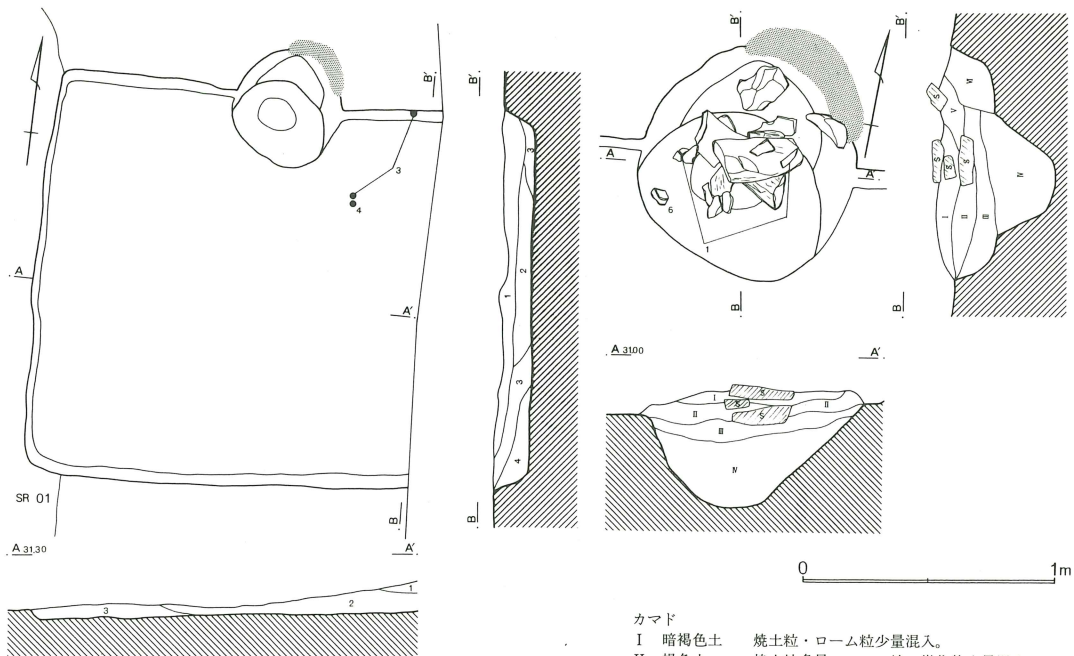
第80図 B区第21号住居跡出土遺物

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
8	坏	(13.0)	3.5		A	A	にぶい橙	10%	覆土 白色針状物質不明確 赤彩
9	壺	(12.2)	7.5		A B E	A	にぶい黄橙	15%	覆土 白色針不明確 赤彩
10	鉢	(21.3)	11.8	(6.8)	A B	B	橙	35%	No.1 貯穴内か 赤彩
11	壺	(19.6)	35.3		A B C J	A	橙	60%	No.2~5 貯穴内か 無彩
12	甕				A B	C	緑灰		覆土 内面青海波文
13	甕				A B	C	緑灰		覆土 内面青海波紋
14	鉄製品								覆土 長さ5.5,幅1.3~1.5cm

B区第22号住居跡(第81図)

調査区北辺のA・B-6・7区に位置する。第1号方形周溝墓の東溝を切って構築される。東壁は調査区外に延びるため正確な形状は不明であるが、形態は方形または長方形を呈するものと推定される。規模は西辺3.20m、南辺3.00m、確認面からの深さ8~15cmを測る。主軸方位はN-1°-Wを示す。

床面はやや凹凸をもち、埋土には礫が比較的多く混入する。堆積状況は自然堆積か。



- 1 暗黒褐色土 ローム粒・焼土粒少量混入。
- 2 暗黒褐色土 少量のローム粒と礫を混入。
- 3 暗黄褐色土 ローム粒少量混入。(砂質)
- 4 黄褐色土 ローム粒・礫多量混入。

- カマド
- | | |
|----------|---------------------|
| I 暗褐色土 | 焼土粒・ローム粒少量混入。 |
| II 褐色土 | 焼土粒多量・ローム粒・炭化物少量混入。 |
| III 黒色土 | 焼土粒・炭化物少量混入。 |
| IV 暗黒褐色土 | 礫(直径1~3cm)多量混入。(砂質) |
| V 赤褐色土 | 焼土粒多量混入。 |
| VI 黄褐色土 | 砂礫質。 |

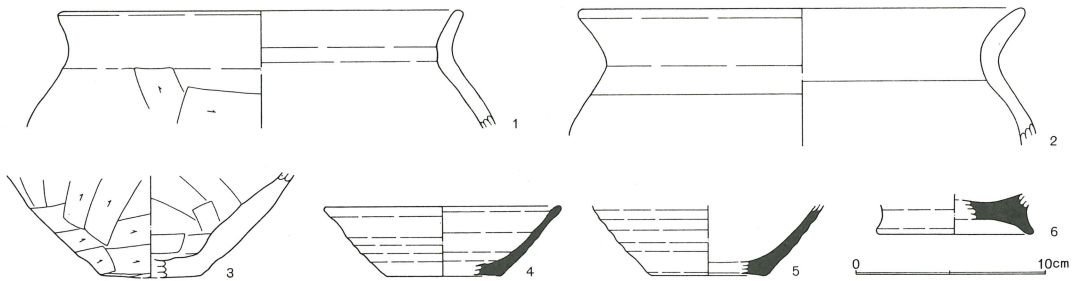
第81図 B区第22号住居跡・カマド

カマドは北壁に設置され、径約90cmを測る円形の土壇状を呈する。焚口部底面はピット状に深く掘り込まれ(床面下70cm)、燃烧部奥壁は急角度で立ち上がる。奥壁は強い火熱を受けており幅10cm余りの厚さで被熱、焼土化していた。また、カマド第III層上面に片岩系の礫が圧壊されたような状態で出土した。何れも被熱しておりカマド上部の架構材、または袖材として使用されたものと考えられる。

カマド埋土は全体に粘性がなく砂質が強い。第IV層は掘方、第III層が灰層または一次堆積土、第I・II・V層は天井部崩落土と考えられる。火床面は第IV層上面と推定される。壁内の袖は検出できなかった。当初から存在しなかった可能性が高い。

貯蔵穴、ピット、壁溝等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は土師器甕と須恵器坏類が破片総数20点出土したのみで非常に少ない。そのほとんどがカマド内から出土したものである。6点を図化した(第82図)。土師器甕は器壁が厚く、口縁部が「く」の字状に屈曲する。2の胴部調整にはヘラケズリが認められない。何れも胎土に白色針状物質を含み在地で焼成した土器であり、いわゆる武蔵型甕の範疇から外れる一群と考えられる。坏類(4~6)はロクロ整形されてはいるものの、焼成が甘く酸化焰焼成に近い一群である。色調・胎土も純然たる須恵器とは程遠く、ロクロ整形土師器として区分すべきかもしれない。稲荷前XIV期に位置付けられよう。



第82図 B区第22号住居跡出土遺物

B区第22号住居跡出土遺物観察表(第82図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	甕	20.8	6.3		ABC	B	灰黄褐	20%	カマドNo.3,5 覆土 胴部外面ケズリか
2	甕	23.2	7.2		ABC	A	橙	20%	カマド内覆土
3	甕		5.5	5.4	ABC	C	にふい橙	20%	No.1,2 カマド内覆土
4	坏	(12.4)	3.7	6.0	ABC	D	褐灰	20%	No.3 カマド内覆土 土師質
5	椀		3.7	(6.0)	ABC	C	浅黄橙	15%	カマド 土師質
6	高台椀		2.1	8.0	BC	B	灰オリブ	20%	No.4 カマド内覆土 土師質

B区第23号住居跡(第83図)

調査区西南部のF-3区に位置し、重複する第24号住居跡に南壁部を切られている。形態は方形を呈するものと推定される。非常に小形の住居跡で規模は長軸2.14m、短軸2.12m、深さ5~10cmを測る。主軸方位はN-87°-Eを示す。

床面は凹凸が顕著で一定しない。覆土は基本的にローム粒子を均質に含む褐色土で構成され、大きな土層変化はみられない。おそらく人為的な埋め戻しによる堆積と推定される。

カマドは東壁に設置される。幅65cm、壁を60cm切り込んでいる。燃烧部は壁外に位置し、奥壁は緩やかに立ち上がる。袖は全く痕跡を留めず、当初より存在しなかった可能性が高い。

土壌は2基検出された(S K01・02)。何れも上面に貼床され、住居に伴う床下土壌と考えられる。貯蔵穴等の施設は検出されなかった。

出土遺物は土師器坏体部と須恵器坏底部細片が各1点出土したのみで、図化可能な遺物はない。正確な時期決定もできないが、住居形態から推しておそらく9世紀以降であろう。

B区第24号住居跡(第83図)

F-3区に位置する。第23号住居跡と切り合い関係は本住居跡の方が新しいものと判明した。形態は長方形を呈し、規模は長軸2.92m、短軸2.46m、深さ5~10cmを測る。主軸方位はN-88°-Eを示し、重複する第23号住居跡とほぼ一致している。また、カマドの設置位置や第23号住居跡の埋土の状況からも、第23号住居跡から本住居へ直接的に建替えた可能性が高いものと考えられる。

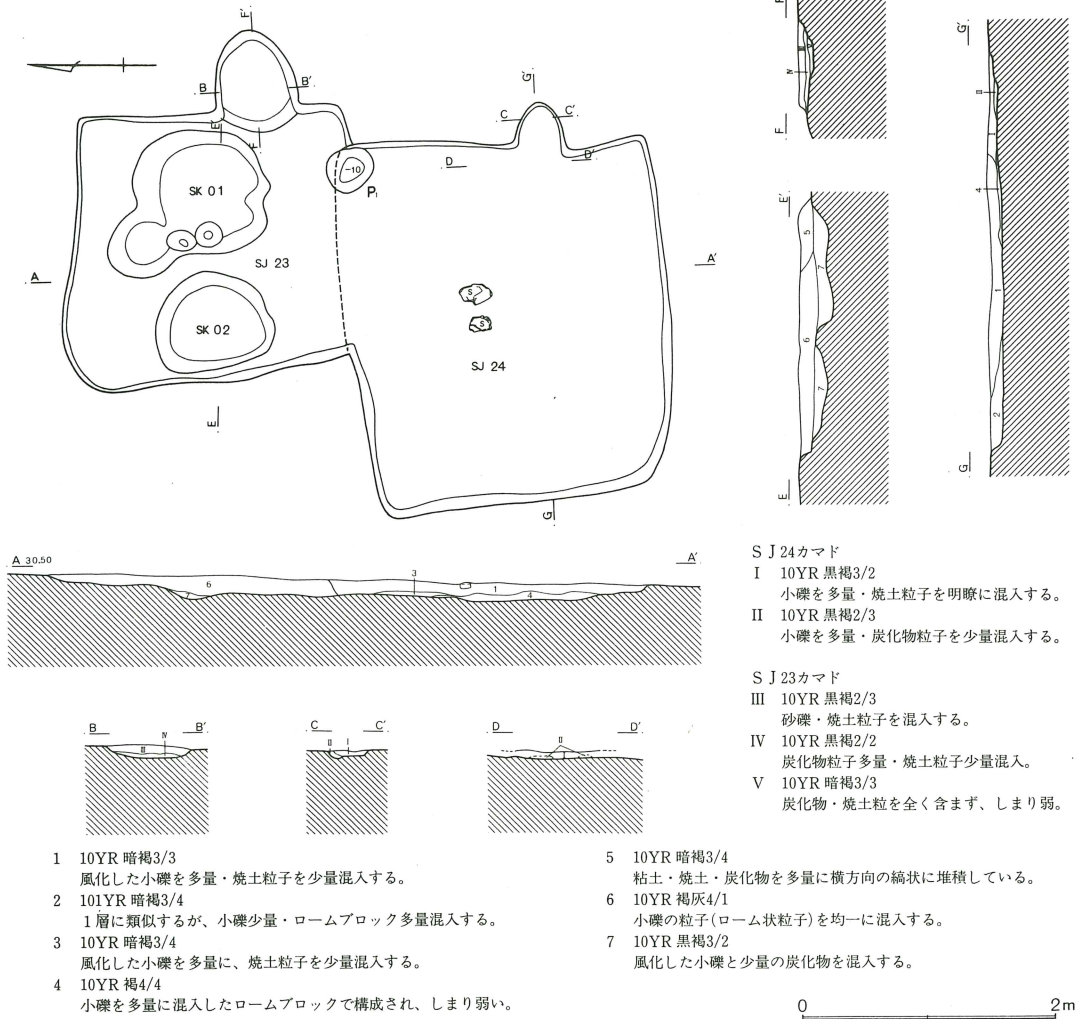
床面はやや凹凸が顕著である。掘方をみると中央部が低い、この部分には小礫混じりのロームで貼床されていた。覆土は基本的に暗褐色土単層で土層変化に乏しい。

カマドは東壁に設置される。幅42cm、壁を約30cm切り込んで構築されるが、底面は床面と同一深

度で連続する。袖の有無について断面観察を試みたが、その痕跡は全く見出せなかった。当初より存在しなかった可能性がある。底面、側面共に特に被熱した部分は観察できなかった。

ピットは北東コーナーに1本検出されたが、伴うか否か不明である。

出土遺物は住居中央部の床面に礫が2点残されていたが、土器類は全く検出されなかった。時期も不明とせざるを得ないが、おそらく9世紀以降と推定される。



第83図 B区第23・24号住居跡

B区第25号住居跡(第84図)

調査区南西部のF-4区に位置する。形態は不整形を呈し、規模は長軸4.40m、短軸3.70m、壁高は東壁～北壁部で最も深く10cm、南西コーナー付近では床面が露出した状況であった。主軸方位はN-12°-Wを示す。

床面は概ね平坦であるが、全体に南西部で高く北東側に向かって緩く傾斜していた。住居覆土は2層に分層される。両層共に風化礫を多量に含む暗褐色土で構成され基本的な埋土は同様であった。

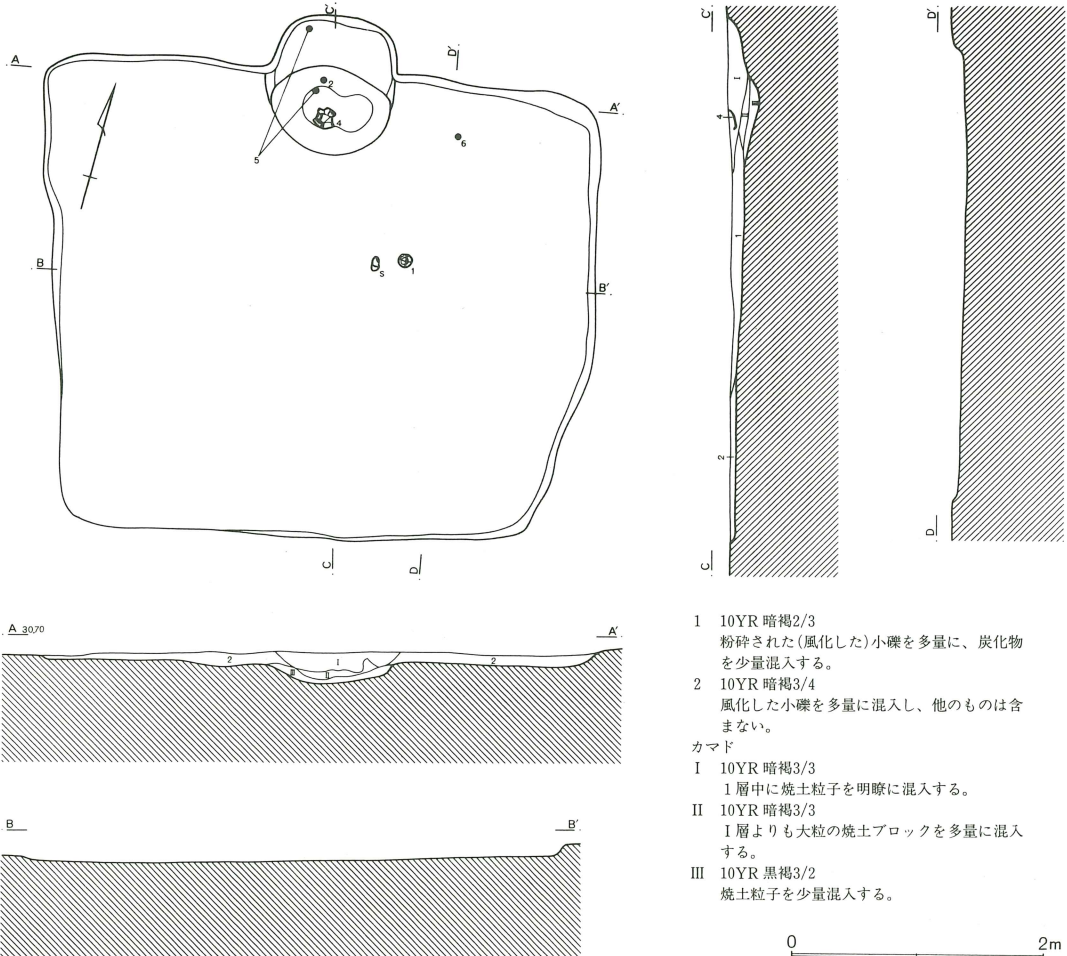
層厚が薄いこともあり堆積環境の詳細は不明である。

カマドは北壁中央に設置される。規模は全長110cm、幅100cmを測り、壁外に40cm掘り込まれていた。焚口部は床面下約10cm掘り込まれ、平坦な燃焼部に続く。燃焼部奥壁はやや角度をもって立ち上がるが、煙道部は削平されており不明である。

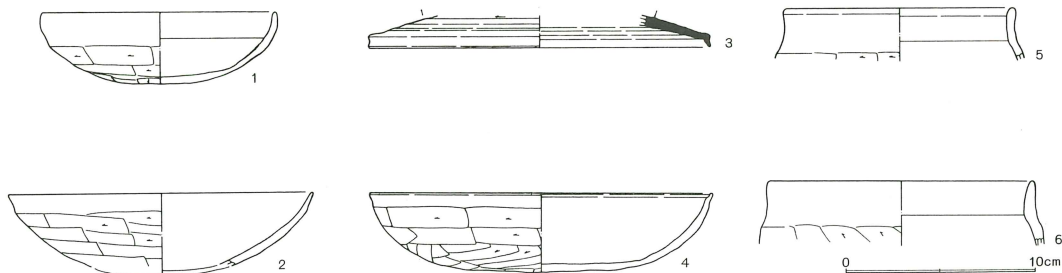
カマド覆土の第I・II層は天井部崩落土である。第IV・V層については詳細不明。袖は断面観察によっても検出できなかった。

貯蔵穴、ピット等の付属施設は確認されなかった。

出土遺物は極めて少なく、器種としては土師器坏・小形甕、須恵器蓋がある(第85図)。1はいわゆる北武蔵型坏で、床面から正位に置かれた状態で出土した。2・4はカマド内の天井部崩落土中から出土した。大形の坏で、後者は口縁部内面に沈線をもつが、平底風となり赤彩は確認できない。胎土中の白色針状物質の有無は不明瞭であるが在地産と思われる。土師器坏類はいずれも住居跡に伴う遺物と考えてよく、その様相から稲荷前V期に比定される。



第84図 B区第25号住居跡



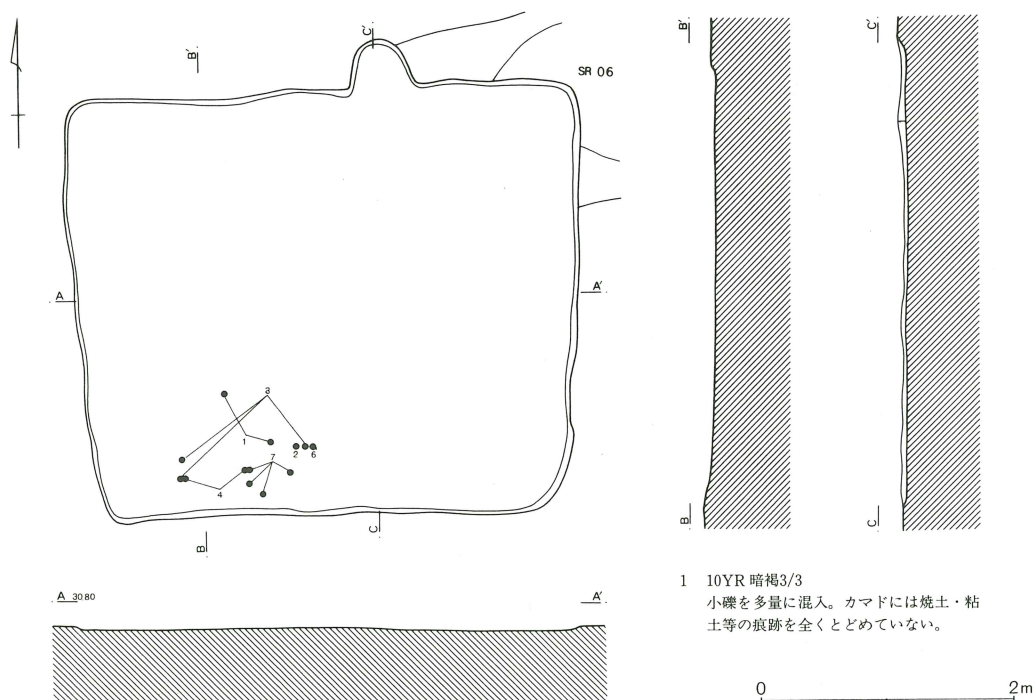
第85図 B区第25号住居跡出土遺物

B区第25号住居跡出土遺物観察表(第85図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	12.3	3.8		ABE	A	橙	80%	No.13 床面 北武蔵型
2	坏	(16.0)	3.8		AB	B	橙	20%	No.5 カマド内覆土 内面風化 無彩
3	蓋	(18.0)	1.7		ABC	A	灰白	10%	覆土
4	坏	(18.0)	4.1		A	A	にぶい橙	70%	No.7 カマド内覆土 無彩
5	小形甕	(12.0)	2.8		ABJ	A	にぶい橙	15%	No.1,6 全体に風化
6	小形甕	(18.0)	3.3		A EJ	C	にぶい橙	25%	No.11 床面 風化進んでいる 混入か

B区第26号住居跡(第86図)

F-4区に位置する。第6号方形周溝墓南溝上部に構築される。形態は長方形を呈し、規模は長軸4.10m、短軸3.40m、深さ5cmを測る。主軸方位はN-3°-Wを示す。



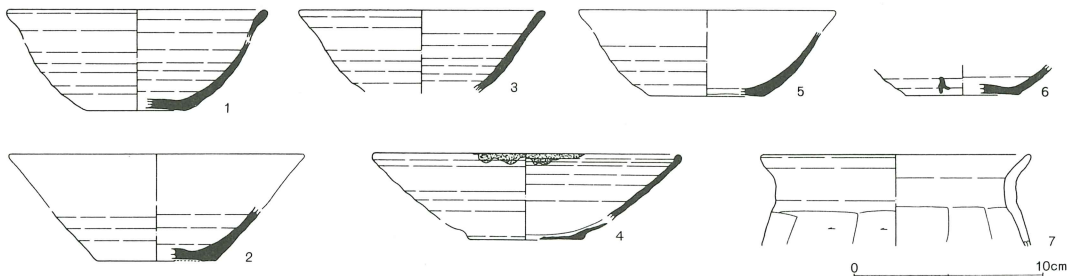
第86図 B区第26号住居跡

床面は概ね平坦である。覆土は小礫を多量に混入する暗褐色土で構成されるが、深度が浅く堆積環境は不明である。

カマドは北壁中央からやや東に寄った位置に設置される。壁ラインで幅50cmを測り、35cm壁を切り込んでいる。底面は床面と同一深度で続き、埋土も変化ない。焼土・粘土等の痕跡は全く留めていなかった。この状況からみると、床面と認識した面は掘方で、床面自体は既に削平されたと考えた方が良くかもしれない。

貯蔵穴、ピット等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は破片数で16点と非常に少ない。器種としては土師器甕、須恵器坏類・蓋・甕と中世の在産陶器と瀬戸美濃系卸皿がある。中世陶器類は明らかな混入である。このうち7点を図示した(第87図)。須恵器坏類は底部糸切り後無調整で、1は口縁部と体部が直接接合しない。4も同様であるが、復元器形にやや不安がある。或いは蓋かもしれない。口縁部には油煙が付着する。6の体部に墨痕が残るが判読できない。稻荷前XIII～XIV期の住居跡と思われる。



第87図 B区第26号住居跡出土遺物

B区第26号住居跡出土遺物観察表(第87図)

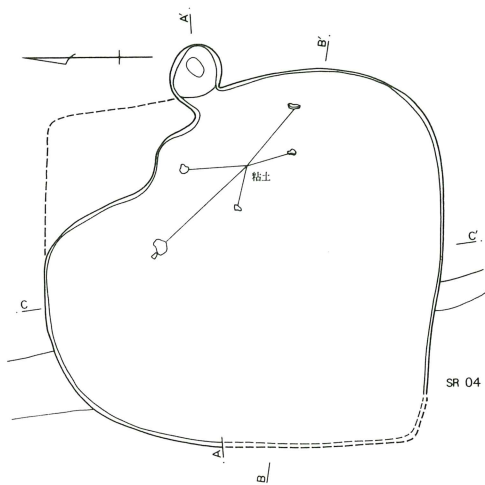
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	碗	(13.4)	5.3	(5.2)	A C	B	灰白	20%	No.1, 19 床面
2	碗		2.9	(6.3)	A J	B	灰白	15%	No.17 床面 底部剥落
3	坏	(12.8)	4.3		A B J	A	灰	20%	No.6, 7, 16 床面 細砂粒含有多
4	坏	(16.0)	4.5	(6.0)	A B	B	灰白	20%	No.7, 13 床面 口縁部に油煙付着
5	碗		3.3	(6.0)	A B C	D	にぶい黄澄	40%	覆土
6	坏		1.6	(6.0)	A C	B	灰白	20%	No.16 床面 体部外面に墨書あり
7	小形甕	(14.0)	4.8		A B E J	C	にぶい澄	30%	No.11～14 床面 器壁厚い

B区第27号住居跡(第88図)

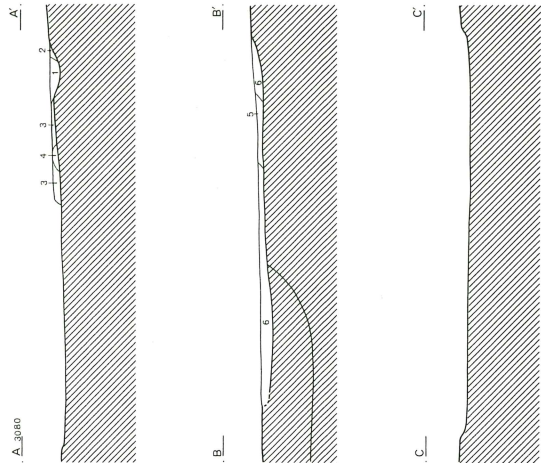
E-5区に位置する。第4号方形周溝墓の西溝上部から方台部にかけて構築されていた。形態は本来方形を呈するものと推定されるが、大きく歪んでいる。規模は長軸3.14m、短軸2.80m、深さ5～10cmを測る。主軸方位は基準ラインが見出せず不明とせざるを得ないが、概ね東を指向する。

確認された底面は凹凸が顕著で、北東部は既に削平されていた。或いは床面は既に削平され、掘方が僅かに残存した可能性もあろう。また、黄褐色の生粘土が数か所床面に遺存していたが、性格は不明である。深度が浅いため堆積環境も明らかにできなかった。

カマドは東壁に設置される。長さ40cm、幅42cmを測る浅い土壇状をなす。埋土には焼土・炭化物は



- 1 10YR 黒褐2/3 風化した小石を少量含む。
- 2 10YR 褐4/4 粘質ロームをブロック状に混入し、しまりは弱くボロボロしている。
- 3 10YR 暗褐3/3 1層よりも明るい。風化粘質ローム土を少量混入する。



- 4 10YR に近い黄褐5/4 混入物を全く含まない粘土。
- 5 10YR 黒褐3/2 2層よりも多くの粘質ロームを混入する。
- 6 10YR 黒褐2/3 風化した粘質ローム土多量・礫少量混入。

0 2m

第88図 B区第27号住居跡

含まれていなかった。

貯蔵穴、ピットは検出されなかった。

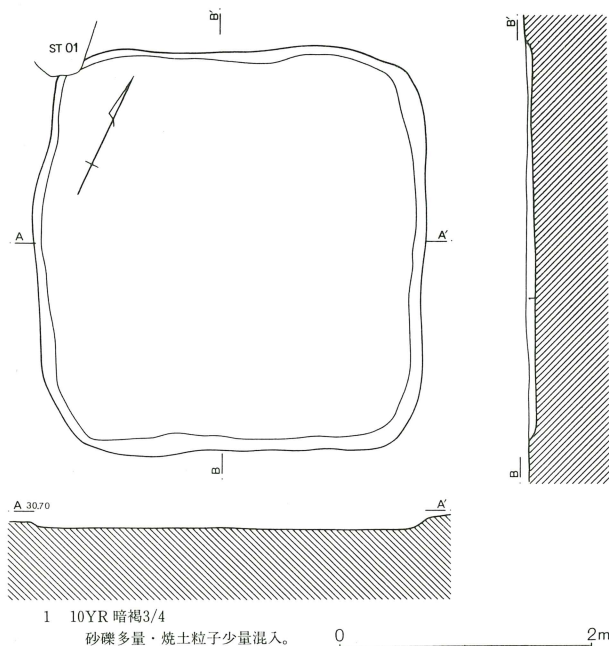
出土遺物は土師器小形甕・甑、須恵器蓋・甕・壺の細片が14片出土したが、図示できるものはない。時期の限定も難しく、大きく古墳時代後期から平安時代とするほかない。

B区第28号住居跡 (第89図)

E-5・6区に位置する。北西コーナーを第1号火葬墓に切られている。形態は方形を呈し、規模は長軸3.14m、短軸3.10mを測る。深さは2～6cmと極めて浅い。主軸方位は北壁に直交するラインを基準にするとN-25°-Wを示す。

床面はほぼ平坦である。覆土は小礫混じりの暗褐色土単層で大きな土層変化は観察されなかった。

カマドは確認されなかった。焼土や粘土の散布する箇所もみられなかったことから、おそらく当初から存在しなかったものと考えられる。貯蔵穴、ピット等の付属施設も存在せず、通常の

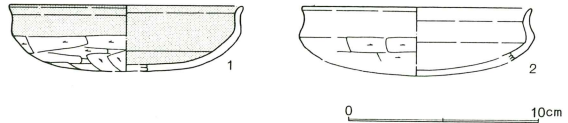


- 1 10YR 暗褐3/4 砂礫多量・焼土粒子少量混入。

0 2m

第89図 B区第28号住居跡

住居跡として扱うには問題があるかもしれない。



第90図 B区第28号住居跡出土遺物

出土遺物は少なく、破片数で8点に過ぎない。器種としては土師器坏・甕・壺があり、須恵器は含まれない。図示した2点の坏は所謂比企型坏であるが、何れも口縁部内面に沈線をもたない(第90図)。稻荷前II期に比定される。

B区第28号住居跡出土遺物観察表(第90図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.2)	3.5		AB	B	にぶい橙	25%	覆土 白色針の有無不明瞭 赤彩
2	坏	(12.0)	2.8		ABC	B	にぶい橙	10%	覆土 無彩

B区第29号住居跡(第91図)

F-5区に位置する。南壁部は第30号住居跡に切られているが、本住居の掘り込みが深いために床面は残存する。また、床面精査時に土壌が1基検出され(S K06)、住居よりも新しいものと判断された。平面形態は整った方形を呈し、規模は一辺が4.92m、深さ約15cmを測る。主軸方位はN-84°-Eを示す。

床面はほぼ平坦である。住居覆土は4層に分けられた。第3層を分断するようにロームブロックが多量に含まれる層(第4層)が形成されており、堆積過程に人為的関与が窺われる。

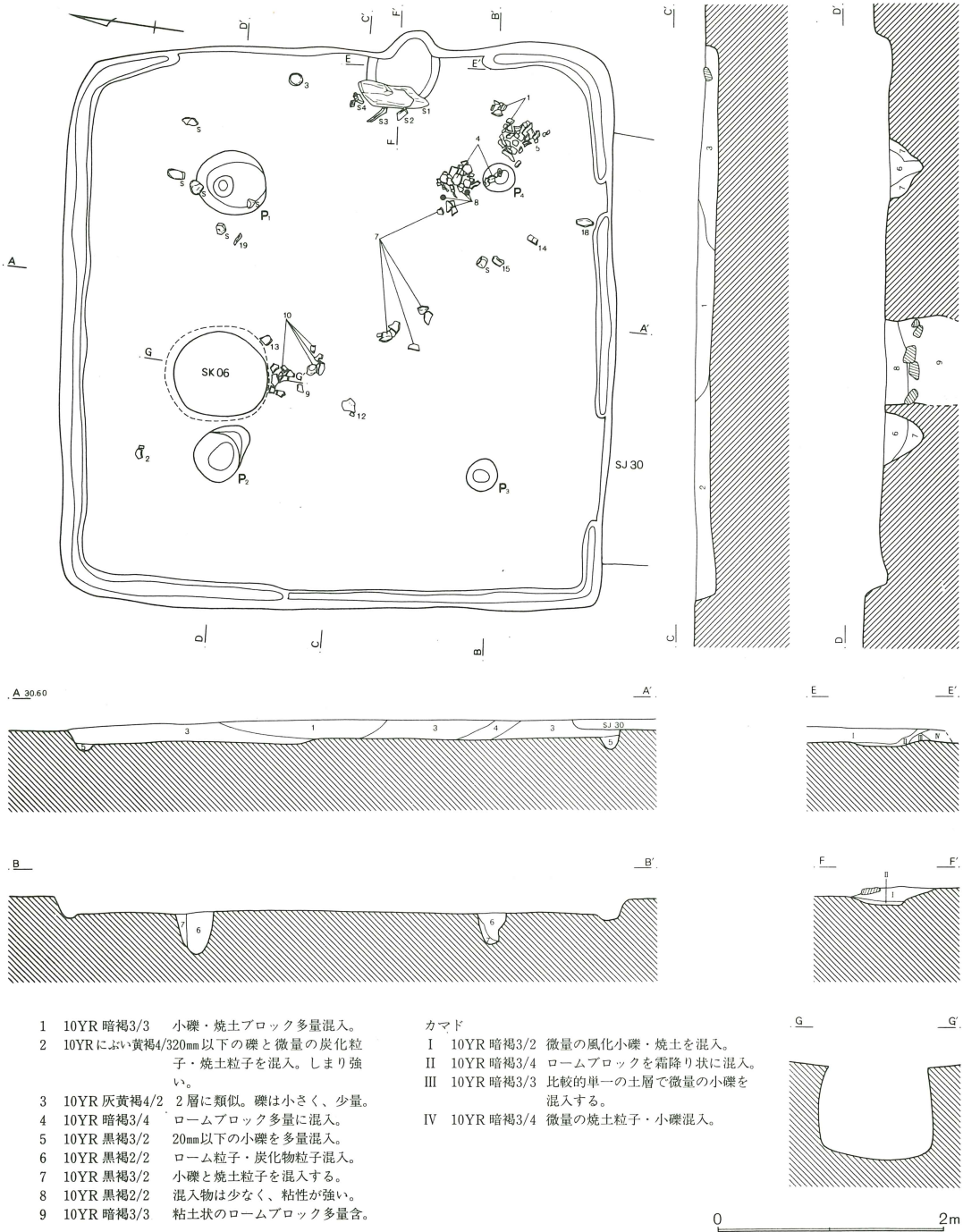
カマドは東壁中央部よりやや南に寄った位置に設置される。壁を20cm程切り込んで構築され、燃烧部の大部分は壁内にあるものと考えられる。床面下の深さは約10cmで、壁に向かって半円形に掘り込まれている。壁に平行するラインで断面観察を行った結果、右袖(南側)に相当する部分には暗褐色土の高まりが確認された。袖構築材と推定されるが粘土は使用されていない。左袖は検出されず既に流出したものと考えられる。また、焚口と推定される部分には長さ70cm、幅20cm程の片岩系の平石(S 1)とその周囲に角礫が3点(S 2~4)が検出された。S 2とS 4は斜めに傾いではいるものの据えられた状態であり、根元の位置はほぼ原位置を保っているものと判断される。おそらくS 1はカマド天井部架構材、S 2とS 4はS 1を支えた袖部の立石と推定される。S 2とS 4間の距離は35cmを測り、おそらくこれが焚口の幅と考えてよからう。S 3はどちらかの袖石の破片と推定される。

ピットは4本検出された。深さは29~41cmを測り、整った配置から4本主柱穴と考えられる。

壁溝は幅約20cm、深さ5~10cmを測り、カマドの周囲と南壁部で途切れる箇所がある。貯蔵穴は存在しない。

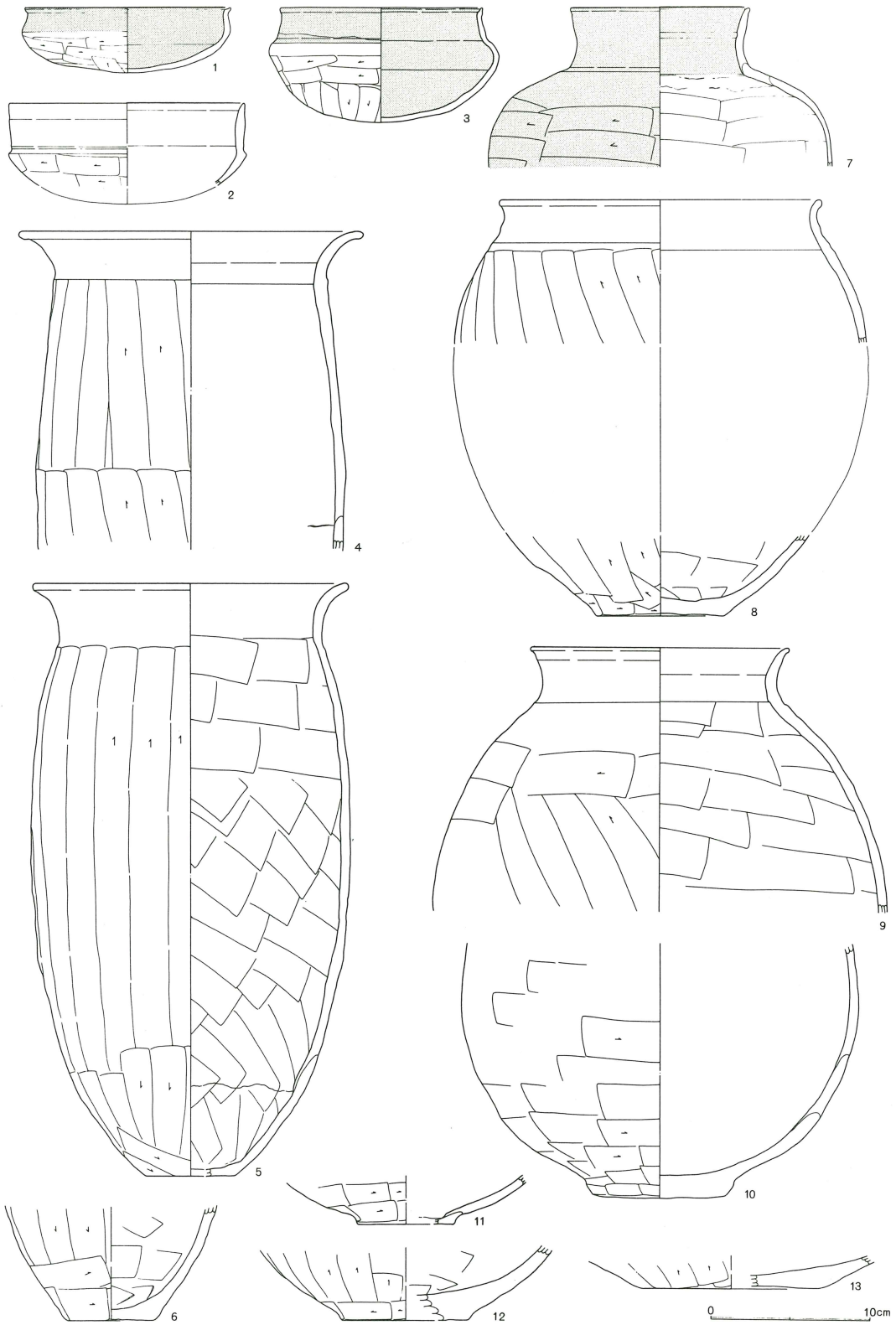
出土遺物は土師器の坏・椀・甕・壺、須恵器坏・蓋・甕・鉄鉢形、緑釉椀、中世在地産陶器片が検出された。このうち、須恵器、緑釉陶器と在地産陶器は明らかに混入である。土師器の口縁部破片数を記すと坏7、椀1、甕13、壺3点となる。

遺物分布は南東コーナー部と住居中央に比較的纏まる傾向がある。ほとんどの遺物が床面よりも数cm浮いたレベルから出土している。第92図1・4・5・8はカマド右側のコーナー付近に集中していた。3の椀は完形品でカマド左側の床面よりも5cm浮いた位置に正位で出土した。2の土師器坏は

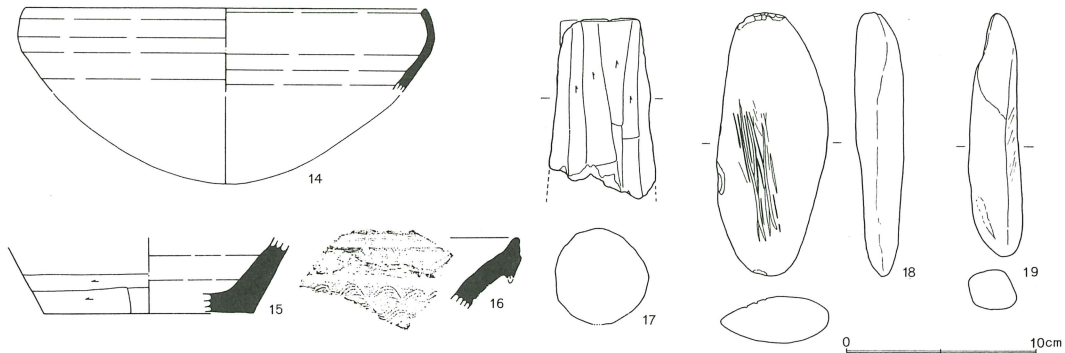


第91図 B区第29号住居跡

混入と考えた方がよいであろう。覆土から出土した。5の甕は胴部に膨らみをもち、長胴化が極限に達する以前のタイプである。第93図17は土製支脚で、P₄内に落ち込むような状態で出土した。18は刀傷状の条線が無数に刻まれていた。方柱状は為さないが、砥石として使用されたものかもしれない。稻荷前I期に比定される。



第92图 B区第29号住居跡出土遺物(1)



第93図 B区第29号住居跡出土遺物(2)

B区第29号住居跡出土遺物観察表(第92・93図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	12.9	4.1		AB	B	にぶい橙	80%	No.44, 45 覆土(+4cm) 赤彩
2	碗	14.8	5.2		BE	C	浅黄橙	25%	No.1 覆土(+10cm) 白色針含まない
3	坏	12.7	7.2		AB	B	橙	100%	No.38 覆土(+5cm) 赤彩
4	甗	(21.0)	19.9		BCEJ	A	にぶい黄橙	30%	No.48, 50 床面
5	甗	(19.6)	37.0	(5.6)	ABCJ	B	浅黄橙	50%	No.46 覆土(+8cm)
6	甗	7.2	5.4		ABCJ	A	にぶい橙	25%	覆土
7	壺	11.2	10.0		AB	A	浅黄橙	60%	No.53, 61~64 覆土(+7cm) 赤彩
8	壺	(20.0)	26.0	8.0	ABC	A	にぶい橙	30%	No.46~52 床面
9	壺	16.0	16.4		ABC	A	にぶい橙	60%	No.16 カマド内 胴部ケズリ後ナデ
10	壺		16.0	8.4	ABC	A	にぶい橙	70%	No.10, 14, 他 床面
11	壺		3.1	(6.0)	ABC	B	にぶい褐	15%	覆土
12	壺		4.6	(8.0)	ABCE	A	淡黄	40%	No.25 覆土(+6cm)
13	壺		2.1	(11.0)	ABE	A	浅黄橙	20%	No.23 覆土(+6cm)
14	鉄鉢形	(20.0)	4.4		ABC	A	灰	25%	No.58 床面 混入
15	壺		4.0	(11.0)	AC	A	灰		No.59 覆土(+6cm) 混入
16	甗				ABC	A	灰		覆土 混入
17	支脚				ABC	A	浅黄橙		No.47 ピット4内(-4cm) 残長9.5cm
18	加工礫					A	にぶい橙		No.57 床面 長さ13.8, 厚さ2.6cm
19	棒状礫								No.29 床面 長さ12.7cm, 重量100g

B区第30号住居跡(第94図)

F-5区に位置する。第29・31号住居跡と重複し、本住居跡が最も新しい。また覆土から常滑焼の甗や在産産陶器が検出されており、中世段階の攪乱を受けていたようである。形態は方形を呈するものと推定されるが、南壁は削平され、北壁部は第29号住居跡と同時に掘り下げた断面のみの確認であるため正確さを欠く。規模は東西長3.84m、推定南北長3.90m、深さは最深部で10cmを測る。主軸方位はN-82°-Eを示す。

床面は概ね平坦であるが、部分的に凹凸もみられる。覆土は2層に分層されるが大きな土層変化は観察されなかった。

カマドは東壁に設置される。幅は50cmを測り、壁を45cm掘り込んでいた。底面はほぼ平坦で床面下の掘り込みはほとんどみられない。おそらく燃焼部の一部と焚口は壁内にあるものと考えられる

が平面的には確認できなかった。袖部は遺存していなかった。

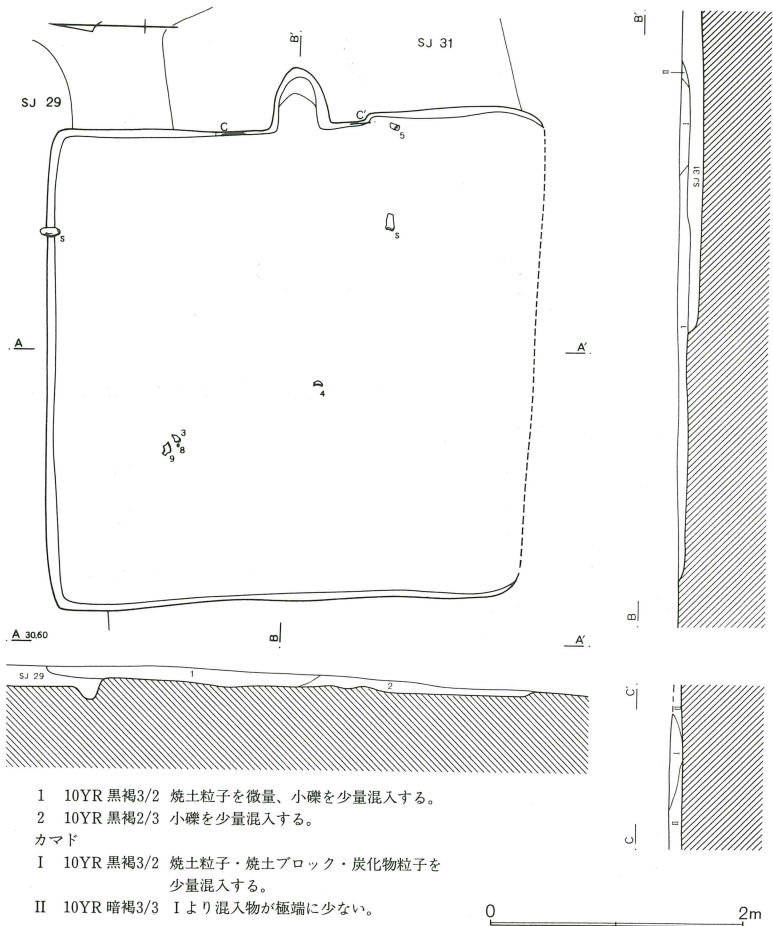
貯蔵穴、ピットは検出されなかった。

出土遺物には土師器
 坏・碗・甕・壺、須恵器坏・
 長頸瓶の各器種がある。

ほとんどが小片で量的にも少ない。10点を図化した。第95図2・3・5は混入と思われる。5の須恵器坏内面には墨痕があるが判読できない。1・4は続比企型坏と思われる。

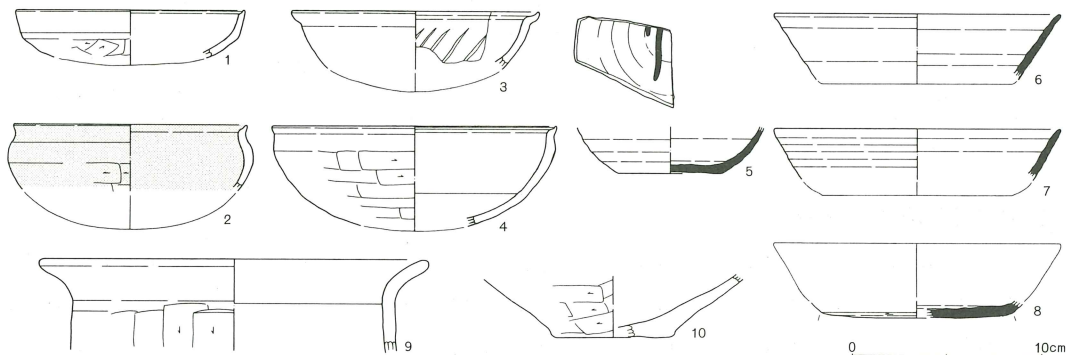
口唇部に沈線をもつが赤彩されず、白色針状物質の有無は不明瞭である。

8の須恵器坏底部は全面回転ヘラケズリされる。稲荷前VI期を中心とした年代であろう。



- 1 10YR 黒褐3/2 焼土粒子を微量、小礫を少量混入する。
- 2 10YR 黒褐2/3 小礫を少量混入する。
- カマド
- I 10YR 黒褐3/2 焼土粒子・焼土ブロック・炭化物粒子を少量混入する。
- II 10YR 暗褐3/3 Iより混入物が極端に少ない。

第94図 B区第30号住居跡



第95図 B区第30号住居跡出土遺物

B区第30号住居跡出土遺物観察表(第95図)

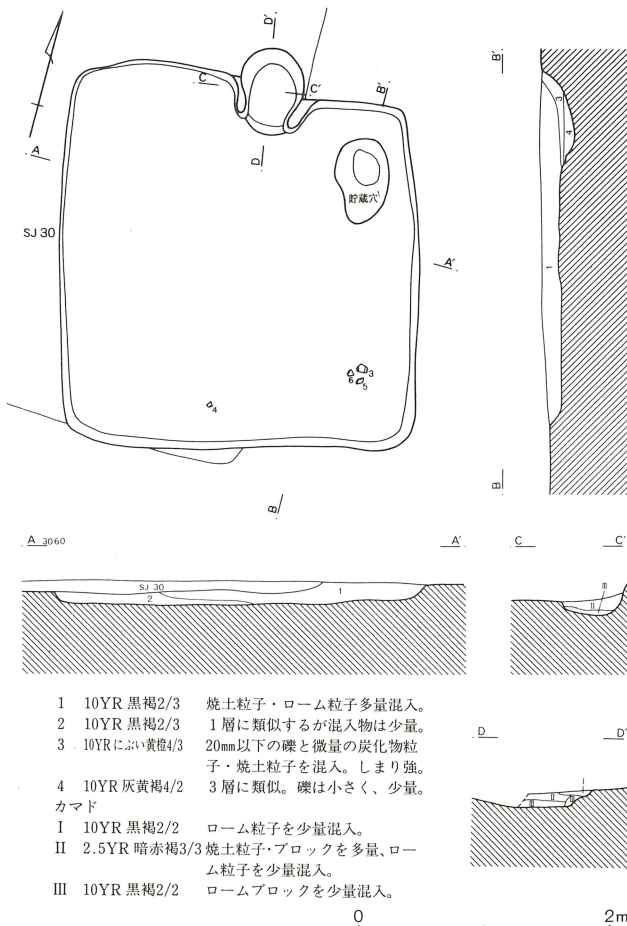
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.0)	2.5		A B	A	橙	10%	カマド 無彩
2	坏	(12.2)	3.5		B	A	浅黄橙	10%	覆土 赤彩
3	坏	(13.0)	3.0		B E	A	橙	15%	No.25 覆土(+5cm) 混入
4	碗	15.0	5.2		B	A	灰褐	10%	No.23 覆土(+5cm) 無彩

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
5	坏		2.4	5.4	ABC	B	灰白	25%	No.18 床面 不明墨書あり
6	坏	(15.0)	3.4		ABC	B	灰	10%	No.46 覆土
7	坏	(15.0)	2.7		ABC	B	灰白	15%	カマド
8	坏		0.9	(10.2)	ABC	A	灰	25%	No.25 覆土(+5cm)
9	甕	(20.0)	4.8		ABC	A	橙	10%	No.26 床面
10	壺		3.2	(6.0)	ABC	A	にぶい橙	20%	覆土

B区第31号住居跡(第96図)

F-5区に位置する。第30号住居跡に覆土上面を削平され遺存状態は悪い。形態は略方形を呈し、規模は長軸3.00m、短軸2.82m、深さ10~20cmを測る。主軸方位はN-9°-Wを示す。

床面はやや凹凸がみられる。住居覆土は2層に分層される。主として焼土とロームの多寡による区分で、土質そのものに大きな相違はない。堆積環境に関しては明確ではないが、出土土器の様相からみる限り重複する第30号住居跡との時間差を大きく見込めず、人為的な埋め戻しと理解する方が妥当かもしれない。



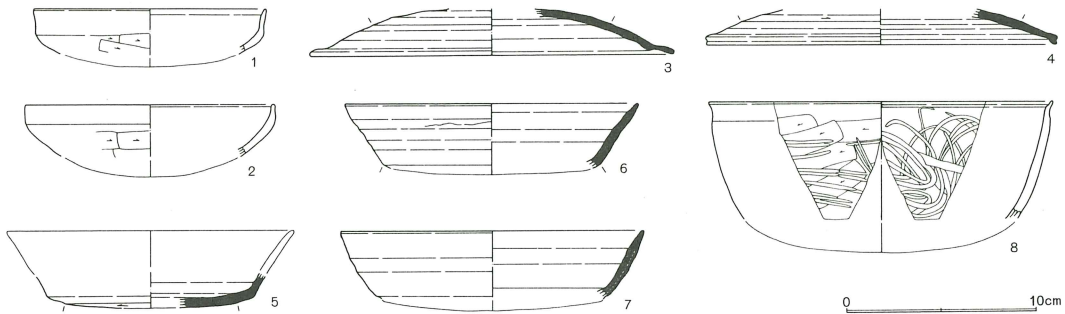
第96図 B区第31号住居跡

カマドは北壁に設置される。上面を第30号住居跡に削平され遺存状態は良くない。全長は68cmで壁外に30cm伸びていた。底面は皿状に凹み奥壁は段をもって立ち上がる。袖は僅かながら遺存しているが、構築材は不明である。

貯蔵穴はカマド脇の北東コーナーに位置する。長径70cm、短径44cmの不整楕円形を呈し深さは10cm。覆土には粘性のあるロームブロックが多量に含まれ、カマド構築材が流れ込んだ可能性もある。ピット、壁溝は検出されていない。

出土遺物には土師器坏・碗・甕・壺、須恵器坏・蓋・長頸瓶があるが重複住居の遺物も含まれているようである。第97図1は模倣坏系か。内面の沈線はなく無彩。2は北武蔵型坏、8は硬質土師器の碗で口唇部内面に沈線が巡る。内面は不規則な螺旋状暗文、体部外面はケズリ後部分的に磨かれる。白色針状物質は確認できない。3は大形の「かえ

り」蓋。胎土に白色針状物質が含まれ確実に南北企窯跡群産である。口縁内面の「かえり」は口唇部の強いロクロなでによって作り出されたもので退化的である。焼成は甘く口縁から内面にかけて黒ずんでいる。第30号住居跡との時期差を大きく採ることはできない。稲荷前V期～VI期にかけて営まれた住居跡と思われる。



第97図 B区第31号住居跡出土遺物

B区第31号住居跡出土遺物観察表(第97図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.1)	2.4	11.0	ABC	C	橙	10%	覆土 無彩
2	坏	(13.0)	2.7		ABE	B	橙	5%	覆土 北武蔵系
3	蓋	(17.0)	2.5		BC	C	灰白	10%	No.1 覆土(+4cm)
4	蓋	(18.2)	1.9		ABC	B	灰	25%	No.8 床面(+2cm)
5	坏		1.9		ABC	C	淡黄	15%	No.2 覆土(+7cm)
6	坏	(15.4)	3.4		B	C	灰白	5%	No.3 覆土(+7cm)
7	坏	(15.9)	3.6		ABC	B	灰	10%	覆土 粘土接合痕
8	椀	(18.0)	6.2		AB	A	橙	10%	覆土

B区第32号住居跡(第98図)

F-5・6区に位置する。北東側に第33号住居跡が重複するが、本住居跡の方が新しい。形態は方形を呈し、規模は長軸3.54m、短軸3.20m、深さ15cmを測る。主軸方位はN-6°-Eを示す。

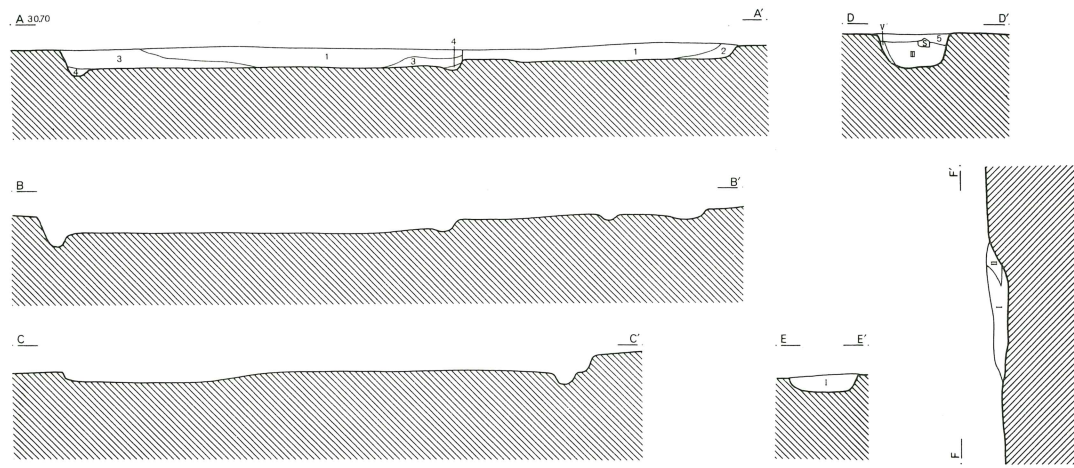
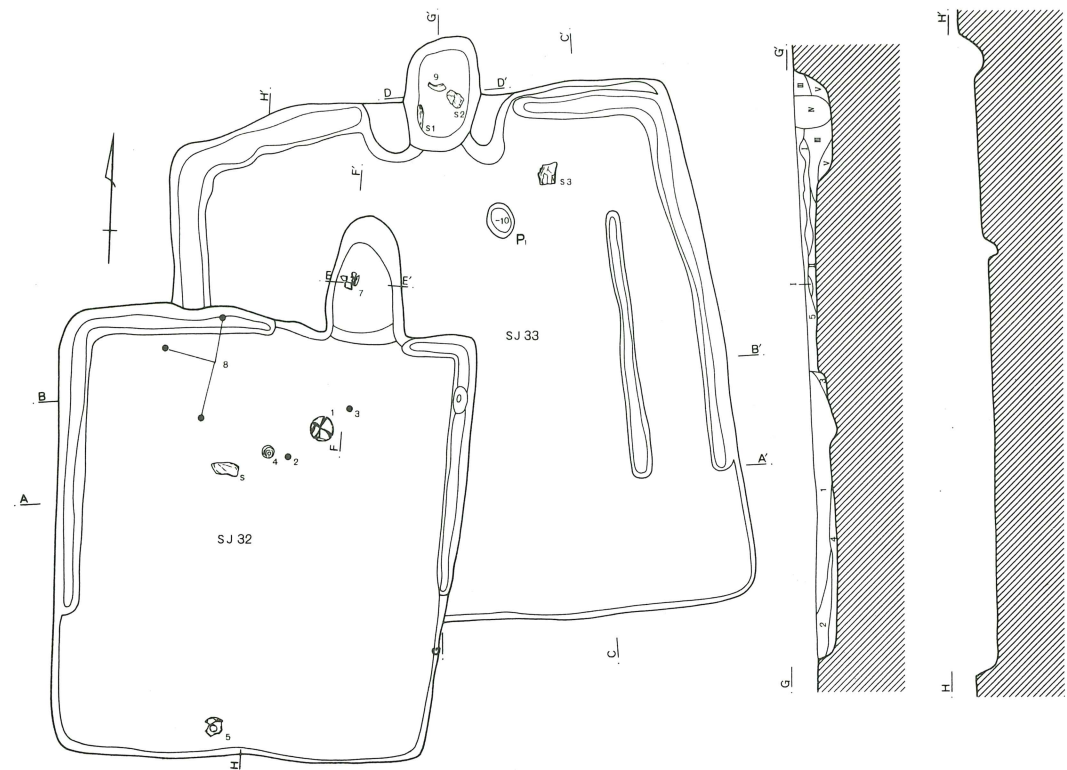
床面はほぼ平坦である。覆土は4層に分けられ、第4層は壁溝埋土である。第2・3層堆積後、ローム・焼土・炭化物を多量に含む黒褐色土で一気に埋没したような状況であった(第1層)。人為的埋め戻しを想定した方が理解しやすいであろう。

カマドは北壁の北東コーナー寄りに設けられる。幅60cmを測り、壁を約95cm切り込んでいる。形態から燃焼部は壁外にあるものと考えられ、底面は床面より8cmほど掘り込まれる。奥壁の立ち上がり角度は比較的緩い。袖は検出されなかった。焚口がほぼ壁ラインの延長上に想定されることからみて、当初から存在しなかったものと考えられる。

壁溝はカマドを除く住居北半に巡り、床面からの深さ5～8cmを測る。貯蔵穴、ピットは検出されなかった。

出土遺物には土師器甕、須恵器坏・蓋・甕がある(第99図1～8)。出土量は少ない。須恵器蓋(1)はカマド前面の床面に逆位で、5の須恵器坏は南壁際の床面に伏せた状態で検出された。

1の蓋は完形で、鈕から口縁部にかけて笠状に開く。須恵器坏は底部調整を施すもの(3・6)と回

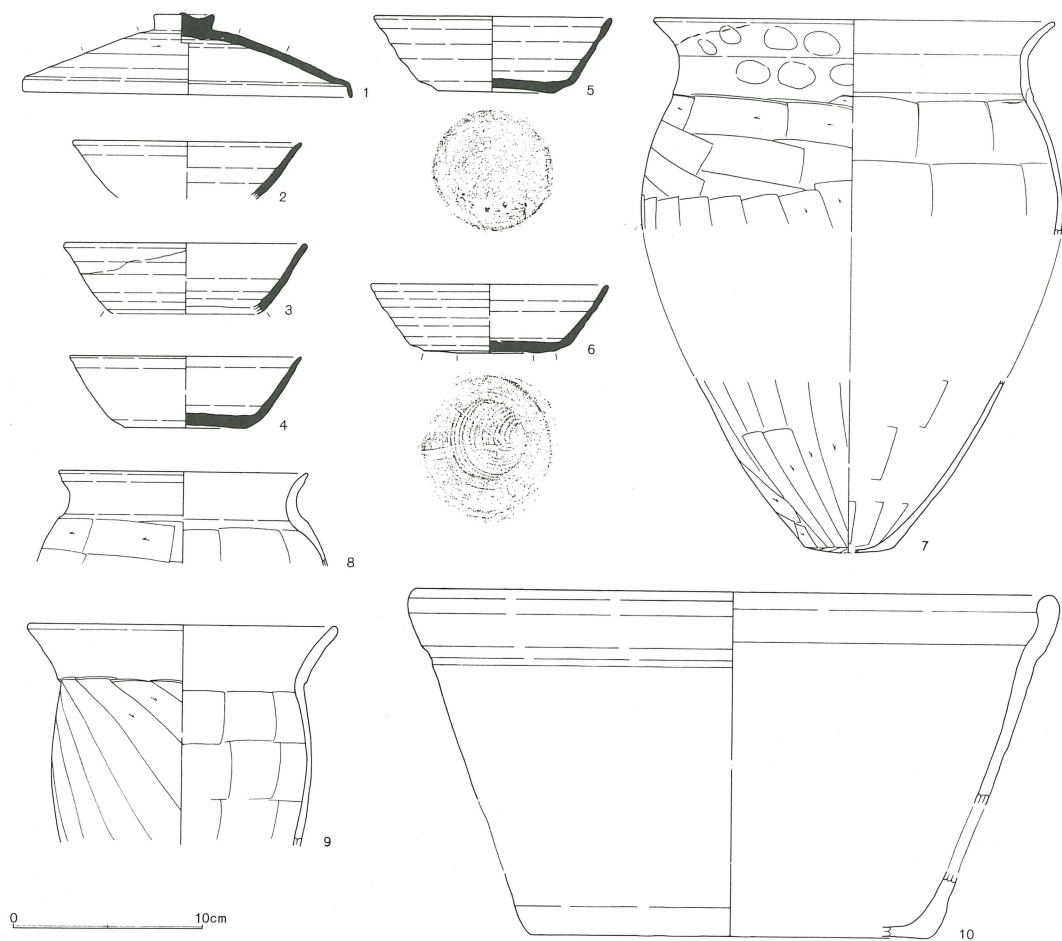


- 1 10YR 黒褐2/3
小礫・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を均一に、比較的多く混入する。
- 2 10YR 黒褐3/2
風化した小礫・ロームを明瞭に混入する。
- 3 10YR 黒褐2/3
小礫は微量含むのみで、炭化物・焼土粒子を明瞭に混入する。
3'は炭化物・焼土がより少ない。
- 4 10YR 黒褐2/2
焼土粒子を少量混入する。
- 5 10YR 黒褐3/2
小礫・焼土粒子を少量混入する。(SJ23覆土)
- S J 32カマド
- I 10YR 黒褐2/2
焼土小ブロックと、微量の炭化物を混入する。
- II 2.5YR 赤褐4/6
焼土小ブロックを極めて多量に混入。
- S J 33カマド
- I 10YR 灰黄褐4/2
ロームブロックのほぼ純層である。
- II 10YR 黒褐2/3
風化した礫の粒子を、少量混入する。
- III 5 YR 極暗赤褐2/4
微量の炭化物と、多量のロームブロックを混入する。
- IV 10YR 黒褐3/2
風化した礫の粒子を、少量混入するのみである。
- V 10YR 黒褐2/3
焼土粒・炭化物粒を少量混入。e'は混入物がより少量。

0 2m

第98図 B区第32・33号住居跡

転糸切り後無調整のもの両者がある(4・5)。3は底部は欠く。体部下端にケズリが見えるが深く削り込むものではない。何れも体部は直線的に延び、器壁は比較的薄い。土師器甕(7)は典型的とはいえないが「コ」の字甕の範疇に含めて良からう。10の内耳鍋は覆土から出土したもので混入である。須恵器坏類の様相から稻荷前X期～XI期と考えておきたい。



第99図 B区第32・33号住居跡出土遺物

B区第32・33号住居跡出土遺物観察表(第99図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	蓋	17.2	4.3		ABC	A	白	100%	No.21 床面
2	坏	(12.0)	3.0		ABC	B	緑灰	15%	No.25 床面
3	坏	(12.6)	3.7		ABC	B	灰白	25%	No.20 床面
4	坏	(12.1)	3.8	6.4	ABC	B	灰	40%	No.26 床面
5	坏	12.4	4.0	6.1	ABC	B	灰白	80%	No.32 床面
6	坏	(12.3)	3.6	7.0	ABC	A	灰	50%	覆土
7	甕	(20.8)	(27.9)		A E J	A	橙	20%	No.6 カマド内
8	小形甕	13.0	4.8		A B E J	A	にぶい橙	75%	No.18, 30, 31 覆土(0~+9cm)
9	甕	(16.0)	11.5		A B E J	A	にぶい橙	30%	SJ33カマド内
10	内耳鍋	(33.4)	(18.0)	(11.0)	A B I	A	浅黄	10%	覆土 混入

B区第33号住居跡(第98図)

F-5・6区に位置し、第32号住居跡に住居南東部を切られている。形態は略方形を呈するものと推定され、規模は長軸4.16m、短軸4.00m、深さ10cm前後を測る。主軸方位はN-5°-Eを示す。

床面はほぼ平坦である。覆土は2層に分けられるが堆積環境の詳細は不明である。

カマドは北壁中央部に設けられていた。規模は全長90cm、掘り込み幅60cmを測り、壁を50cm切り込んでいる。燃烧部は床面を14cm掘り込んで構築され底面は鍋底状を呈する。奥壁は急角度で立ち上がる。袖は壁内に遺存し、粘質土を用いて構築されたものと思われるが土層の詳細は不明である。また、左袖内側には片岩系の板状礫(袖石)が側壁に沿って据えられていた(S1)。右袖のそれは抜き取られていた。覆土中から出土した角礫(S2)がその残欠の可能性もあるが断定はできない。覆土は第III層がロームブロックを多量に含む焼土層で天井部崩落土に相当するものと考えられる。第IV層は調査時に器設部ではないかと考えていたが、カマド崩壊後の堆積土を切っており後世の攪乱(ピット)と考えるのが妥当であろう。

壁溝は南壁と東壁の南端、及びカマドを除き巡る。幅は20~30cm、深さは3~10cmを測る。また、東壁の内側に平行して約2mの長さで壁溝状の溝が検出された。建替えの痕跡とも思われるが詳細は明らかにできなかった。

ピットは1本検出されたが、深さ9cmと浅く伴うか否か不明である。

出土遺物は少なく、確実に伴うのはカマド内から出土した甕(第99図9)のみである。9は通常よりも一回り小形の甕で、胴部は斜めケズリが施される。胎土には白色針状物質が含まれない。年代決定は難しいが稻荷前V期~VI期頃であろう。

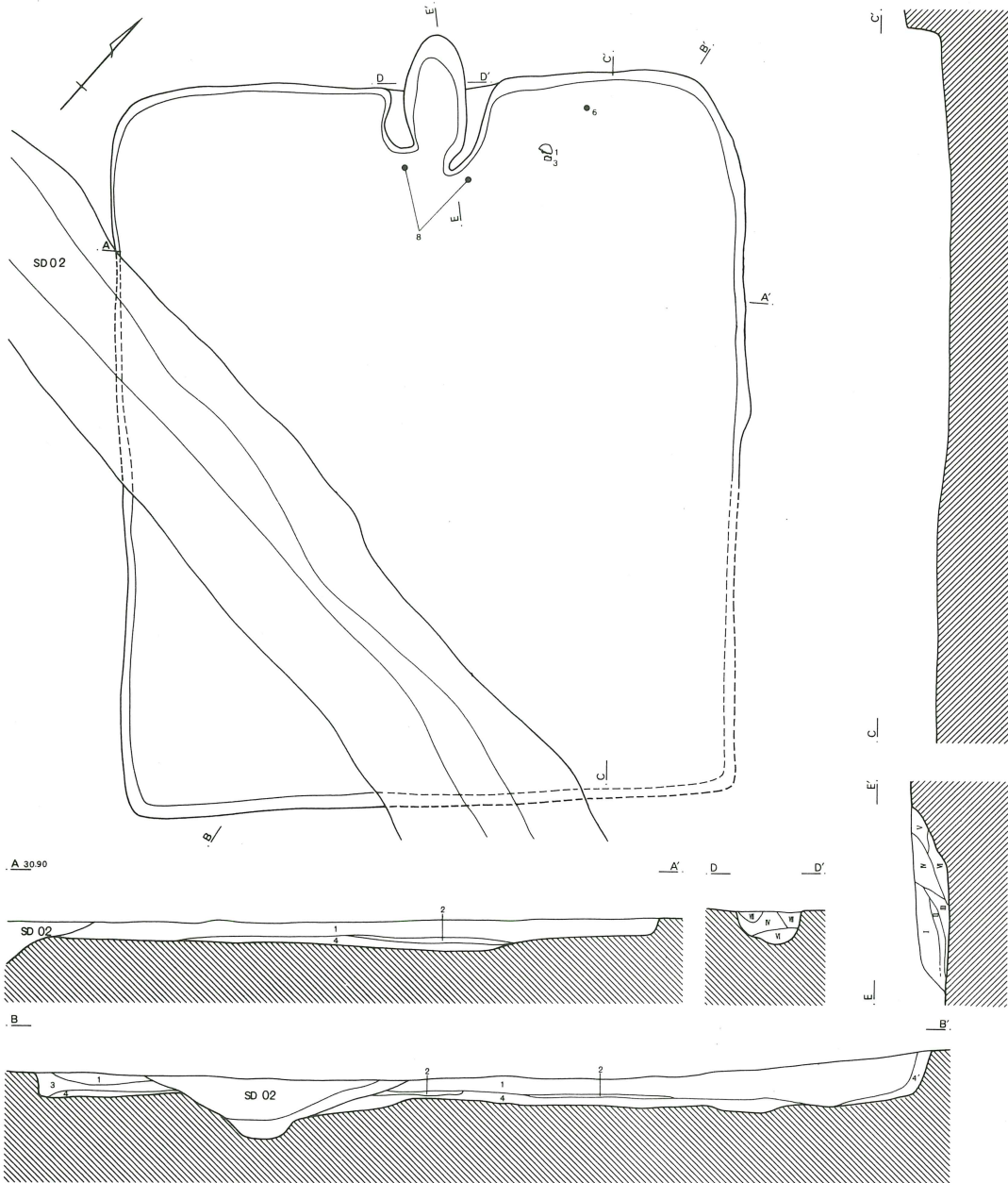
B区第34号住居跡(第100図)

C・D-6区に位置する。第4号方形周溝墓北溝上に一部掛かり、東西に延びる第2号溝跡によって床面を切られている。調査区を分割した関係で東コーナーの確認ミスが生じてしまったが、推定線どおりとみて良からう。形態は長方形を呈し、規模は長軸6.06m、短軸5.20m、深さ20~35cmを測る。主軸方位はN-44°-Wを示す。

床面は貼床される。掘方底面は起伏が顕著で特に中央部が深い傾向にある。覆土はローム粒子と焼土粒子を含む暗褐色土(第1層)を基調とし、第2号溝北側では大きな土層変化は認められなかった。第4層は掘方埋土でその上部にロームを縞状に貼った貼床層(第2層)が形成されていた。

カマドは北西壁中央に設けられていた。袖の先端から奥壁までの長さは120cm、燃烧部幅54cmを測り、壁外に40cm掘り込まれている。燃烧部は床面と同レベルで続き奥壁は角度をもって立ち上がる。袖は遺存する。粘質土を積み上げて構築されたものと思われるが詳細は不明である。

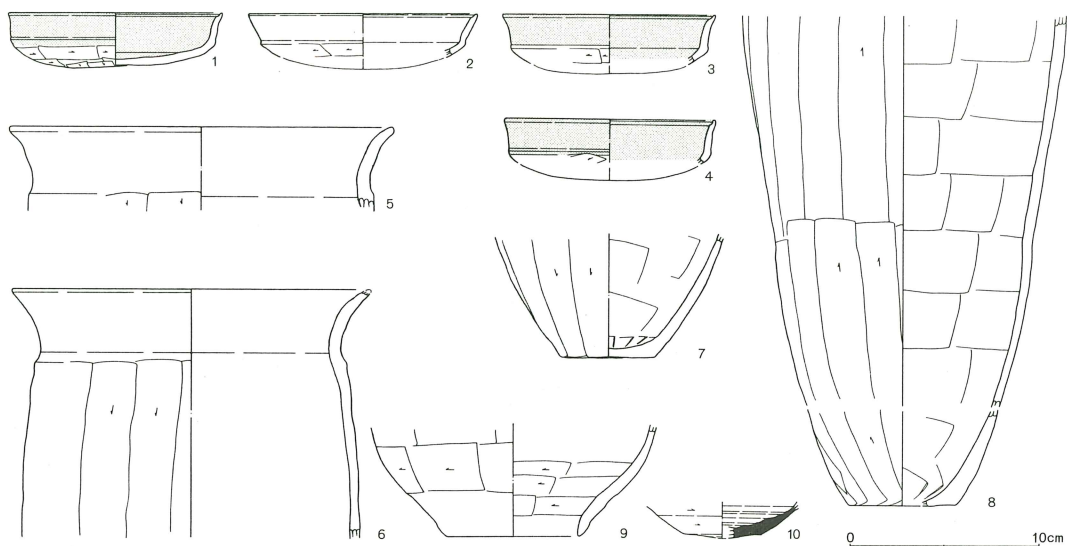
出土遺物は少なく、土師器坏・甕・小形甕・甑、須恵器坏・蓋が接合後の破片数で23点検出されたに留まる。土師器坏(第101図1~4)は模倣坏系の比企型坏と考えられるもので、器高は低く底部は平底化している(1)。2は赤彩されない。5~8は縦へラケズリを施す長胴甕である。9は甑と思われるが器種は不明確である。10は須恵器坏底部で胎土から湖西産と推定される。残存部外面は全て回転へラケズリされる。稻荷前IV期に比定される。



- | | |
|--|---|
| <p>1 10YR 暗褐3/3
ローム粒子・焼土粒子を少量混入する。</p> <p>2 10YR におい黄褐4/3
ローム土を綿状に堆積する。(貼床)</p> <p>3 10YR 黒褐2/2
ロームブロックを混入するが、4層より暗色を呈する。</p> <p>4 10YR 黒褐3/2
ローム粒子を少量混入する。4'はロームブロックを混入する。</p> <p>カマド</p> <p>I 10YR 黒褐3/2
ローム粒子・焼土粒子を少量混入する。</p> <p>II 5 YR 暗赤褐3/3
少量のロームブロックと微量の焼土粒子を混入する。</p> | <p>III 10YR におい黄褐4/3
ローム粒子と焼土粒子を少量混入する。</p> <p>IV 5 YR 暗赤褐3/6
焼土ブロックとロームブロックを比較的多く混入する。</p> <p>V 10YR 黒褐2/2
多量のロームブロックと少量の焼土ブロックを混入する。</p> <p>VI 10YR 黒褐2/2
比較的小きな焼土ブロックと炭化物粒子を多量に含み、本層のみ唯一しまりは極力弱い。</p> <p>VII 10YR 暗褐3/4
黄褐色粘質土を多量・焼土粒子を少量混入する。</p> |
|--|---|

0 2m

第100図 B区第34号住居跡



第101図 B区第34号住居跡出土遺物

B区第34号住居跡出土遺物観察表(第101図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(11.2)	2.9		A B C	B	にぶい橙	90%	No.8 床面 赤彩
2	坏	(12.0)	2.3		A B C	A	橙	10%	覆土 無彩
3	坏	(11.1)	2.6		A B	A	にぶい橙	10%	No.8 床面 赤彩
4	坏	(11.0)	2.3		A B C	A	にぶい橙	5%	覆土 赤彩
5	甕	(20.0)	4.4		A B C J	C	にぶい橙	10%	覆土
6	甕	(18.8)	13.0		A B C	B	浅黄橙	15%	No.11 床面
7	甕		6.5	5.0	A B C E	A	にぶい黄橙	35%	覆土
8	甕		25.7	(5.6)	A B C	A	橙	60%	No.2,6 覆土(+1~8cm)
9	甗		5.9		A B C	A	にぶい黄橙	15%	覆土
10	坏		1.9	(9.0)	B	A	青灰	30%	覆土 東海産か

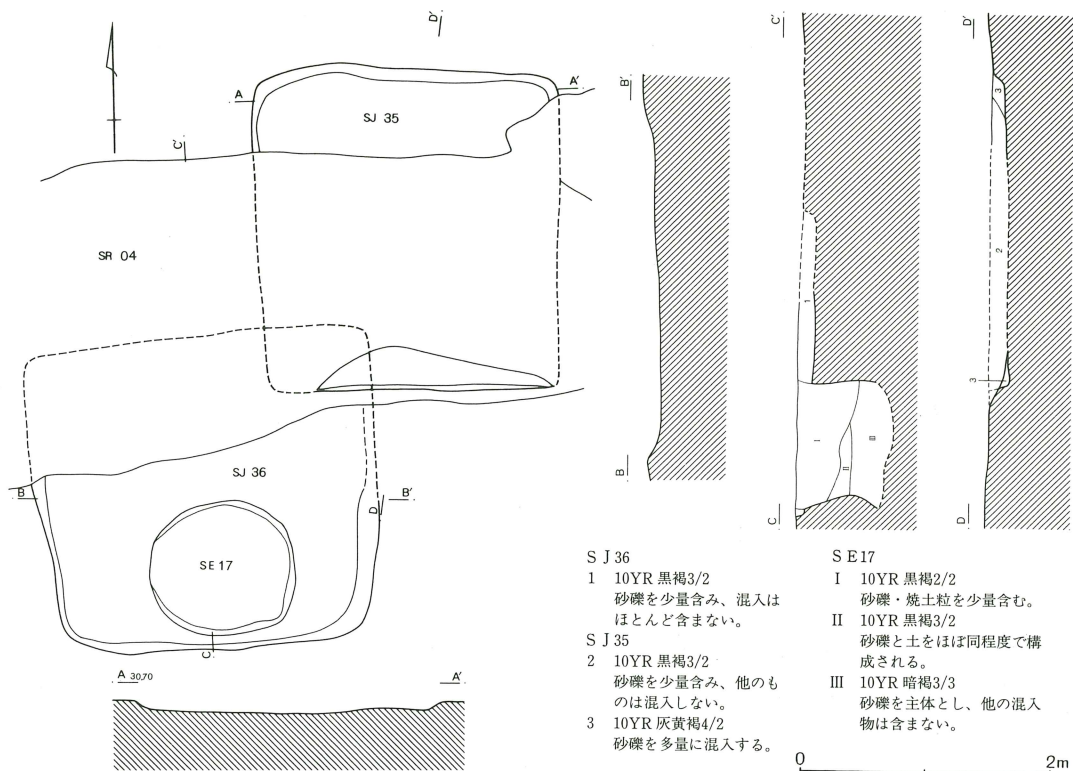
B区第35号住居跡(第102図)

E-6区に位置する。第4号方形周溝墓の南溝上に構築されるが、住居の確認が遅れたために周溝墓を先に掘り下げてしまった。残念ながら遺構の詳細は不明とせざるを得ない。形態は方形を呈するものと推定される。規模は南北長2.50m、東西長2.44m、深さ10~15cmを測る。主軸方位はN-1°-Eを示す。

床面は北壁際と南壁際に僅かに残存するのみであるが、遺存部分に関しては概ね平坦である。覆土の堆積状況、付属施設の有無は不明である。出土遺物もなく、時期も明らかにできない。

B区第36号住居跡(第102図)

E-6区に位置する。第35号住居跡同様に第4号方形周溝墓を先に掘り下げてしまったため遺構の詳細は不明な部分が多い。また、北東コーナーは第35号住居跡と切り合うものと思われるが先後関係も不明である。残存する住居南半をみる限り、形態は方形または長方形を呈するものと推定され



第102図 B区第35・36号住居跡

る。残存規模は東西2.72m、南北1.80m、深さ10~15cmを測る。主軸方位は南辺に直交するものと仮定するとN-4°-Wを示す。

床面は起伏があり一定せず、壁の立ち上がりも緩やかである。覆土は小礫を少量含む黒褐色土で南壁際には覆土を切って第17号井戸跡が掘り込まれていた。付属施設は全く検出されていない。

出土遺物は皆無で、時期も不明である。

B区第37号住居跡(第103図)

E-6・7区に位置し、第4号方形周溝墓の東溝上部を切って構築されていた。平面形態は横長の長方形を呈し、規模は長軸5.44m、短軸3.90m、深さ5~10cmを測る。主軸方位はN-29°-Eを示す。

床面は平坦である。覆土は2層に分かれるが層厚が薄いため堆積状況は明らかにできない。

カマドは北壁の中央部に設置される。焚口から奥壁までの長さは1.08m、燃烧部の最大幅は1.12mを測る。燃烧部は床面から約10cm掘り込まれ、底面は皿状を呈する。燃烧部奥壁は緩やかに立ち上がる。

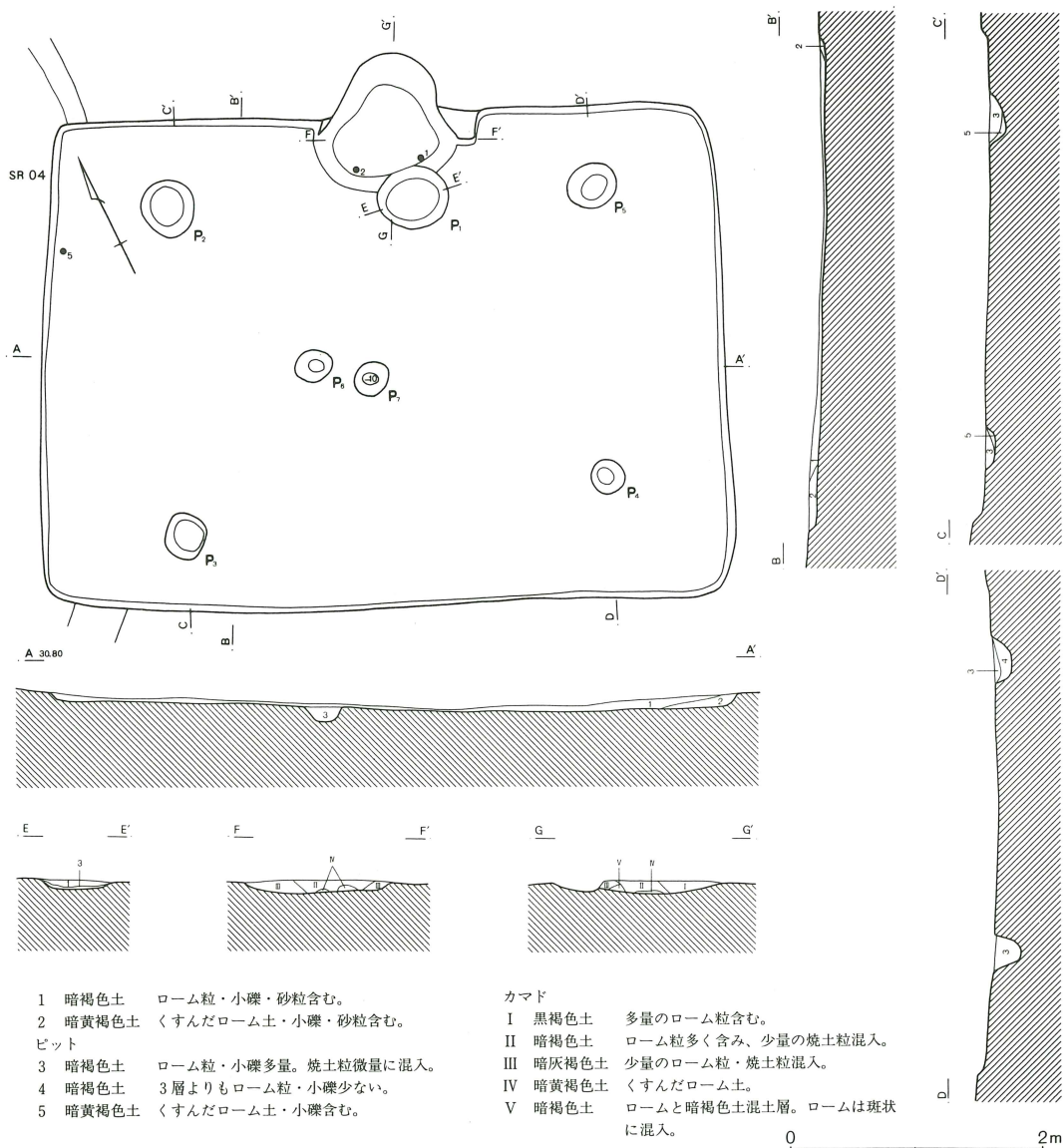
覆土は6層に分かれる。カマド埋土には焼土の含有量が比較的少ないが、第II・III層が天井部崩落土に相当するものと推定される。袖はあまり明瞭なものではない。

ピットは7本検出された。P₂~P₅が主柱穴と考えられる。深さはP₃が最も浅く9cm、最も深い

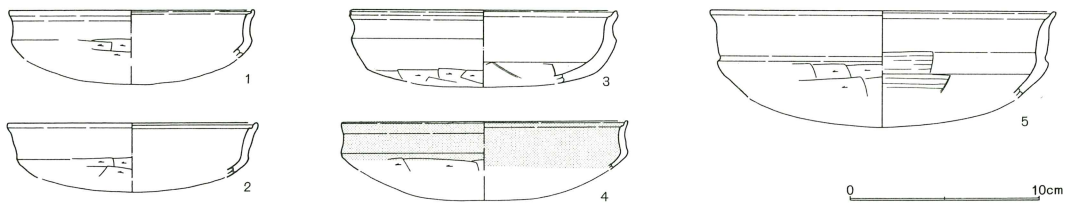
P₄が22cmを測る。P₁・P₆とP₇については伴うか否か不明である。

壁溝、貯蔵穴は存在しない。

出土遺物は少ない。破片数にして34点を数え、このうち甕の胴部片が14片を占める。器種としては土師器坏・椀・甕・甑・壺がある。土師器坏5点を図化した(第104図)。小片からの復元のため多少の誤差はあるものの何れも口径は大きいものと推定される。1～4は口唇部内面に沈線を巡らす比企型坏で、1・2は模倣坏系と思われる。3は胎土が粗く、体部上半にヘラケズリが及ばないため器壁が厚く、赤彩も施されない。4は腰の位置が高く赤彩が施されている。5は須恵器坏蓋を模倣したと思われる大形坏で、白色針状物質が含まれず、素地が緻密であることから非在地産かもしれない。古墳時代後期後半以降の集落の中では古相を示す。稲荷前I～II期と考えておきたい。



第103図 B区第37号住居跡



第104図 B区第37号住居跡出土遺物

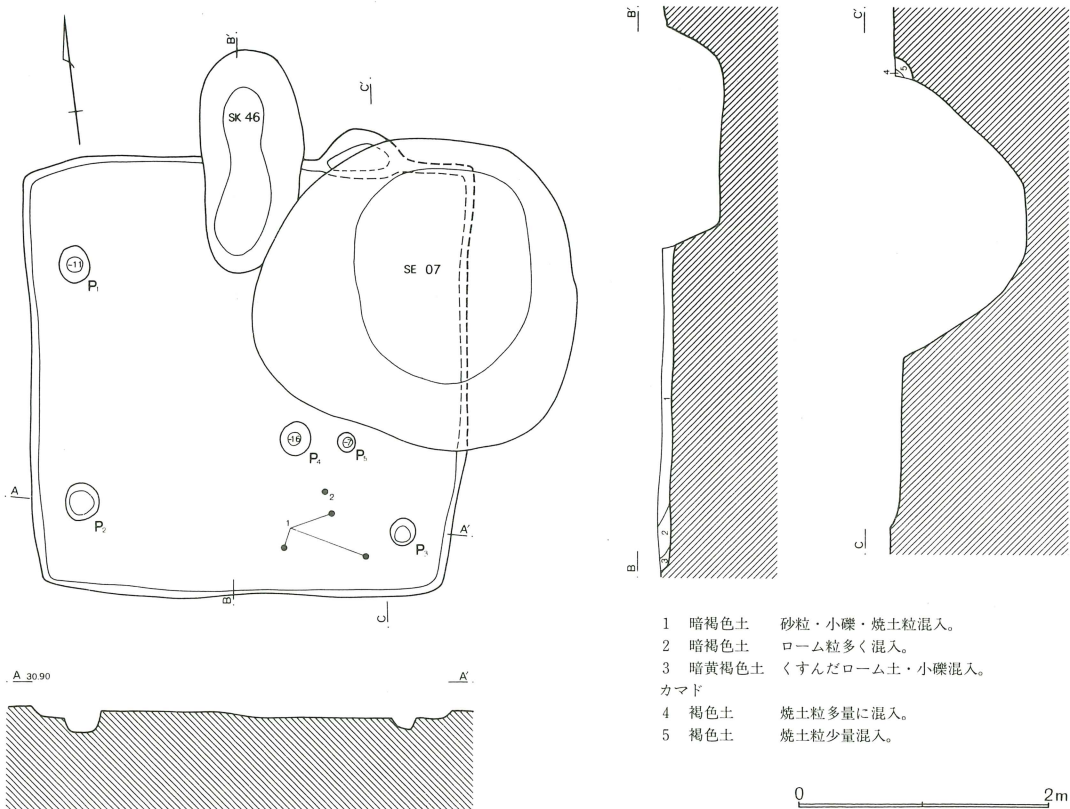
B区第37号住居跡出土遺物観察表(第104図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.8)	2.5		ABC	A	橙	5%	No.23 カマド内 無彩
2	坏	(15.0)	2.9		ABC	A	橙	10%	No.21 カマド内 無彩
3	坏	(14.0)	3.8		ABC	B	にぶい橙	20%	カマド内 無彩
4	坏	(15.0)	2.5		ABC	A	浅黄橙	10%	覆土 口径大きい 赤彩される
5	坏	(18.0)	5.6		AB	A	橙	10%	No.2 床面 素地土緻密 無彩

B区第38号住居跡(第105図)

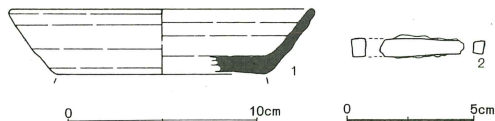
E・F-6・7区に位置し、第7号井戸跡と第46号土壇に切られている。形態は方形を呈するものと推定され、規模は一辺3.44m、深さ10cmを測る。主軸方位はN-7°-Eを示す。

床面はほぼ平坦である。覆土は焼土を含む暗褐色土を基調とするが、堆積環境の詳細は不明。



第105図 B区第38号住居跡

カマドは北壁に位置するが第7号井戸跡に大部分破壊され、詳細は不明とせざるを得ない。壁を約20cm切り込んでおり、燃烧部の大半は壁内に存在したものと考えられる。



第106図 B区第38号住居跡出土遺物

ピットは5本検出された。配置からP₁～P₃が主柱穴に相当するものであろう。深さは10cm前後と浅い。4本主柱穴とすれば残る1本は第7号井戸跡によって壊されたものと推定される。配置をみるとやや壁に寄り過ぎる感じはするが、カマドの位置に規制されたものかもしれない。貯蔵穴、壁溝は存在しない。

出土遺物には土師器甕・壺、須恵器坏・甕と鉄器があるが、量的には極めて少なく破片数で18点に留まる。図示し得たものは須恵器坏と鉄器各1点である(第106図)。1は大形で盤状を呈し、底部は全面回転ヘラケズリされる。器壁は全体に厚く内面の体部変換点は丸みを帯びる。出土位置は床面から確認面までの破片が接合しており、おそらく埋没過程の投棄品と推定される。鉄器(2)は床面出土で断面方形の角棒状を呈する。鉄釘であろうか。第106図1の須恵器坏は稲荷前VII期頃に比定されよう。

B区第38号住居跡出土遺物観察表(第106図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(15.9)	3.4	11.0	AB	A	灰白	30%	No.12,14,16 覆土(0～+10cm)
2	釘?					A			No.27 床面 残長3.3cm

B区第39号住居跡(第107図)

C・D-7区に位置する。第12号溝跡に西壁部を切られ、第8号方形周溝墓西溝を切って構築されている。形態は方形を基調とするが西側に張り出し部(?)をもつ。或いは建替えの痕跡かとも考えたが、床面精査や断面観察に拠っても断定するだけの根拠が得られず、疑問符付きながらもここでは張り出し部と把握しておきたい。規模は長軸5.36m、短軸3.86m、深さ10～20cmを測る。主軸方位はN-11°-Eを示す。

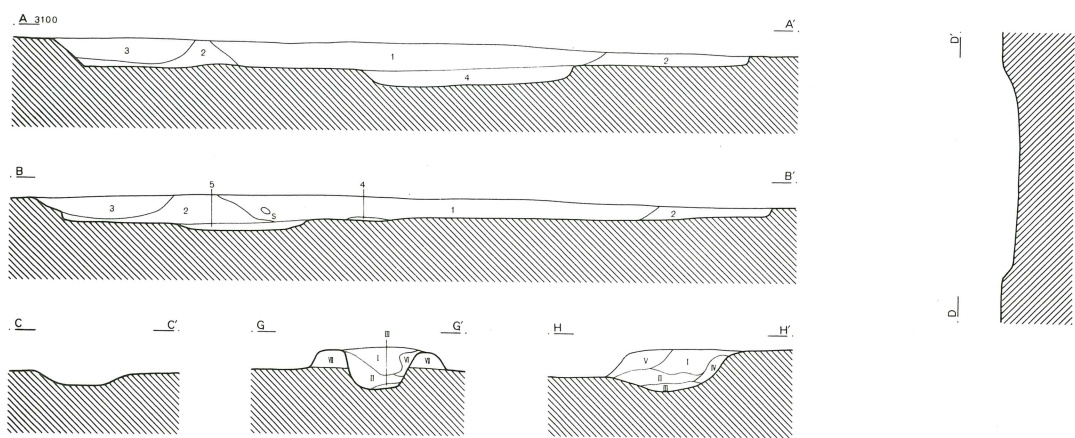
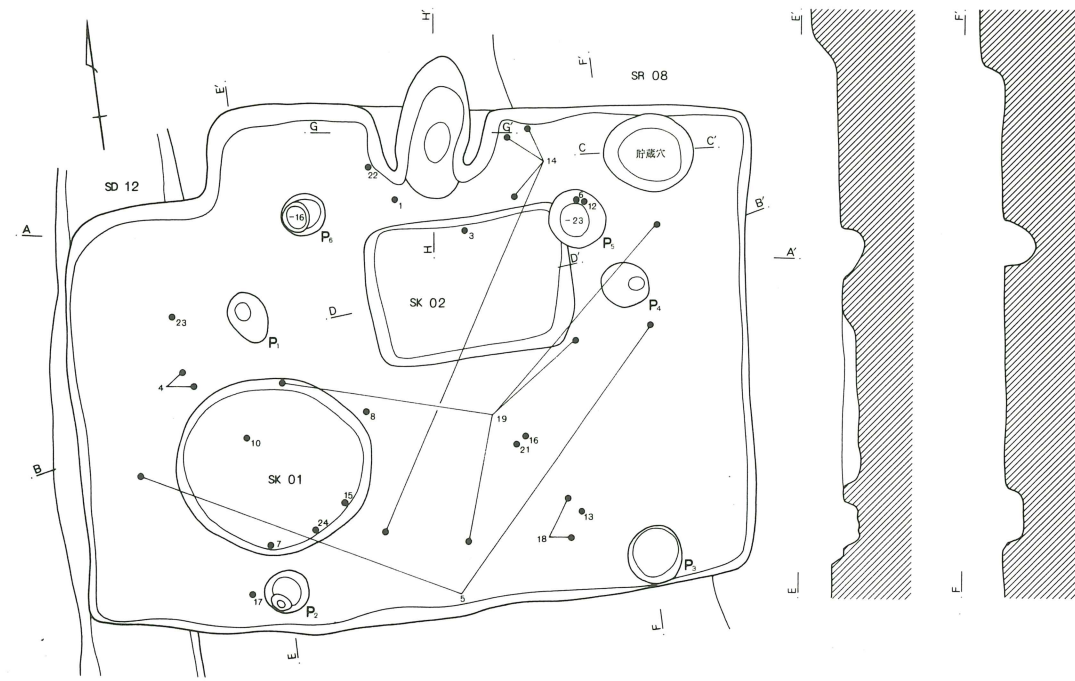
床面は概ね平坦である。西側の張り出し部でも床面自体は辛うじて残存する模様である。住居覆土は2層に分かれるが大きな土層変化は見られない。第3層は溝埋土である。

カマドは北壁に設置される。全長110cm、燃烧部最大幅55cmを測り、壁を40cm掘り込んでいる。底面は船底状に凹み、燃烧部奥壁は急角度で立ち上がる。堆積土は7層に分かれ、第I・II層は天井部崩落土、第III層が灰層に相当しよう。壁内の袖は残存し、ローム混じりの灰白色粘土で構築される。

貯蔵穴は北東コーナー部に設けられる。70×62cmの楕円形を呈し深さ10cmを測る。ピットは6本検出された。一応P₁～P₄を主柱穴と考えたが、P₅・P₆とP₂・P₃という組み合わせも有り得る。若しそうだとすると建替えの微証とすることもできよう。

そのほか、床下土壌が2基検出された。SK01は円形、SK02は長方形を呈する。上面に貼床されたものと推定されるが、貼床層自体は明確に把握できなかった。

出土遺物としては土師器坏・碗・甕・小形甕、須恵器坏・碗・蓋・甕・壺・鉄鉢形、灰釉陶器段皿・瓶、小



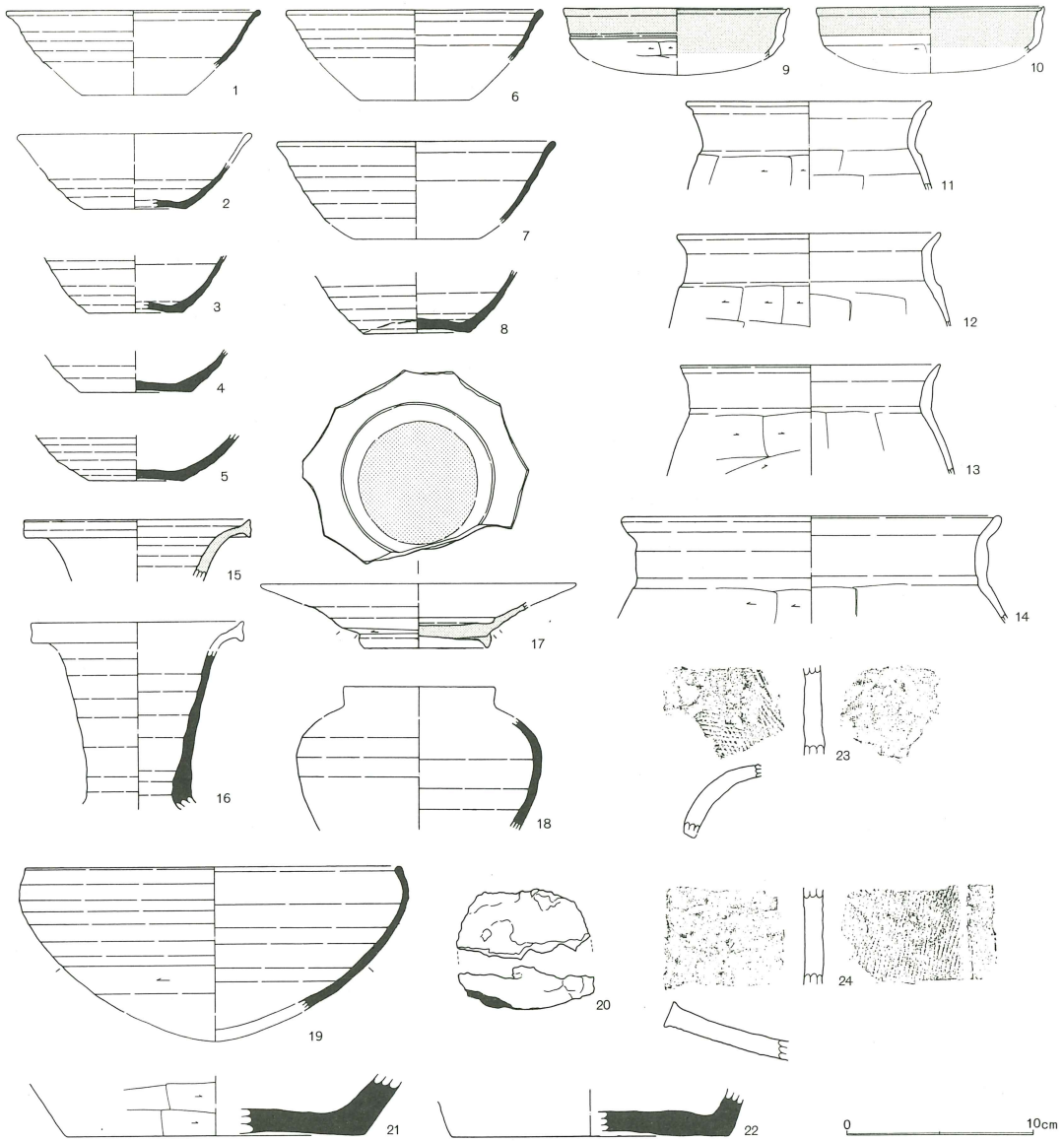
- | | | | |
|----------|-----------------------|----------|-------------------------|
| 1 黒褐色土 | 焼土粒子を多く含む。小礫混じり。 | IV 暗褐色土 | ローム粒子と少量の焼土粒子を含む。 |
| 2 暗褐色土 | 微量の焼土粒子・炭化物粒子を含む。 | V 暗褐色土 | ローム粒子と粘土粒子を少量含む。 |
| 3 暗褐色土 | 焼土粒子と小礫、砂粒を多く含む。 | VI 灰白色土 | 粘土主体に焼土ブロックを多量に含む。 |
| 4 暗黄褐色土 | ローム粒子を多く含む、微量の炭化物混じる。 | VII 灰白色土 | 灰白色砂質粘土。ロームブロックと焼土粒混じる。 |
| 5 褐色土 | ロームブロック・焼土粒子を多く含む。 | | |
| カマド | | | |
| I 褐色土 | 褐色粘土を主にやや少量の焼土粒子含む。 | | |
| II 褐色土 | 粘土ブロックと多量の焼土ブロックを含む。 | | |
| III 黒褐色土 | 焼土粒子と灰・炭化物粒子を少量含む。 | | |

0 2m

第107図 B区第39号住居跡

形瓦、鉄滓と中世在地産陶器がある。土師器坏類と中世在地産陶器は明らかな混入品である。主体は須恵器坏類と土師器甕である。前者は口縁部片で40点、後者は26点検出されているが、全て破片で器形の判明する資料がない。

須恵器坏類では口縁部が肥厚気味に外反し、底部は回転糸切り後無調整である(第108図1～8)。土師器甕は典型的な「コ」の字状口縁を呈する(14)。18の壺は器形が判然としない。19の鉄鉢形はほ



第108図 B区第39号住居跡出土遺物

ぼ床面から出土しているが混入と思われる。灰釉陶器は2点検出され、胎土から何れも東濃産と推定される(15・17)。17の段皿は体部下端以下がへラケズリされ、底部中央に僅かに糸切り痕を残す。高台は中心から外れて付されている。口縁部は故意に打ち欠き整形され、内面見込み部は磨り減っている。転用硯と推定される。小形瓦は2点ある。丸瓦(23)は床面から4cm浮いた位置から出土した。凸面平行叩き後、撫でる部分がある。凹面は布目で、中央部が撫で消される。平瓦(24)も基本的には同一整形であるが、凹面は布目痕を撫で消す。床面出土。鉄滓(20)は所謂椀型滓である。SK02内から出土し、約1/2残存する。底面は椀底状を呈し、炉底の粘土が付着する(トーン部分)。粘土は青灰色に還元している。鍛冶炉自体は確認されておらず遺構に直接伴うものではない。須恵器の様相から稲荷前XIII期頃に比定されよう。

B区第39号住居跡出土遺物観察表(第108図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(13.3)	3.1		A B C	C	淡黄	10%	No.243 覆土(+11cm)
2	坏		2.4	5.5	A B C	A	緑灰	25%	覆土
3	坏		3.0	(5.0)	B C	B	灰白	30%	No.168 床面
4	坏		2.3	5.9	A B C	C	淡黄	75%	No.7,107 覆土(+10cm)
5	坏		2.4	5.0	B C	B	灰	50%	No.96,122 床面
6	椀	13.5	2.7		A B C	A	灰白	15%	No.312 ヒット5内(-9cm)
7	椀	(14.6)	4.2		A B C	C	灰白	10%	No.215 SK01内
8	椀		3.2	5.8	A B C	B	にぶい褐	40%	No.131 覆土(+12cm)
9	坏	(12.0)	2.8		A B	A	橙	5%	覆土 赤彩 混入
10	坏	(12.0)	2.5		A B C	A	にぶい橙	5%	No.206 床面 赤彩 混入
11	小形甕	(13.0)	4.7		A B E	B	灰褐	15%	覆土
12	小形甕	(14.0)	5.0		A B E	B	にぶい橙	20%	No.121 覆土(+9cm)
13	小形甕	(13.8)	5.9		A B E	A	にぶい褐	15%	No.219 覆土(+4cm)
14	甕	(20.0)	5.6		A B E	A	にぶい橙	20%	No.25,26,他 床面
15	瓶	(12.0)	3.3		A	A	灰白	20%	No.281 床面 東濃産 灰釉
16	長頸瓶		8.3		A B C	A	灰	25%	No.137 床面
17	段皿		2.4	6.6	A B	A	灰白	90%	No.186 覆土(+4cm) 東濃産 灰釉
18	小形壺		5.8		A C	A	灰	20%	No.302,303 床面 短頸壺か?
19	鉄鉢形	(20.0)	7.7		A B C	A	青灰	30%	No.63,172,他 覆土(0~+4cm)
20	椀形滓								SK02内 残存径7.1cm 最大厚2.3cm
21	甕		2.5	(14.8)	A B	A	灰	15%	No.136 覆土(+12cm)
22	甕		3.2	(16.0)	A B C	A	灰	20%	No.110 覆土(+60cm)
23	丸瓦				A B C	A	灰白		No.3 覆土(+4cm)
24	平瓦				A B C	A	黄灰		No.274 床面

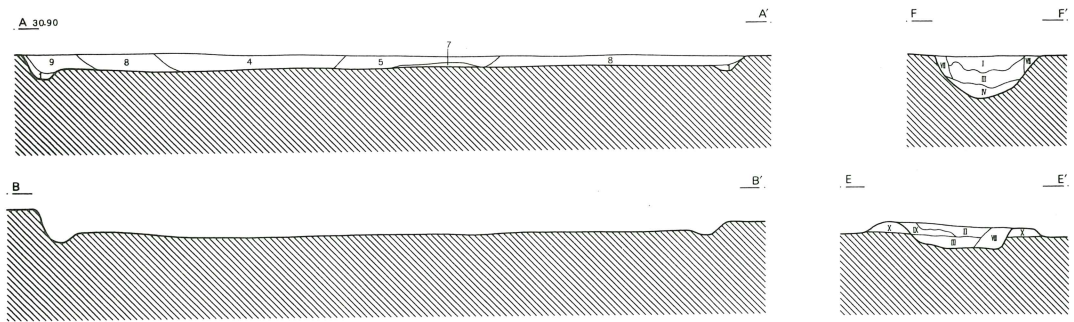
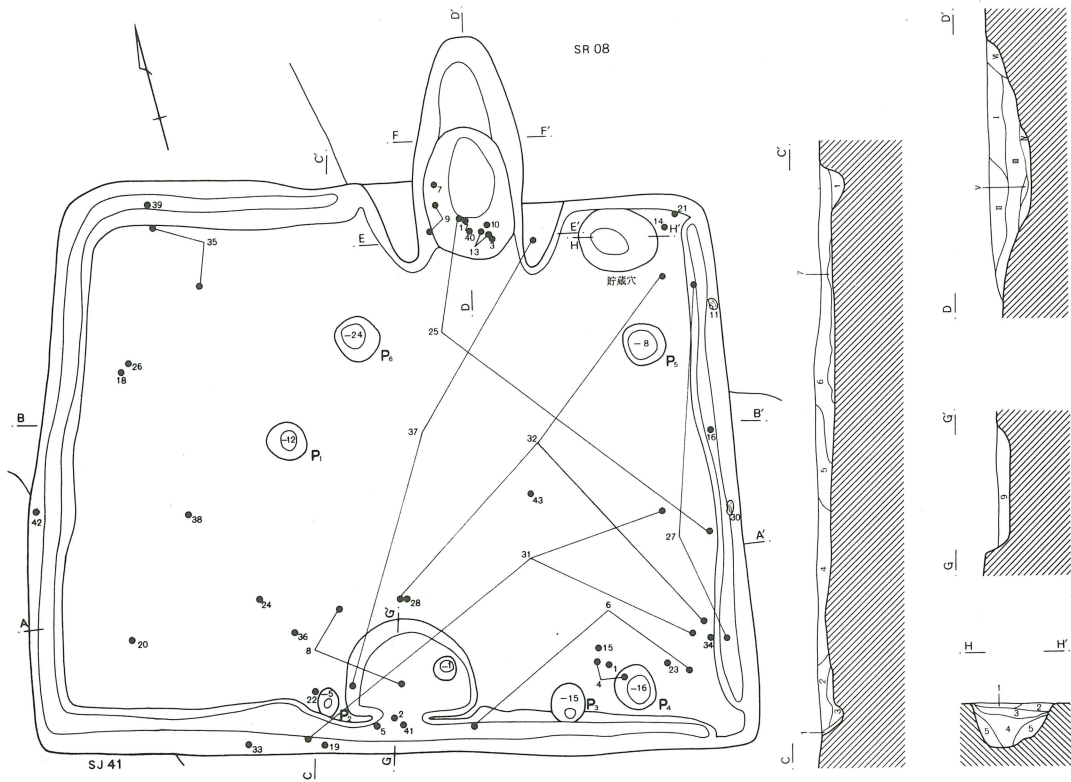
B区第40号住居跡(第109図)

D-7区に位置する。第41号住居跡、第8・15号方形周溝墓を切って構築される。形態は梯形気味の長方形を呈し、規模は長軸5.90m、短軸4.50m、深さ10~15cmを測る。主軸方位はN-17°-Eを示す。

床面はほぼ平坦でカマド前面から中央部は良く踏み固められていたが、壁際はやや軟弱であった。覆土は9層に分かれる。第1層は壁崩落土、または壁体の痕跡かもしれない。7層は床直上に堆積した灰層でカマドから掻き出されたものであろうか。堆積環境は不明確であるが、焼土粒子を極めて多量に含む層やロームの混入が目立つ層があり、部分的にせよやはり人為的な埋め戻し或いは投棄を想定すべきであろう。後述するように出土遺物の様相からみてもかなり短期間のうちに埋没した状況が読み取れる。

カマドは北壁中央よりやや東に寄った位置に設置される。焚口から先端までの長さは175cmと長大である。燃烧部は最大幅88cm、床面からの深さ25cmを測る。煙道部は燃烧部との区別が不鮮明であるが、緩やかに延び先端部で急角度で立ち上がる。カマド埋土は第I~III層は天井部崩落土、第V層が灰層、第IV層は被熱しており掘方埋土と考えられる。火床面は第IV層上面であろう。袖には灰褐色の粘土が用いられているが、痕跡程度であまりしっかりしたものではない。

貯蔵穴はカマド脇の北東コーナーに設けられる。形態は楕円形で、規模は長径62cm、短径50cm、



- 1 暗茶褐色土 ローム粒子を多量に含む。壁崩落土か。
 - 2 暗褐色土 焼土粒子・炭化物を少量含む。
 - 3 暗褐色土 2層と色調同じだが、各種粒子の混入が少ない。
 - 4 暗灰褐色土 ローム粒子を少量含む。
 - 5 暗褐色土 焼土粒子・ローム粒子・炭化物を多く含む。
 - 6 暗赤褐色土 径2～5mm大の焼土粒子を多量に含む。少量の炭化物混入。
 - 7 暗茶褐色土 灰層。黒色土と炭化物少量含む。
 - 8 暗灰褐色土 ローム粒子・焼土粒子をやや多く含む。
 - 9 暗褐色土 ロームブロック含み、少量の焼土粒子混入。
- 貯蔵穴
- 1 赤褐色土 焼土層。ローム混入。
 - 2 暗黄褐色土 貼床。ローム土・暗褐色土・焼土粒子混入。
 - 3 暗褐色土 少量の焼土粒子・ローム粒子含む。
 - 4 黒褐色土 多量の焼土粒子・ローム粒子・少量の炭化物含む。
 - 5 黒褐色土 少量の焼土粒子・ローム粒子・炭化物含む。

- カマド
- I 灰赤褐色土 灰色粘土混じりの焼土主体層。
 - II 暗灰褐色土 灰色シルト・焼土粒子・炭化物の混土層。かたく縮まっている。
 - III 暗赤褐色土 焼土ブロック・灰色粘土を斑状に含む。焼土主体層。微量の炭化物含む。
 - IV 暗赤褐色土 灰色粘土をより多く含み、くすんだ赤褐色を呈する。(被熱層)
 - V 灰層 黒色味が強い。
 - VI 褐色土 焼土小ブロック・炭化物・灰色粘土を含む。
 - VII 黒褐色土 ローム粒子を少量含む。
 - VIII 黒褐色土 灰色粘土粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。
 - IX 黒褐色土 焼土小ブロック・炭化物含む。
 - X 灰褐色土 灰色粘土主体層。



第109図 B区第40号住居跡

深さ28cmを測る。覆土は5層に分かれる。第2層はロームを主体とした貼床と考えられ、住居使用時のある時点において貯蔵穴を埋め戻されたものと推定される。但し、貼床は全面に及ばず上面の僅かな凹みには焼土が堆積していた(第1層)。

ピットは6本検出されたが、支柱穴配置は明確にできなかった。

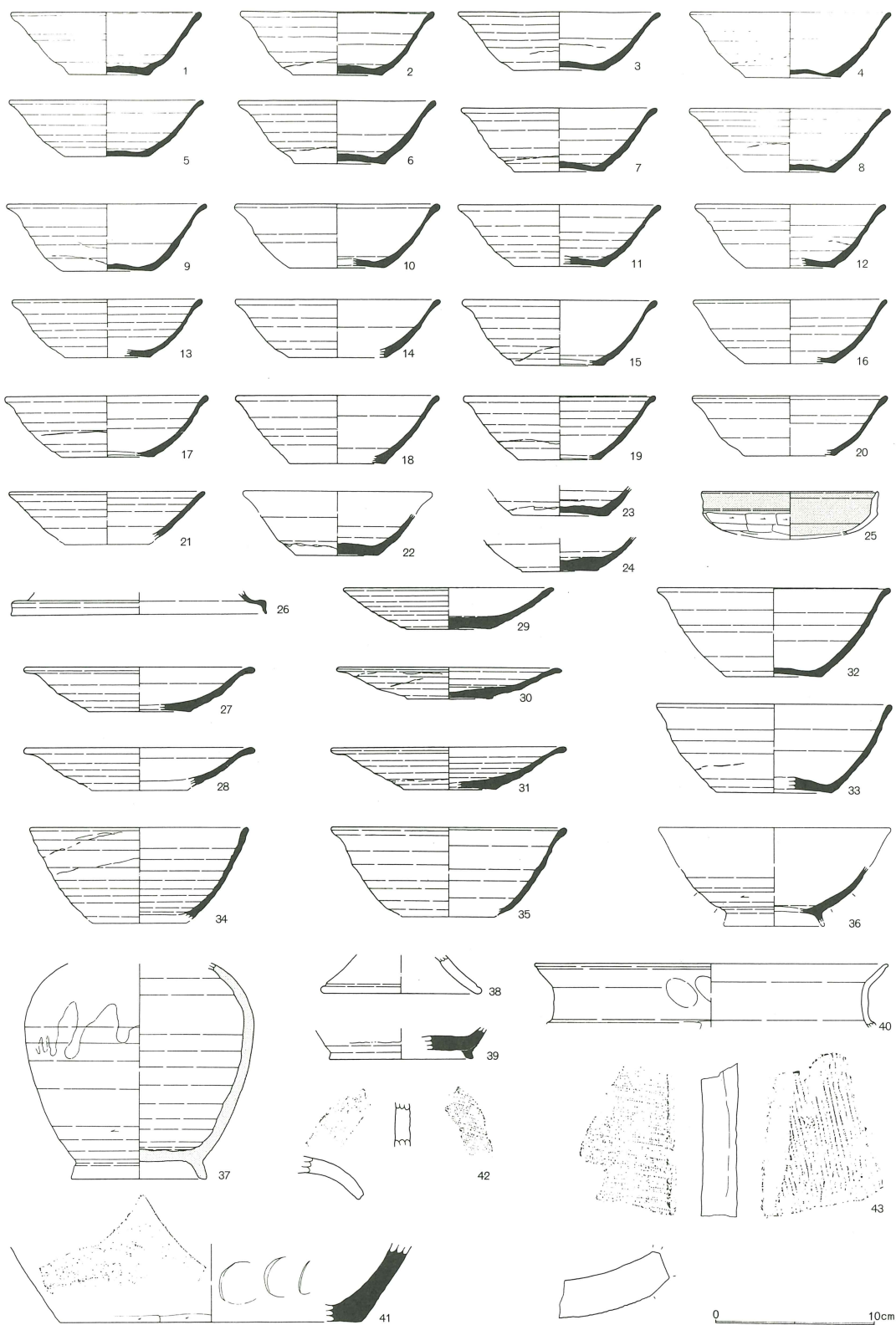
壁溝はカマド及び貯蔵穴部分を除きほぼ全周する。深さ5~10cm程度であるが、北壁側のみ深く最深部で15cmを測る。そのほか、南壁に接して浅い土壙状の掘り込みが検出されたが性格は明らかにできなかった。

遺物は多量に検出され、土器の個体数は159点を数える。器種としては土師器(坏・甕・台付甕、須恵器(坏・椀・高台付椀・皿・蓋・甕・壺、灰釉陶器(瓶、瓦と鉄滓がある。このうち土師器(坏は明らかに混入である。主体を為すのは須恵器(坏で全体の約3/4を占める。それに比して土師器(甕は非常に少なく接合後の口縁部個体数で僅か5点に過ぎない。出土状態をみると、上層から床面まで特に偏りなく出土し、かなり離れた位置のもの同士、或いは覆土上層と床面のものゝ結線される例がみられる。

須恵器(坏(第110図1~24)は全て底部回転糸切り後無調整である。器形的には体部がやや丸みをもって立ち上がり、口縁部は肥厚して外反するものが主体を占め器形上のバラエティは少ない。体部が直線的に外傾する21は例外的である。図化した須恵器(坏の平均法量を求めると、口径12.19cm、底径5.61cm、器高3.94cmを測り、径高指数(器高/口径×100)は32、口底指数(底径/口径×100)は46を示す。一口でいえば底部は口径の1/2以下に縮小した深身の坏ということになる。鳩山窯跡群との対比においては柳原1号窯灰原資料の法量分布(口底指数45、径口指数30)に近似するが、本住居の方が径高指数の値が大きく更に深身である。主体となる坏の様相としてはほぼ併行しつつもより古い段階にシフトしているといえよう。新しい様相をもつものとしては前述の21と底径が4cm代に縮小した24が挙げられ、同期でも後半に位置するものと考えられる。椀・皿の様相も矛盾しない。灰釉瓶(37)は肩部に自然釉が垂れる。胎土から猿投産と推定される。土師器(甕(40)は典型的な「コ」の字状口縁を呈する。小形瓦は丸瓦と思われ、凸面平行叩き、凹面布目痕(経糸18×緯糸18本/2cm)を残す。側端はケズリ。また、凸面には故意に磨ったような磨耗痕が認められる。43は平瓦。凹面糸切り後布目(3cm当り経糸20本、緯糸21本)、凸面細かい叩きを施す。粘土板を2枚張り合わせた痕跡がみられる。凹面に模骨痕はない。側縁はケズリ、端面は面取りされる。須恵器の様相から稲荷前XIII期に比定される。

B区第40号住居跡出土遺物観察表(第110図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	11.7	4.0	5.0	A J	A	黄灰	100%	No.255 床面
2	坏	(12.1)	4.0	5.6	A B C	A	灰	25%	No.265 覆土(+8cm)
3	坏	(12.5)	3.7	(5.8)	A B C	A	淡橙	35%	No.279 カマド内
4	坏	12.4	4.1	6.0	A B C	A	にぶい橙	85%	No.254, 257 覆土(+4cm)
5	坏	(12.0)	3.6	5.2	A B C	B	灰	35%	No.269 壁溝上覆土(+13cm)
6	坏	12.2	4.0	5.7	A B C	A	灰	60%	No.252, 260 覆土(0~+14cm)
7	坏	(12.2)	4.0	5.6	A B C	A	オリ-7灰	45%	No.276 カマド内
8	坏	(12.4)	4.0	5.7	A B C	B	緑灰	35%	No.39, 263 覆土(+6cm)
9	坏	(12.3)	4.2	5.6	A B C	B	浅黄橙	40%	No.274, 275 カマド内(+2~10cm)



第110图 B区第40号住居跡出土遺物

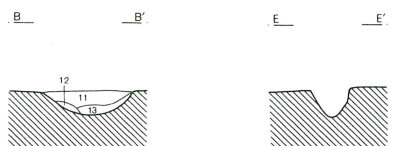
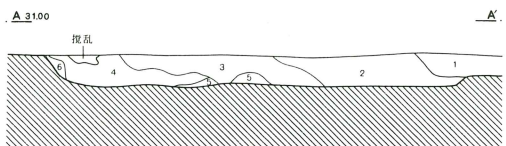
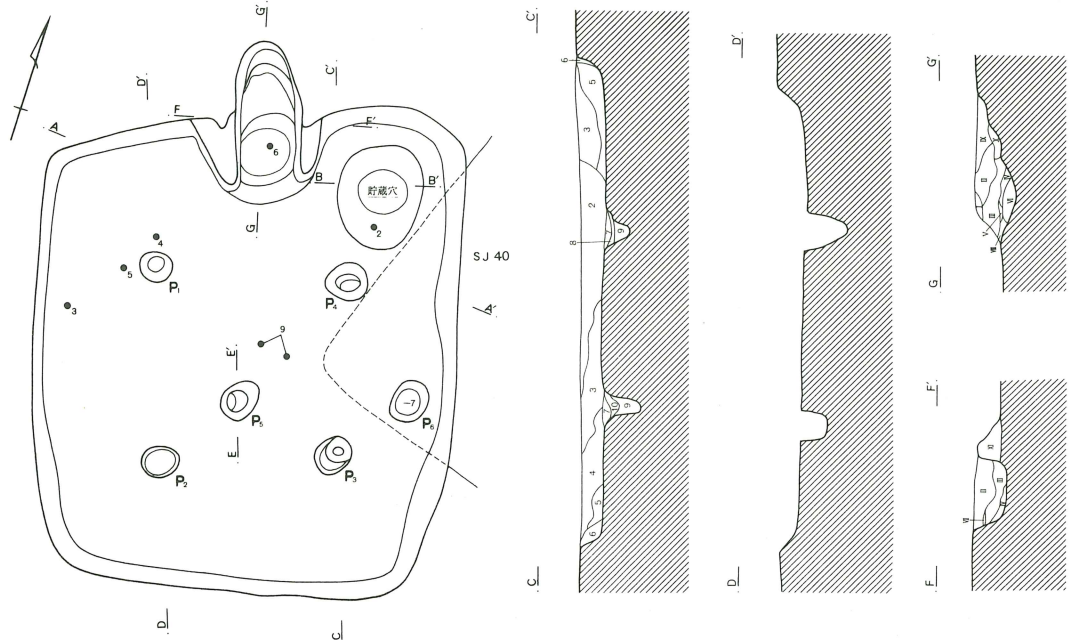
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
10	坏	(12.6)	4.0	(6.0)	C	A	灰黄	40%	No.278 カマド内
11	坏	(12.6)	3.9	(5.7)	A C	A	緑灰	45%	No.244 壁溝上面
12	坏	(11.8)	4.0	5.5	A B C	B	灰	30%	覆土
13	坏	(11.7)	3.7	5.4	A B C	A	緑灰	40%	No.286, 287 カマド内
14	坏	(12.8)	3.6	(6.2)	A B C	A	灰	25%	No.242 床面 底部回転糸切り
15	坏	(12.0)	4.1	(5.6)	A B C	B	暗青灰	20%	No.258 覆土(+4cm)
16	坏	(12.0)	4.0	(5.8)	A B C	B	灰	15%	No.188 覆土(+4cm)
17	坏	(12.6)	3.9	(5.8)	A B C	B	黄灰	20%	No.277 カマド内
18	坏	12.6	4.3	6.0	C	C	橙	30%	No.153 覆土(+11cm)
19	坏	(11.9)	4.0	5.7	A B C	A	灰黄	20%	No.333 壁溝内(溝底)
20	坏	(12.0)	3.8	(5.7)	A B C	B	灰	15%	No.67 床面
21	坏	(12.0)	3.0		A B	A	オリブ灰	25%	No.309 床面
22	坏		2.6	5.2	A B C	A	緑灰	35%	No.46 覆土(+5cm)
23	坏		1.9	5.8	A B C	A	褐灰	80%	No.253 覆土(+6cm)
24	坏		2.1	4.8	A C	C	暗灰	40%	No.51 覆土(+4cm)
25	坏	(11.0)	2.7		A B E	A	にふい橙	20%	No.3, 24 カマド内+床面 赤彩
26	蓋	(16.0)	1.4		A B C	A	灰	10%	No.140 覆土下層
27	皿	(14.2)	2.8	(6.4)	A B C	B	灰黄	25%	No.207, 250 覆土(+6cm)
28	皿	(14.2)	2.5		A B C	A	にふい黄橙	20%	No.261 覆土(+6cm)
29	皿	(13.0)	2.6	5.3	A B	C	淡橙	40%	カマド内
30	皿	13.6	2.0	5.4	A B C	A	灰白	90%	No.245 壁溝内
31	皿	14.4	2.7	5.9	A B C	A	にふい橙	55%	No.6, 45, 251 覆土(+1~7cm)
32	碗	(14.4)	5.6	6.0	A B C	B	淡黄	30%	No.205, 248, 261 覆土下層
33	碗	(14.6)	5.6	(7.2)	A B C	B	にふい橙	35%	No.270 壁溝内
34	碗	(13.6)	5.7		A B C	B	灰	30%	No.249 覆土(+3cm)
35	碗	(14.6)	5.5		A C	A	にふい橙	10%	No.136, 315 覆土(+10cm)
36	高台碗		3.5		A B C	B	にふい黄橙	20%	No.42 覆土(+5cm)
37	長頸瓶		13.5	8.4	A G	A	灰白	30%	No.239, 264 床面 灰釉
38	台付甕		2.4	(9.7)	A E	A	にふい橙	20%	No.127 覆土(+5cm)
39	長頸瓶		1.9	9.0	A B C	A	灰	15%	No.314 床面 内面風化
40	甕	(22.0)	4.0		A B E	B	橙	5%	No.238 カマド内 頸部指押え
41	甕		4.9	(19.0)	A B C	A	黄灰	10%	No.266 覆土(+9cm)
42	丸瓦				A B C	A	灰白		No.216 覆土(+12cm)
43	平瓦				A B C	A	灰白		No.171 床面

B区第41号住居跡(第111図)

D-7区に位置し、東壁上部を第40号住居跡に切られている。形態は不整長方形を呈し、規模は長軸3.62m、短軸3.34m、深さ20cmを測る。主軸方位はN-32°-Wを示す。

床面は壁際がやや浅く中央部に向かって緩く傾斜していた。住居覆土は6層に分かれる。第1層は40号住居跡埋土、第6層は壁崩落土と考えられる。

カマドは北壁に設置される。全長128cm、幅50cmを測り、壁を約60cm掘り込んでいる。燃烧部は床面下13cm掘り込まれ、2段のテラスをもつ煙道部に続く。カマド土層は11層に分かれ、第I~III層・IX層が天井部崩落土、IV・V・VIII層が灰層、VI層は掘方と推定される。袖は灰色粘質土を主体に構築されるが遺存状態は悪い。



- 1 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子やや多量に含む。
- 2 暗灰褐色土 焼土粒子を少量含む。砂質で小礫混入。
- 3 黒褐色土 ローム・微量の焼土粒混入。
- 4 黒褐色土 ローム粒・焼土粒少量混入。
- 5 暗褐色土 ローム斑状に含む。焼土粒子少量混入。
- 6 暗黄褐色土 ローム小ブロック混入。壁崩落土。
- 7 暗褐色土 ローム粒子やや多量に混入。
- 8 暗灰褐色土 焼土粒子微量混入。
- 9 暗黄褐色土 小礫多量に混入。
- 10 暗黄褐色土 多量のローム粒子と少量の礫を混入。
- 11 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量混入。
- 12 暗黄褐色土 ローム多量混入。小礫混じり。
- 13 暗褐色土 ローム粒・焼土粒・炭化物多量混入。

- カマド
- I 暗黄褐色土 ローム粒子・炭化物微量混入。
 - II 暗褐色土 淡灰色粘土と焼土粒子混入。
 - III 褐色土 焼土ブロック・粘土粒子多量混入。
 - IV 赤褐色土 焼土粒子多量混入。
 - V 灰褐色土 灰色土混じり。焼土粒子少量混入。
 - VI 黄褐色土 灰白色粘土・ローム粒子・焼土粒子混入。
 - VII 灰黒色土 灰色土混じり。ローム粒子少量混入。
 - VIII 暗褐色土 淡灰色粘土とローム混入。
 - IX 灰黒色土 灰色粘土粒子多量混入。
 - X 赤褐色土 焼土主体。灰色粘質土混入。
 - XI 淡灰色土 粘質土主体。焼土とロームブロック混入。



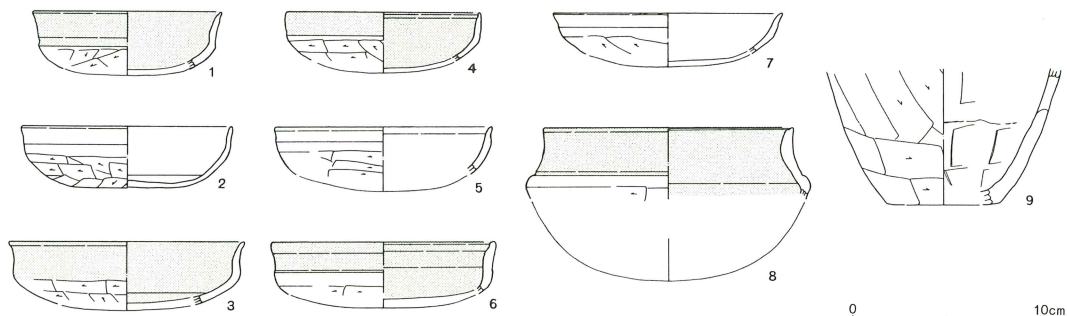
第111図 B区第41号住居跡

貯蔵穴は北東コーナー部に設けられる。規模は長径84cm、短径68cm、深さは20cmを測る。埋土はローム・焼土・炭化物粒子混じりの暗褐色土を主体とする。

ピットは6本検出され、P₁～P₄が支柱穴に相当する。P₅は覆土の状態から伴う可能性があるが、P₆の帰属は不明である。

出土遺物は少なく20個体に留まる。ほとんどが小片で、器種としては土師器杯・椀・甕・壺、須恵器杯・高台杯・甕・壺がある。土師器杯(第112図1～7)は比企型杯、及びその系譜を引くものと模倣杯がある。白色針状物質が肉眼的に確認できないものが5点認められた。3は比企型杯としてよいものであり、推定口径は12.6cmを測りこの中では最も大きい。他の土器群よりも様相としては古く、床面出土ではあるが混入の疑いもある。1・4・6は模倣杯系の比企型杯と考えられる。2は模倣杯

か。器高は浅めで底部は平底風となる。5・7は比企型坏の範疇からははずれる土器である。8は赤彩される椀で口唇端面に沈線が巡る。須恵器は甕の胴部小片の1つに内面青海波文をもつものが見られ、住居に伴う可能性があるが、他は8～9世紀代のもので混入と考えられる。主体となる土師器坏の様相から稲荷前IV期に比定しておきたい。



第112図 B区第41号住居跡出土遺物

B区第41号住居跡出土遺物観察表(第112図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(9.9)	3.0		ABC	B	浅黄橙	15%	覆土 赤彩
2	坏	(11.0)	3.2		AB	A	にふい橙	20%	No.2 カマド内 無彩
3	坏	(12.4)	3.3		ABCE	A	にふい橙	15%	No.12 床面 赤彩 混入の可能性あり
4	坏	(10.2)	2.6		AB	A	にふい橙	20%	No.9 覆土(+5cm) 赤彩
5	坏	(11.4)	2.5		AB	B	にふい褐	10%	No.10 覆土(+7cm) 無彩
6	坏	(11.6)	2.7		AB	A	橙	10%	No.26 カマド内 赤彩
7	坏	(12.0)	2.1		B	A	にふい褐	10%	覆土 無彩 白色針含まれない
8	椀	(13.1)	3.8		ABC	A	浅黄橙	5%	覆土 赤彩
9	甕		7.1	(6.0)	ABCE	B	にふい黄橙	20%	No.16,17 覆土(+9cm)

B区第42号住居跡(第113図)

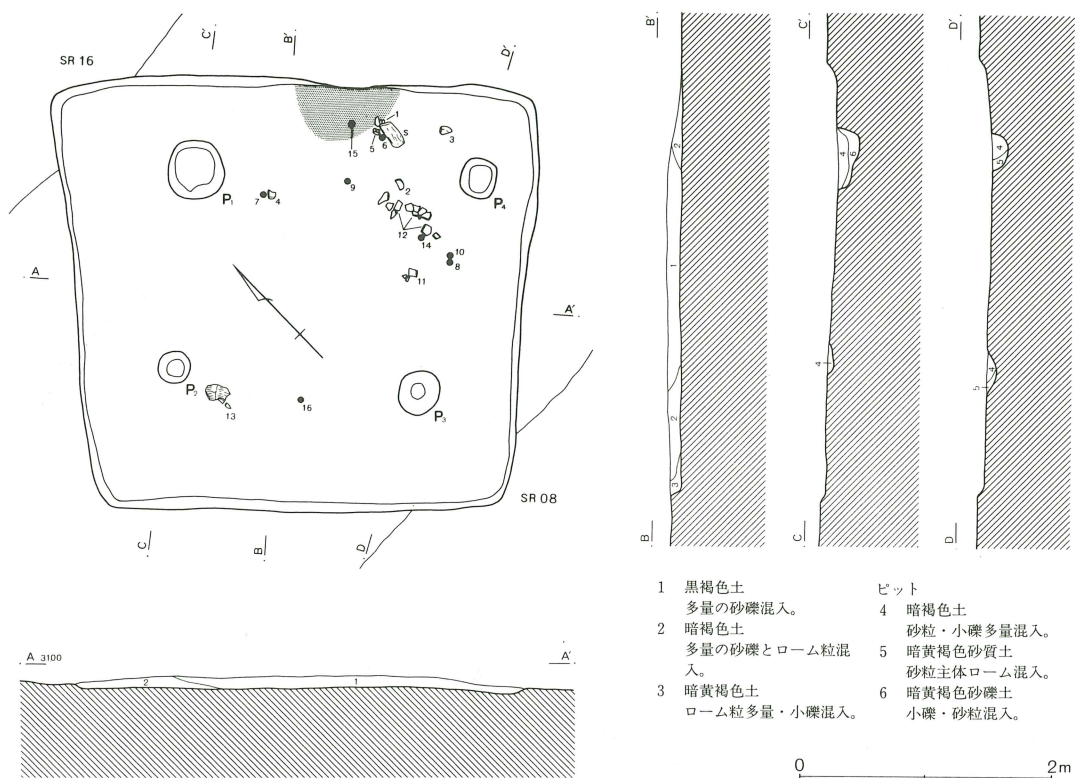
調査区中央部北端のB・C-8区に位置する。第8号、16号方形周溝墓の周溝を切って構築されていた。形態は台形を呈し、規模は長軸(北東辺)3.82m、短軸3.40m、深さは全体に浅く5cm以下である。主軸方位は南東壁に直交するラインを採るとN-45°-Eを示す。

床面は細かい凹凸が顕著で、堅く踏み締められたような形跡は認められなかった。覆土は3層に分けられ、全体的に小礫とロームが多く含まれていた。層厚が薄いため埋没状況の詳細は明らかにできない。

カマドはおそらく北東壁に存在したものと推定されるが、薄い灰褐色粘土の堆積が確認されたに留まり明確な壁内施設は検出できなかった(トーン範囲)。壁外に存在したであろう煙道部も削平されたものと考えられる。

ピットは4本検出された。配置的には支柱穴と考えてもよいが、何れも深度が浅く柱痕も確認できなかった。貯蔵穴、壁溝は存在しない。

出土遺物には土師器坏・椀・甕・小形甕・壺、須恵器坏・甕・平瓶・提瓶があり、総个体数は31点を数える。床面よりも数cm浮いたレベルから出土したものが多い。



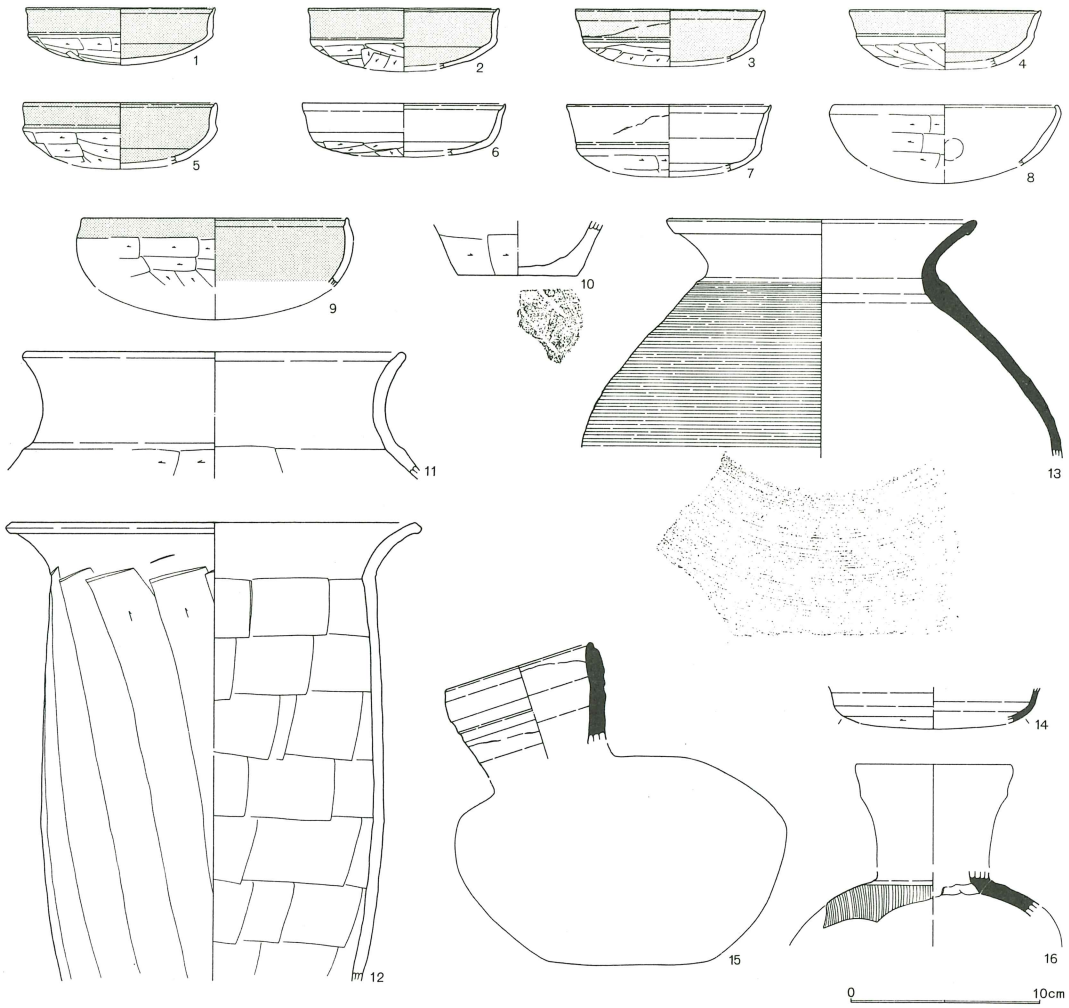
第113図 B区第42号住居跡

土師器坏は比企型坏系統の土器群と北武蔵型坏がある。前者は口径が9.9~10.7cmと非常に小振りである(第114図1~7)。模倣坏系の比企型坏が主体を占める(1~5・7)。6は比企型坏としてもよいが、口縁部が外傾し、体部が扁平化するなど最も新しい様相をもつ。北武蔵型坏は口縁部の内屈がきつく、同坏の型式組列の中でも古段階に属するものと考えられる。

須恵器は量的には少ない。坏(14)は小片のため器形や傾きは図示したとおりとはいえないが、やや小振りで底部は回転篋削り調整が施される。甕(13)は胴部にカキ目が巡り、内面はロクロナデ調整され平滑である。やや焼き締まりが悪く内面は黒味が強い。白色針状物質が多量に含まれ明らかに在地産(南比企窯跡群産)である。15は口縁部に沈線が2条巡り粘土紐積み上げ痕を明瞭に残す。東松山市桜山古墳群第10号墳出土の平瓶と酷似した作風であるため、一応平瓶と考えておきたい。16は提瓶肩部片か。外面にカキ目が施される。平瓶と提瓶には白色針状物質が確認できないが素地土の肌目の粗さは共通しおそらく在地産であろう。土師器坏の様相からみて稲荷前IV期に比定される。

B区第42号住居跡出土遺物観察表(第114図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他	
1	坏		9.9	3.1	AB	A	にぶい橙	60%	No.32	覆土(+9cm) 赤彩
2	坏	(10.0)	3.2		AB	A	橙	35%	No.30	覆土(+5cm) 赤彩
3	坏	(9.9)	2.7		AB	A	にぶい橙	25%	No.35	覆土(+7cm) 赤彩
4	坏	(10.0)	3.0		ABC	A	にぶい橙	20%	No.17	床面 赤彩



第114図 B区第42号住居跡出土遺物

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
5	坏	(10.1)	3.2	(6.4)	ABE	A	にふい橙	25%	No.31 覆土(+6cm) 赤彩
6	坏	(10.7)	2.7		B	A	にふい橙	25%	No.31 覆土(+6cm) 無彩
7	坏	(10.7)	3.5		ABC	C	にふい橙	15%	No.17 床面 無彩
8	坏	(11.6)	3.2		ABE	A	橙	15%	No.26 床面 北武蔵型坏
9	椀	(14.0)	3.6		ABC	C	にふい橙	15%	No.40 床面 赤彩
10	甕		2.8		ABC	A	浅黄橙	25%	No.26 床面 底部木葉痕残る
11	壺	(19.8)	6.6		ABCE	A	橙	10%	No.20 覆土(+10cm) 無彩
12	甕	(21.3)	24.0		ABC	A	にふい橙	25%	No.25~28 覆土(+1~10cm)
13	壺	(16.0)	12.5		AC	B	灰	40%	No.16 床面 在地産
14	坏		1.9		ABC	A	灰	10%	No.27 覆土(+6cm)
15	平瓶	(7.9)	5.1		AB	B	灰	35%	No.41 覆土(+7cm) 在地産か
16	提瓶				AB	A	灰	15%	No.5 床面

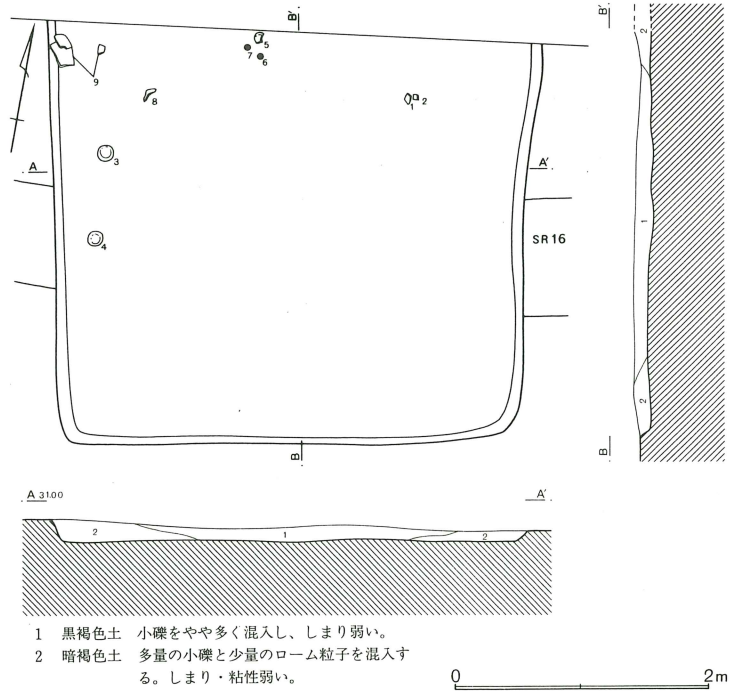
B区第43号住居跡(第115図)

B-8区に位置し、第42号住居跡の北東に隣接する。第16号方形周溝墓を切って構築されているが、住居北半は調査区外に延びており全容は不明である。形態は方形を呈するものと推定され、残存規模は東西長3.90m、南北長3.30m、確認面からの深さは10~20cmを測る。主軸方位はN-12°-Wを示す。

床面は凹凸が顕著で一定しない。覆土は小礫を多く含む黒褐色から暗褐色土で構成されていた。埋没過程は自然堆積と思われるものの断定はできない。

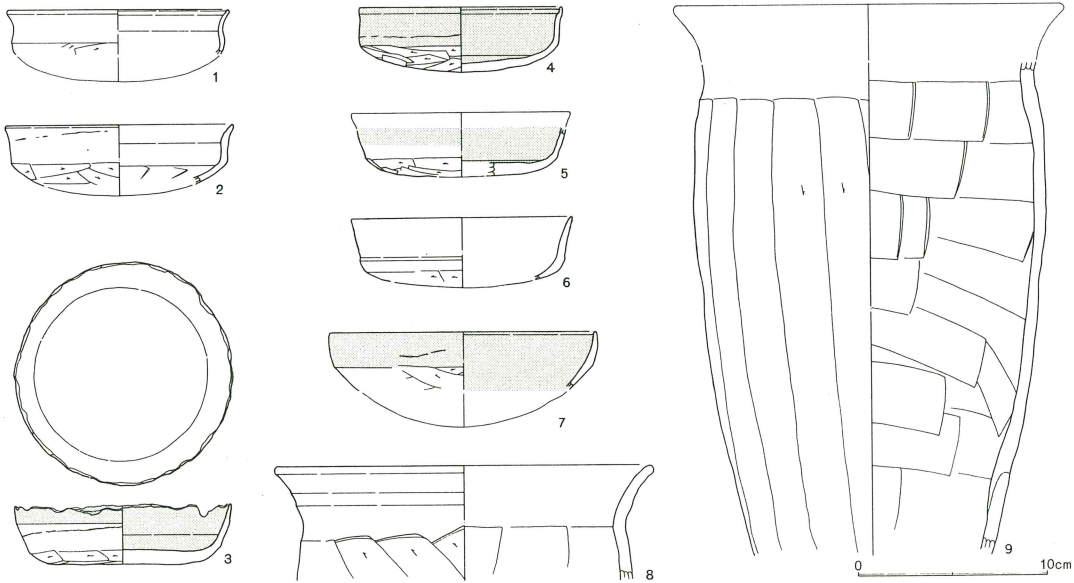
カマドは残存部には存在せず、貯蔵穴、ピットも確認されなかった。

出土遺物は混入の縄文土器片5点を除くとすべて土師器で占められ、器種としては坏が6点、椀が1点、甕が6点ある。第116図5の坏は床面から出土し、他は覆土から検出された。3・4



- 1 黒褐色土 小礫をやや多く混入し、しまり弱い。
- 2 暗褐色土 多量の小礫と少量のローム粒子を混入する。しまり・粘性弱い。

第115図 B区第43号住居跡



第116図 B区第43号住居跡出土遺物

はほぼ完形である。1～5の坏は比企型坏の範疇に含めてよいと思われるが口径は10.6～11.9cmとかなり縮小し、赤彩を省略する(1・2)、底部が平底化する(3)といった特徴から比企型坏としてもかなり新しい段階に属することが窺われる。但し、3の坏は口縁部が二次的に打ち欠き調整され、口唇部の旧状は不明である。端部が磨滅していることから再調整後も使用されたものと考えられる。6は赤彩されず、口縁部内面の沈線も見られないことから模倣坏の系列に属するものと推定される。甕は所謂長胴甕で、口縁部は緩やかに外反し胴部は胴部上半に弱い膨らみをもつ(8・9)。出土時の様相から稲荷前III期でも後半段階に比定されよう。

B区第43号住居跡出土遺物観察表(第116図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(11.5)	2.3		ABC	A	にぶい橙	10%	No.25 覆土(+5cm) 無彩
2	坏	(11.9)	3.1		ABC	B	にぶい褐	25%	No.25 覆土(+5cm) 無彩
3	坏	11.4	3.2		ABC	A	橙	100%	No.18 覆土(+10cm) 赤彩
4	坏	10.6	3.4		AB	A	にぶい橙	100%	No.27 覆土(+10cm) 赤彩
5	坏		2.4		ABC	A	にぶい橙	25%	No.23 覆土(+6cm) 赤彩
6	坏	(11.6)	3.4		ABCJ	C	橙	10%	No.26 床面 全体に風化 無彩か
7	椀	(14.0)	3.1		AB	A	浅黄橙	10%	No.9 覆土(+12cm) 赤彩
8	甕	(19.6)	6.0		ABC	B	にぶい黄橙	20%	No.21 覆土(+10cm)
9	甕		25.8		ABCJ	A	橙	45%	No.6, 19, 20 覆土(+3~15cm)

B区第44号住居跡(第117図)

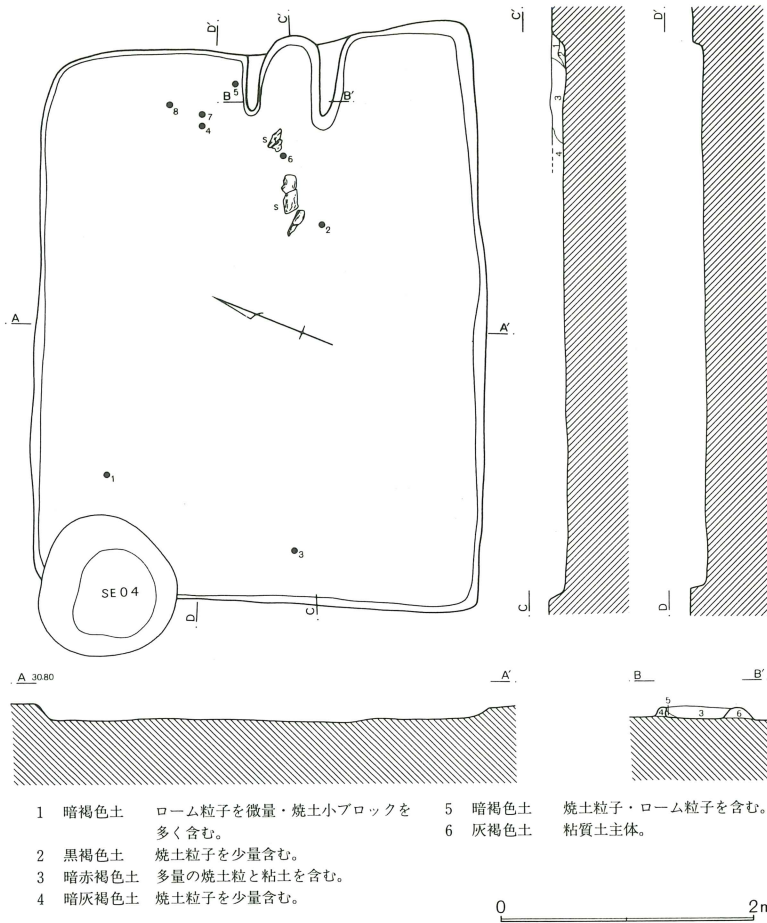
D-8区に位置し、住居の大半は第8号方形周溝墓南溝の上部に掛かっていた。また、北西コーナーには第4号井戸跡が重複し、新旧関係は本住居跡の方が古いものと推定された。形態は長方形を呈するがカマド右側のコーナーがやや歪む。規模は長軸4.64m、短軸3.60m、深さ約10cmを測る。主軸方位はN-70°-Eを示す。

床面はほぼ平坦である。覆土は焼土を少量含む暗灰褐色土で構成され、特に土層変化は観察されなかった。

カマドは東壁に設けられ、壁を12cm掘り込んで構築されていた。壁外の掘り込みが少ないこと、袖が残存することなど本集落でも最新段階に属するであろう住居のカマドとしてはかなり異例といわざるを得ない。底面はほぼ水平で床面との段差は認められない。奥壁からカマド底面は強く被熱し赤変していた。覆土は6層に分けられ、第I～IV層が天井部崩落土に相当しよう。第III層には焼土が多量に含まれていた。底面及び覆土の状況から底面をそのまま火床面としていたものと考えられる。袖は灰褐色粘質土を主体に構築されていた。貯蔵穴、柱穴等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物には土師器坏・甕・壺、須恵器坏・高台坏・甕・壺、鉄滓がある。出土量は少なく、19点に留まる。このうち土師器坏と壺は混入である。須恵器坏は15点あり主体を占める。但し、ここで須恵器坏としたものは非クロの土師器坏との対比上そう述べただけで、酸化焰焼成されたものか還元焰焼成されたものか判別しがたいものを含んでいる。

第118図1は橙褐色を呈し、還元焰焼成を受けた痕跡は見られないが硬く焼成されている。底部は回転糸切り後無調整で、口底指数(底径/口径×100)は0.35と底径の縮小化は著しい。2・3も同類であろう。6は須恵器高台坏で底部内面が著しく磨滅しており転用硯として使用された可能性があ



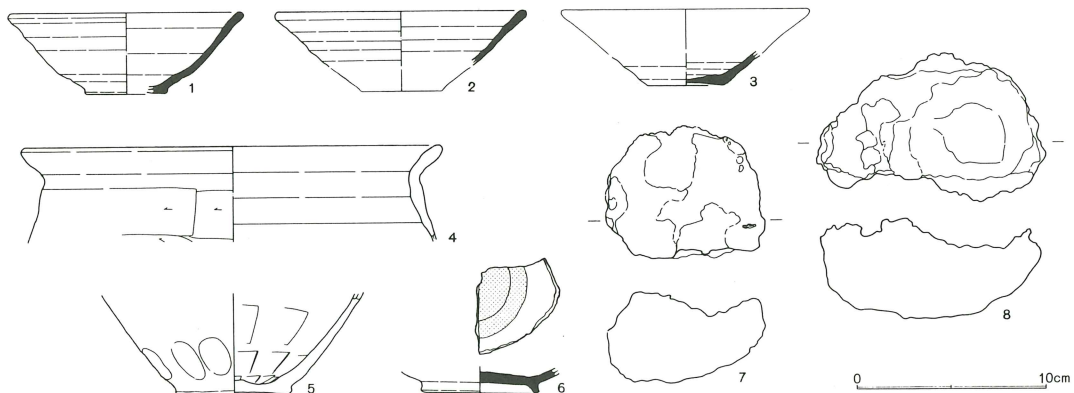
- | | | | |
|---------|-------------------------|--------|----------------|
| 1 暗褐色土 | ローム粒子を微量・焼土小アブロックを多く含む。 | 5 暗褐色土 | 焼土粒子・ローム粒子を含む。 |
| 2 黒褐色土 | 焼土粒子を少量含む。 | 6 灰褐色土 | 粘質土主体。 |
| 3 暗赤褐色土 | 多量の焼土粒と粘土を含む。 | | |
| 4 暗灰褐色土 | 焼土粒子を少量含む。 | | |

第117図 B区第44号住居跡

る。4は所謂「コ」の字状口縁甕の範疇を外れる形態と思われる。口縁は「く」の字状に屈曲しヘラケズリは口縁直下まで及んでいる。胎土中には白色針状物質を明確には確認できなかったが在地産の可能性はある。5は4のような口縁形態をもつ甕の底部と思われる。底部外面には多量の砂が素地土に付着し(砂底)、胴部は指押さへの痕跡と思われる凹凸が残るのみでヘラケズリは施されていない。最終調整であるヘラケズリを省略して焼成した可能性もある。

7・8は椀形滓である。カマド脇のほぼ床面から

出土した。しかし、ているが、鍛冶炉と思われる施設は検出されていない。7は左側面を欠損する。木炭痕が数か所残存する。比較的重量感のある緻密な滓である。8は大形の滓で図上で下半を欠く。色調は黒褐色を呈し、上面は大きく凹む。側縁から底面は細礫混じりの粘土が付着する。稻荷前X IV期に比定される。



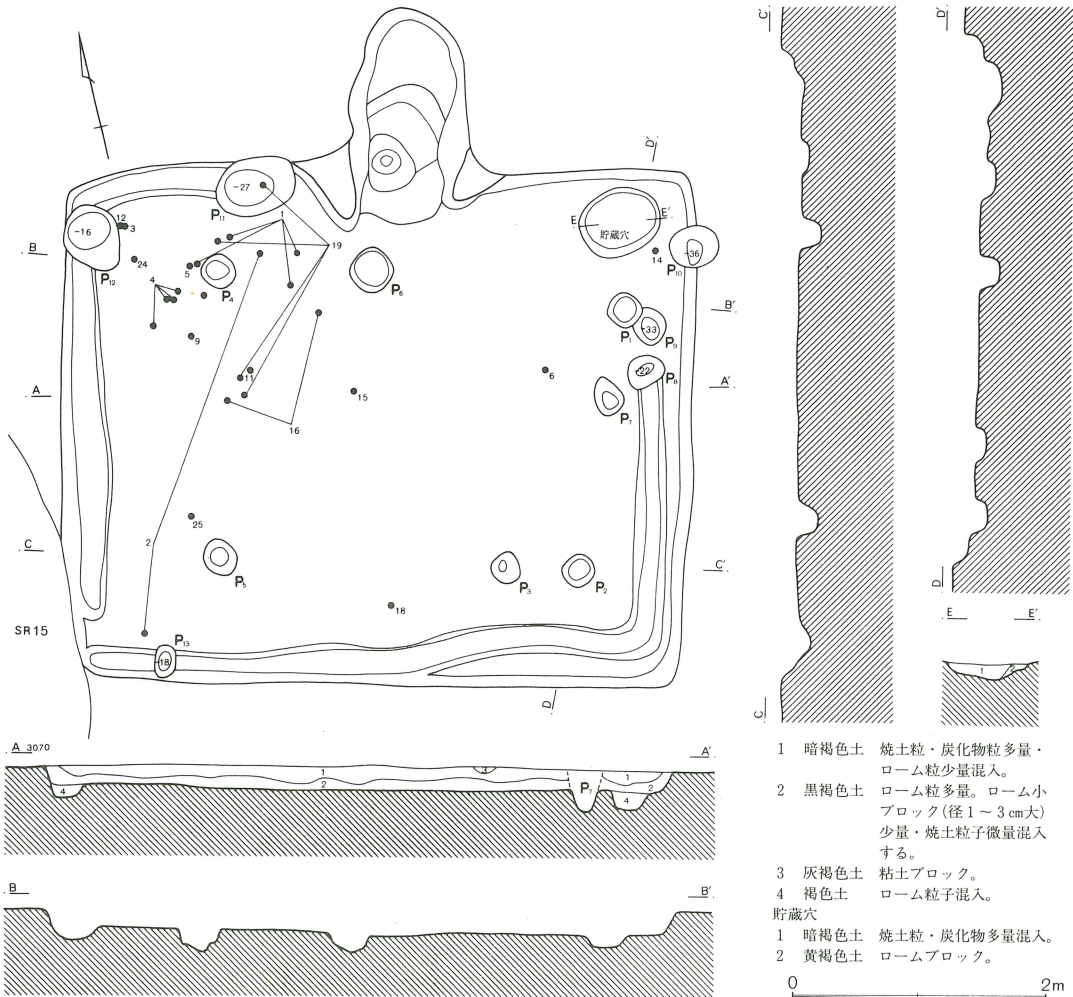
第118図 B区第44号住居跡出土遺物

B区第44号住居跡出土遺物観察表(第118図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.0)	4.3	(4.2)	AB	A	橙	15%	No.17 床面 酸化焰焼成
2	坏	(13.0)	2.9		ABC	C	にふい橙	15%	No.24 床面
3	坏		1.7	4.0	ABC	C	にふい褐	45%	No.8 覆土(+6cm)
4	甕	(21.8)	5.0		ABEJ	A	浅黄橙	10%	No.2 覆土(+9cm)
5	甕	5.3	5.8		ABEJ	A	橙	80%	No.39 床面 底部砂底 胴部指押え痕
6	高台坏		1.8	(5.8)	ABC	B	緑灰	25%	No.28 覆土(+6cm)
7	椀型埴								床面 長径8.4,短径6.8,厚さ4.8cm
8	椀型埴								床面 長径12.2,短径7.3,厚さ5.2cm

B区第45号住居跡(第119・120図)

D・E-8区に位置し、第15号方形周溝墓南東コーナーを僅かに切っている。形態は長方形を呈し、規模は長軸4.96m、短軸4.06m、深さ約20cmを測る。主軸方位はN-15°-Eを示す。



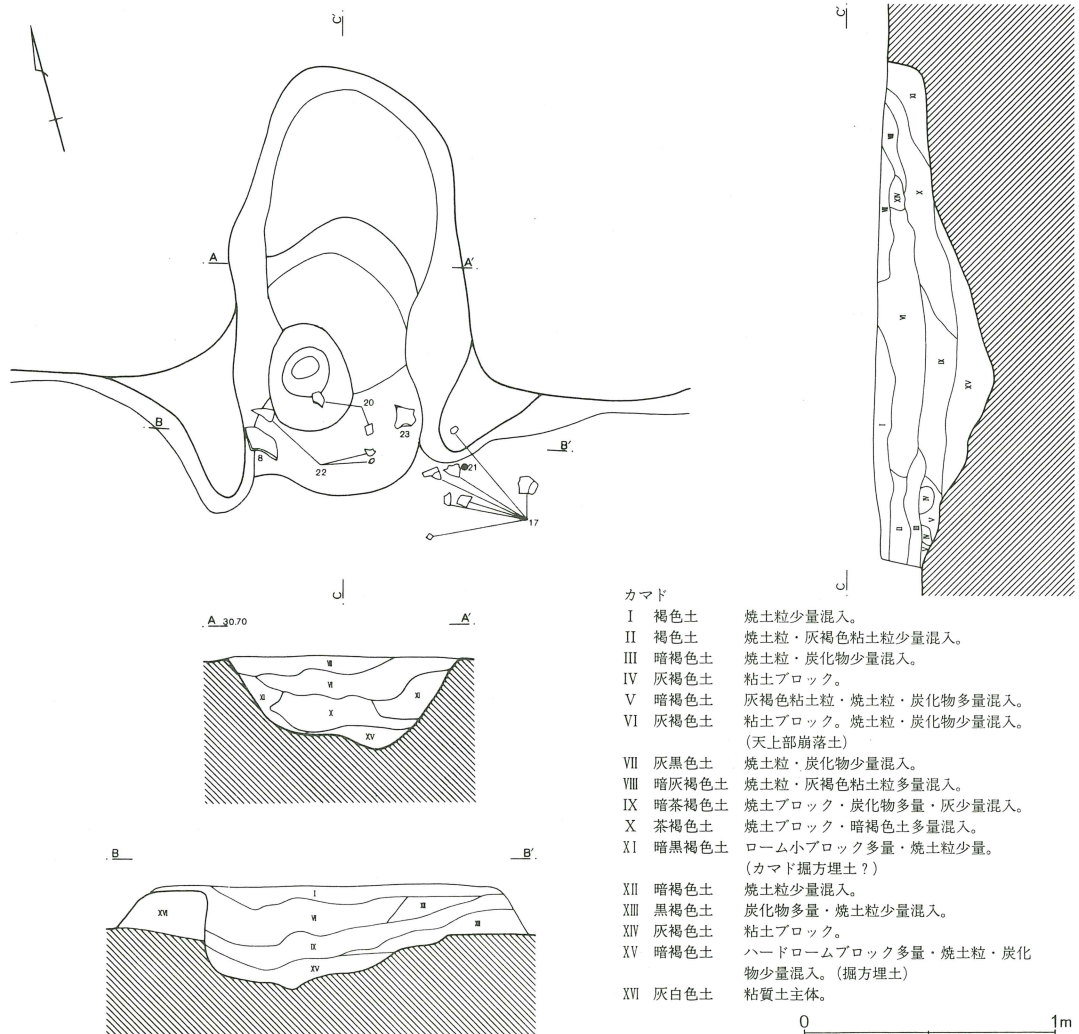
第119図 B区第45号住居跡

床面は概ね平坦である。住居覆土は大きく2層に分かれる。上層(第1層)は焼土と炭化物を多量に含む暗褐色土で、下層(第2層)は色調が1層よりもやや黒味が強くロームの混入が目立つ。

カマドは北壁に設けられていた。壁を約130cm掘り込んで構築され、全長は170cm、燃焼部最大幅は94cmを測る。燃焼部は床面下に約30cm掘り込まれている。煙道部は燃焼部とほぼ同じ幅で延び、底面はフラットである。先端部は垂直に立ち上がる。カマド土層は15層に分かれ、第I～XIV層は天井部及び袖の崩落土、XV層は掘方埋土と推定される。第IX層中に灰が検出されたことから火床面はXV層上面と考えられる。袖は僅かに残存する程度でしっかりしたものではない。袖構築土は灰白色粘土が用いられていたが構築状態は明らかにできなかった。

貯蔵穴は北東コーナー部に位置する。長径62cm、短径52cmの楕円形プランを呈し深さ12cmを測る。覆土は東壁側からローム主体の黄褐色土が流れ込み、その後焼土・炭化物を多量に含む暗褐色土が覆っていた。ピットは13本検出されたが、確実に伴うといえるものはない。

壁溝はカマドから貯蔵穴の周辺、南西コーナーを除いた部分で検出された。幅20～40cm、深さ10

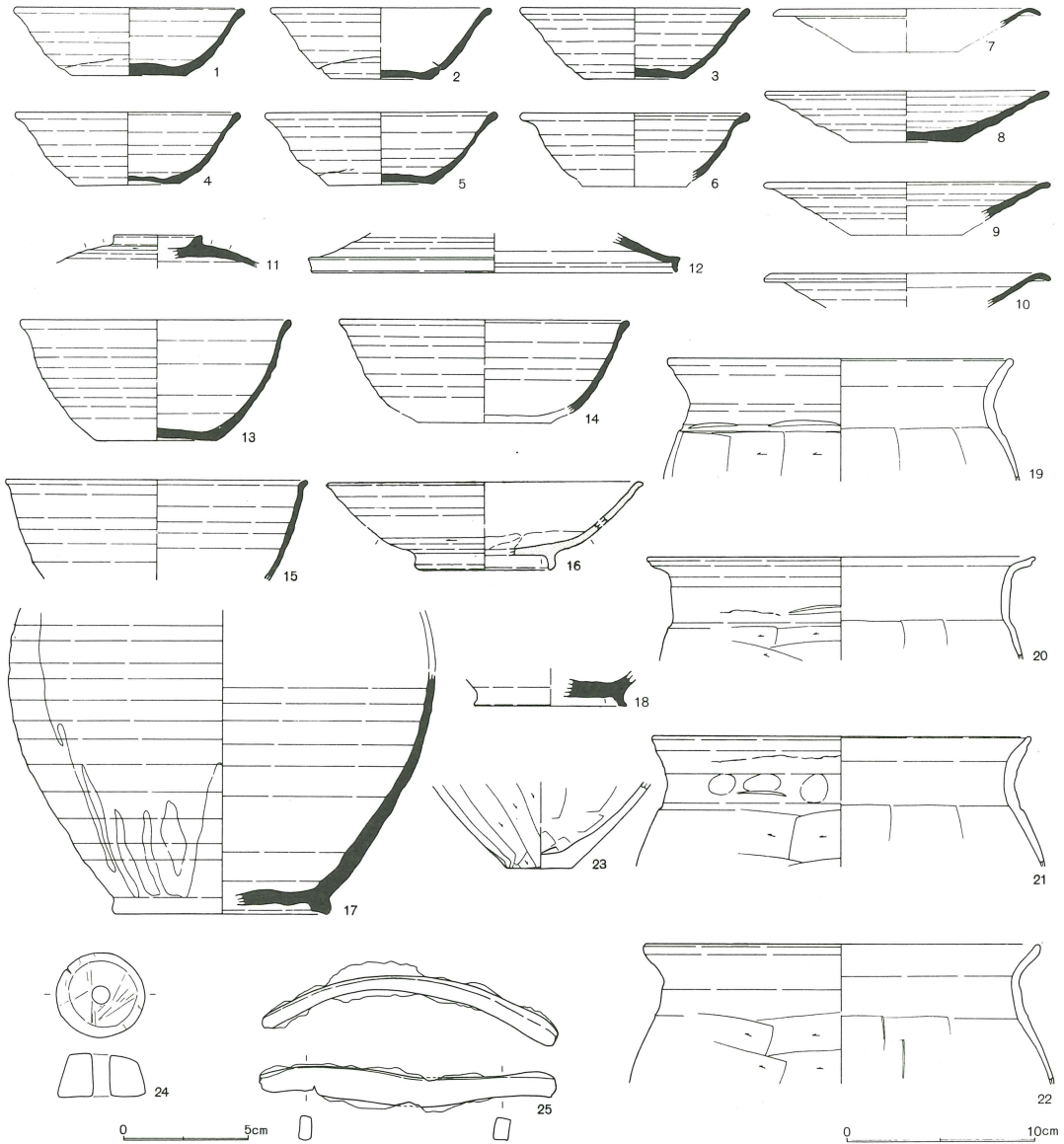


第120図 B区第45号住居跡カマド

cm前後を測る。南壁東半から東壁にかけては壁よりもやや内側にずれていた。

出土遺物は比較的多量に検出された。出土レベルは全体にかなり浮いた位置から出土したものが多。7世紀代の土師器杯と甕の小片など混入資料を除外すると、須恵器杯・碗・高台碗・皿・蓋・甕・瓶、灰釉陶器碗・瓶が合わせて76個体が検出された。須恵器杯が主体を為し凡そ半数を占める。その他石製紡錘車と不明鉄器が出土している。

須恵器杯(第121図1~6)のうち、器形の判明する5点のデータは推定を含めて口径11.6~12.1cm、底径5.3~6.0cm、器高3.6~3.9cmに分布する。平均口径11.9cm、口底指数は47.4、径口指数は31.9を示す。底径は口径の1/2を切り、やや深身の杯ということになる。形態は胴部中位で膨らみをもち口縁部は肥厚気味に外反するものが主体である。碗(13~15)は口縁部を小さく外反させる深身



第121図 B区第45号住居跡出土遺物

のもので体部は丸みをもつ。皿(7~10)は器形の判る資料は1点のみであるが、口縁部が直線的に延びるものと大きく外反するものの2タイプがある。蓋は2点図化したか11は混入である。12は口縁部が鋭く内折する。17は長頸瓶で底部は高台が付され、胴部には厚く自然釉が垂れている。

土師器甕(20~23)は所謂「コ」の字状口縁甕である。灰釉陶器椀(16)は、口縁部と胴部は直接接合しないが同一個体である。外面は無釉か。内面上半と見込み部に灰釉が掛かり、おそらく刷毛塗りと思われる。体部下半から底部は回転ヘラケズリされる。東濃産。滑石製紡錘車(24)は最大径3.5cm、厚さ1.7cm、口径0.7cmで重量は30g。鉄器(25)は用途不明。断面長方形の角柱状で全体に湾曲している。

須恵器坏類の様相と土師器甕から稲荷前XIII期に位置づけられよう。

B区第45号住居跡出土遺物観察表(第121図)

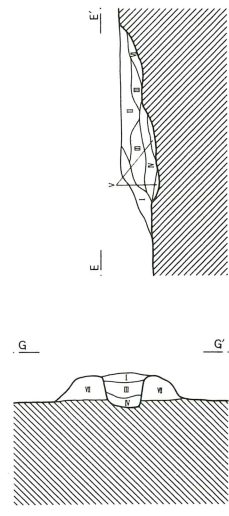
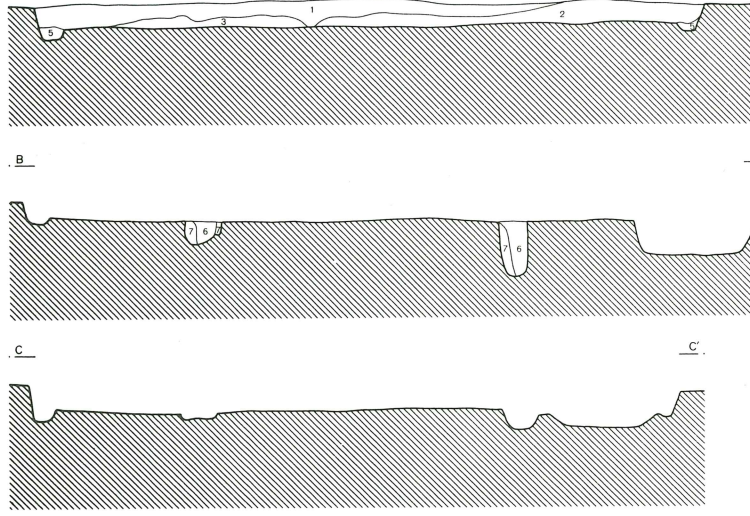
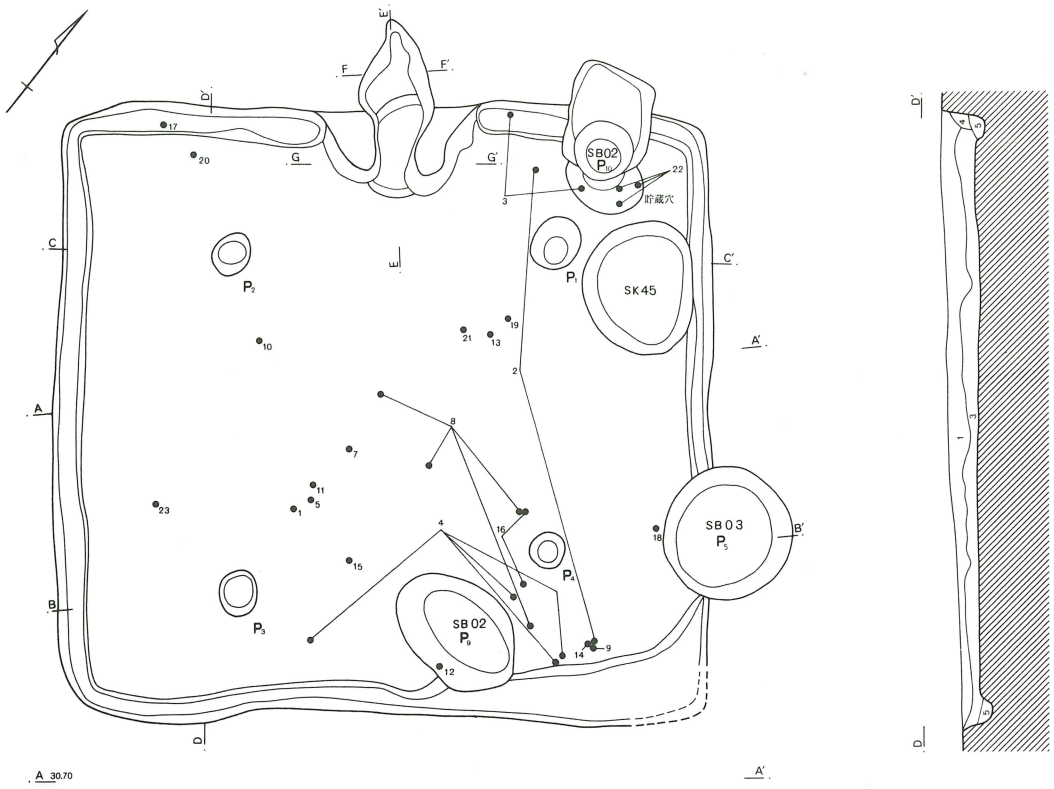
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.0)	3.6	6.0	ABC	B	灰黄	40%	No.6~30他 覆土(+3~12cm)
2	坏	(11.6)	3.8	5.3	ABC	A	オリ-7灰	40%	No.99,160 覆土(+5cm)
3	坏	(12.0)	3.8	5.4	ABC	A	青灰	55%	No.4 覆土(+10cm)
4	坏	11.8	3.9	5.5	ABC	A	青灰	100%	No.14~17 床面
5	坏	12.1	3.9	5.6	ABC	B	黄灰	70%	No.6 覆土(+12cm)
6	坏	12.0	3.6		ABC	A	緑灰	20%	No.110 覆土(+6cm)
7	皿	(13.4)	1.0		ABC	A	灰	10%	カマド内 覆土
8	皿	14.8	2.7	6.0	ABC	A	灰白	50%	カマドNo.27 内底面摩滅
9	皿	(14.8)	2.1		ABC	A	灰白	10%	No.73 床面
10	皿	(14.4)	1.8		ABC	A	灰	15%	カマド内覆土
11	蓋		1.7		ABC	A	青灰	20%	No.38 覆土(+6cm) 鈕推定径4.6cm
12	蓋	(19.5)	2.1		ABC	A	青灰	5%	No.4 覆土(+10cm)
13	椀	14.4	6.4	6.5	ABC	B	淡黄	45%	No.11 覆土(+8cm)
14	椀	(15.2)	4.9		ABC	B	にふい黄橙	25%	No.94 覆土(+8cm)
15	椀	16.0	5.3		ABC	B	灰	10%	No.56 覆土(+15cm)
16	椀	(16.5)	4.7	(6.8)	A	A	灰白	20%	No.20他 覆土(+2~13cm) 東濃産 灰釉
17	長頸瓶		17.2	11.4	ABC	A	灰	80%	No.2~12 覆土(+2~10cm)
18	高台椀		1.9	(8.0)	ABC	A	灰	35%	No.152 床面
19	甕	18.2	6.5		ABE	A	橙	90%	No.22~27 覆土(+9~16cm)
20	甕	(20.5)	5.5		ABE	A	にふい橙	10%	カマド内No.20,25 覆土
21	甕	(20.0)	6.9		ABE	A	橙	15%	カマド内No.7 覆土
22	甕	(20.8)	7.4		ABE	A	にふい橙	15%	カマド内No.18,19,28 覆土
23	甕		4.6	3.5	ABE	A	にふい橙	35%	カマド内No.34 覆土
24	紡錘車								No.1 覆土(+10cm) 滑石製
25	鉄器								No.2 覆土(+12cm) 残長11.9cm

B区第46号住居跡(第122図)

E・F・8・9区に位置し、第2号・3号掘立柱建物跡と第45号土壌に切られている。形態は方形を呈し、規模は長軸5.20m、短軸4.82m、深さは15~25cmを測る。主軸方位はN-34°-Wを示す。

床面はほぼ平坦である。覆土は6層に分かれる。堆積状態は極めて不自然で人為的に埋め戻された可能性が高いものと推定される。

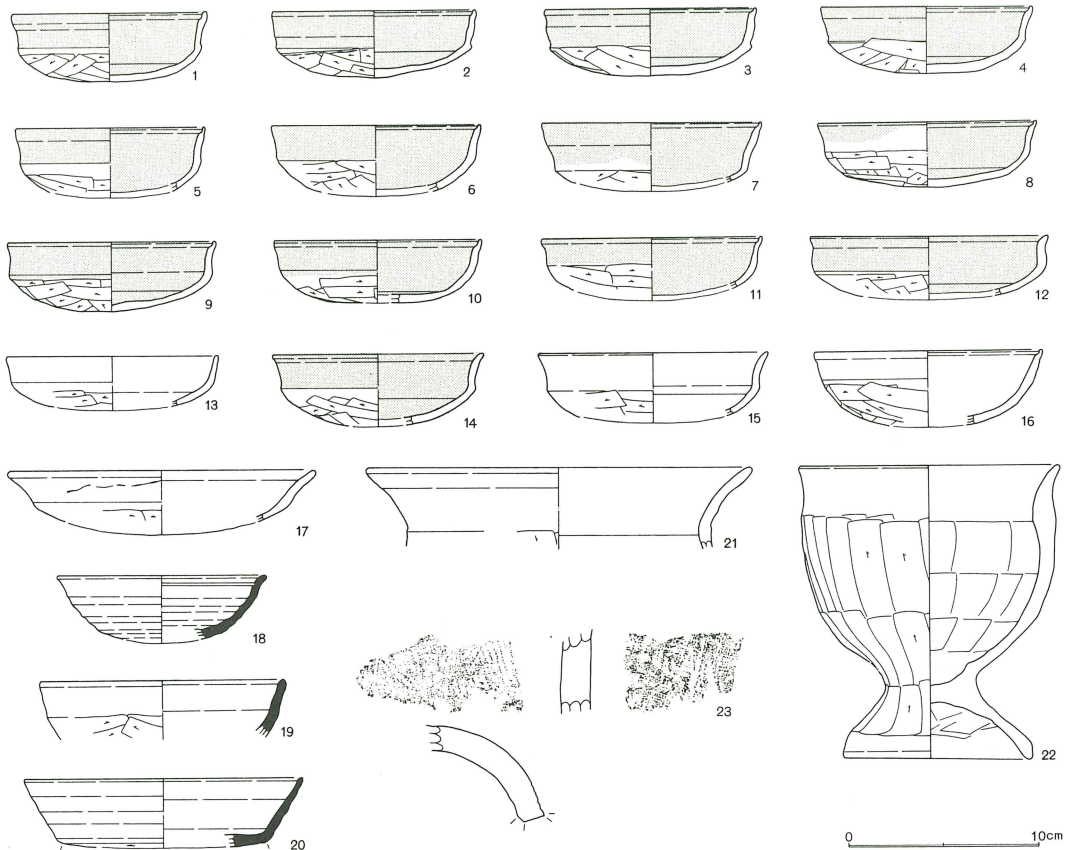
カマドは北西壁に設置されていた。袖の先端から煙道部までの長さは140cm、燃烧部幅は62cm、壁



- | | |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 1 暗褐色土 ローム粒・焼土粒少量含む。 2 暗褐色土 ローム塊・焼土粒多量含む。 3 黒褐色土 ロームと暗灰色粘土塊を少量含む。 4 暗褐色土 ローム塊を少量含む。 5 黒褐色土 ローム塊・焼土粒・炭化粒少量含む。 6 黒褐色土 ローム粒微量含む、しまり弱い。 7 黒色土とロームブロックの混土層。 | <p>カマド</p> <ul style="list-style-type: none"> I 黒褐色土 ローム粒・焼土粒少量含む。 II 褐色土 焼土塊と多量の粘土を含む。 III 褐色土 多量の焼土塊と粘土混入。 IV 暗褐色土 多量の焼土塊と炭化物混入。 V 暗褐色土 焼土粒子を少量含む。 VI 暗褐色土 焼土粒子を少量含む。 VII 灰褐色土 粘土主体にロームと焼土粒混入。 |
|--|---|



第122図 B区第46号住居跡



第123図 B区第46号住居跡出土遺物

外の切り込みは72cmを測る。焚口幅は24cmと狭く燃烧部奥壁から煙道部に移行する部分で最も広がり、煙道部に向かってまた狭まっている。燃烧部底面は床面から約10cmほど皿状に掘り込まれ、弱い段をもって煙道部に至る。先端の立ち上がり角度は緩やかである。カマド覆土は6層に分かれる。第I層はカマド埋没後の堆積層であろう。II~IV層は天井部崩落土、V層は灰層か。袖部(VII層)はローム・灰褐色粘土混じりの暗褐色土で構成されていた。

貯蔵穴はカマド東側のコーナーにあるが掘立柱建物跡柱穴に切られ詳細は不明である。深さ15cmを測る。ピットは4本検出された。何れも支柱穴と思われるが、P₂は深さが非常に浅い。

壁溝はカマドを除くと全周する。深さ5~10cmを測り、東コーナー付近が幅広くなっている。

出土遺物は小破片がほとんどである。量的には少なく、床面よりも浮いた状態で出土したものが多し。第123図9の坏は残存率も高く床面出土。22の台付甕は貯蔵穴内出土しており住居に伴う遺物としてよい。器種としては土師器杯・皿・甕・台付甕・鉢、須恵器杯・甕・壺と瓦があり、計76点を数える。このうち、土師器杯が主体を占め51点、続いて土師器甕が13点となり須恵器は混入の疑いのあるものも含めて8点に留まる。

土師器杯(第123図1~16)は口径10~11cm代の小形のものが主体を占める。幾つかのタイプに分かれ、比企型杯(8~12)、模倣杯系の比企型杯(1~7)と丸椀風の続比企型杯(16)、模倣杯(13~15)が認められる。比企型杯としたものの中でも口縁部が内湾気味に立ち上がり口唇部を外反させる典

型的なものは12のみで、他は口縁部自体が外傾して延びかなり変質している。丸椀風のそれは赤彩と内面沈線をもつが底部が深く丸底を呈する。14・15は模倣坏としたが、前者には赤彩が施されている。13は北武蔵型坏と類似した胎土である。

図示した以外の遺物も含めて各タイプの点数をカウントすると比企型坏11点、模倣坏系比企型坏16点、模倣坏3点、その他2点となり、模倣坏系比企型坏の比率が高い。皿(17)は北武蔵系と考えられる。壁溝内出土で伴う遺物としてよい。台付甕(22)は貯穴内から出土したもので確実に伴う遺物である。

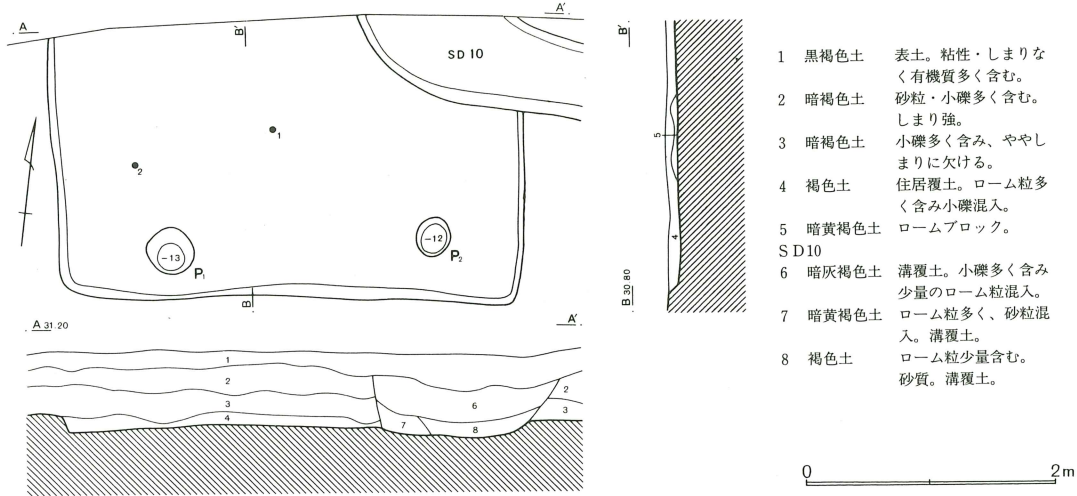
須恵器は数少なく全て破片資料である。18は丸底風の坏である。口縁部は外反し内面に浅い沈線が巡る。胎土から在地産と考えられる。19は体部が手持ちへら削りが施され、底部形状は不明。一応坏としたがよくわからない。在地産で厚手の作りである。床面出土。20は混入と考えられる。23はやや小形の丸瓦で凸面平行叩き後ナデ。凹面は布目痕が残るが風化して不明瞭である。混入と思われる。土師器坏の様相から稲荷前IV期に主体をおいた時期と考えられる。

B区第46号住居跡出土遺物観察表(第123図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(10.1)	3.6		AB	A	橙	30%	No.201 覆土(+12cm) 赤彩
2	坏	10.6	3.5		ABC	A	にぶい橙	60%	No.252,256 覆土(+3~8cm) 赤彩
3	坏	(11.0)	3.5		AB	A	橙	25%	No.245,249 覆土(+17~20cm) 赤彩
4	坏	11.0	3.5		ABC	A	にぶい橙	80%	No.121,125他 覆土(+4~8cm) 赤彩
5	坏	(9.9)	3.4		ABC	A	にぶい橙	25%	No.36 覆土(+14cm) 赤彩
6	坏	(10.9)	3.5		ABC	A	にぶい橙	10%	No.184 覆土(+13cm) 赤彩
7	坏	(11.5)	3.1		ABC	A	にぶい黄橙	20%	No.178 覆土(+12cm) 赤彩
8	坏	(11.4)	3.4		ABC	A	にぶい黄橙	40%	No.47,59他 覆土(+3~18cm) 赤彩
9	坏	10.8	3.6		ABC	A	橙	90%	No.256 床面 赤彩
10	坏	(10.8)	3.3		AB	A	にぶい黄橙	25%	No.255 覆土(+7cm) 赤彩
11	坏	(11.5)	2.7		ABC	A	にぶい橙	20%	No.35 覆土(+11cm) 赤彩
12	坏	(12.5)	3.1		ABC	A	にぶい橙	10%	No.89 覆土(+14cm) 赤彩
13	坏	(11.0)	2.7		BE	A	にぶい黄橙	10%	No.188 覆土(+5cm) 北武蔵系? 混入
14	坏	(11.0)	3.7		AB	A	橙	25%	No.252,256 覆土(+3~8cm) 赤彩
15	坏	(12.0)	3.3		ACE	A	にぶい橙	15%	No.91 覆土(+11cm) 無彩
16	坏	(11.0)	3.9		ABC	B	にぶい褐	30%	No.46,120 覆土(+3~20cm) 無彩
17	皿	(16.0)	2.7		AE	A	にぶい橙	15%	No.239 壁槽内(-6cm) 北武蔵系
18	坏	(10.8)	3.3		AC	C	灰白	15%	No.94 覆土(+11cm)
19	椀	(12.8)	3.1		BC	A	灰白	15%	No.224 床面
20	坏	(14.6)	3.6	(10.7)	ABC	A	オリーフ灰	10%	No.132 覆土(+14cm) 混入
21	甕	(20.0)	4.3		ABCE	A	にぶい黄橙	10%	No.185 覆土(+12cm)
22	台付甕	13.4	15.3	9.7	ABCJ	C	にぶい橙	60%	No.257~259 貯穴内覆土(-6~7cm)
23	丸瓦				AC	B	淡黄		No.1 覆土(+19cm)

B区第47号住居跡(第124図)

B-9・10区に位置する。住居北半は調査区外に掛かり全容は不明である。また、東壁部は第10号溝の攪乱を受けていた。形態は方形または長方形を呈するものと推定されるが西壁はやや開き気味である。残存規模は長軸3.74m、短軸2.18m、確認面からの深さ5~12cmを測る。主軸方位は南壁



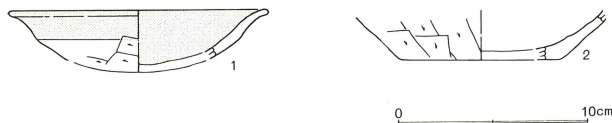
第124図 B区第47号住居跡

に直交するものと仮定するとN-6°-Wを示す。

床面はやや凹凸がある。住居覆土は小礫混じりの褐色土で構成され大きな土層変化は観察されなかった。また中央部床面にはロームブロックが薄く堆積していたが性格は不明である。

ピットは2本検出された。住居に伴う柱穴の可能性はあるが確証は得られなかった。また、カマド及び貯蔵穴は確認された範囲には存在しない。壁溝は検出されなかった。

出土遺物は非常に少なく、土師器皿と壺が各1点、土師器甕の胴部片が2点検出されたのみである。第125図1は土師器皿。口縁部外面と内面に赤彩されるが、口唇部内面に沈線はない。白色針状物質が多量に含まれる。2は壺底部である。時期の限定は難しいが、土師器皿の特徴から7世紀中葉～後半代に位置付けられるものと推定される。



第125図 B区第47号住居跡出土遺物

B区第47号住居跡出土遺物観察表(第125図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	皿	13.4	2.6		BC	A	浅黄橙	10%	No2 床面 赤彩
2	壺		2.6	8.4	ABC	A	にぶい橙	10%	No3 床面

B区第48号住居跡(第126図)

D-9区に位置し、第8号方形周溝墓東南に近接する。形態は略方形を呈するが、コーナーに丸みをもつ。規模は長軸4.44m、短軸4.34m、深さ約20cmを測る。主軸方位はN-65°-Eを示す。

床面は小さい起伏が顕著である。覆土は5層に分かれ全体にロームの混入が目立つ。

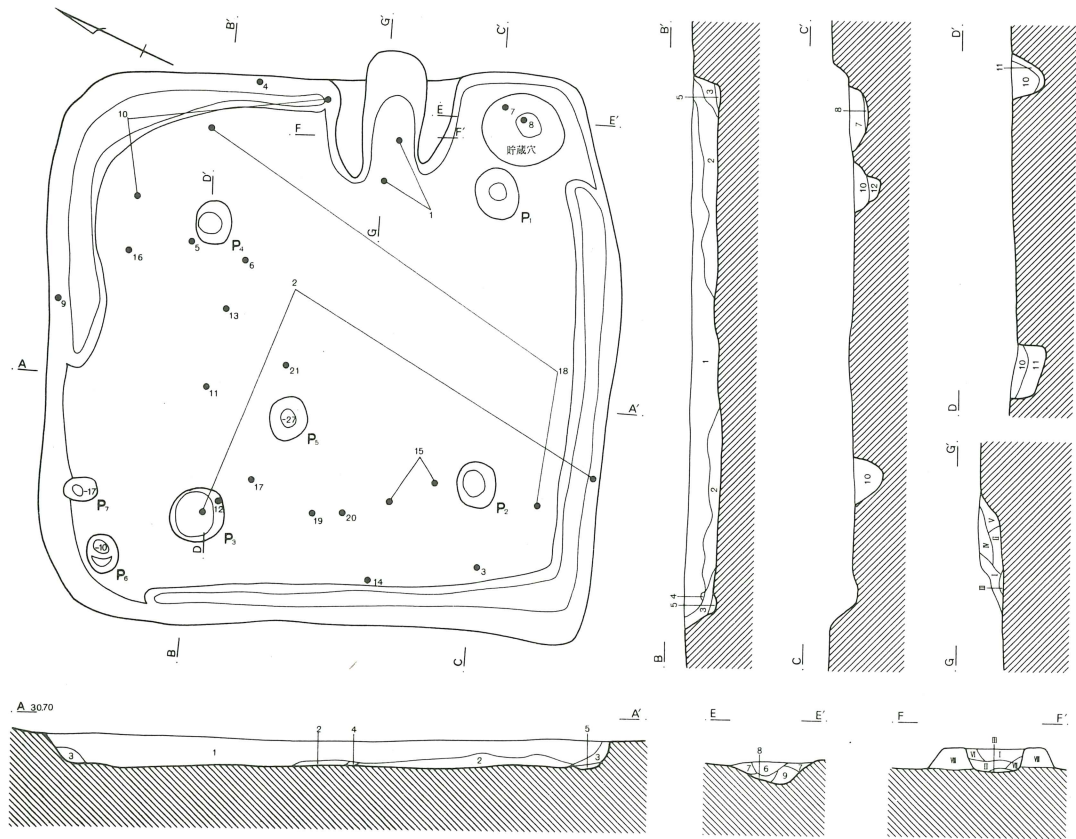
カマドは東壁を切り込んで設けられていた。袖の先端から奥壁までの長さ104cm、燃烧部幅50cmを測る。底面は床面と同レベルで続き燃烧部奥壁は緩やかに立ち上がる。煙道部は削平され残存しない。覆土は7層に分かれ第III層が灰層、VI層は袖崩落土か。袖は灰褐色の粘質土で構成される。

貯蔵穴はカマド脇のコーナーに設けられる。径68×58cmの楕円形プランを呈し、深さ20cmを測る。

底面は耨鉢状に凹んでいる。

ピットは7本検出され、P₁～P₄が主柱穴に相当しよう。他のピットは伴わないものと推定される。柱痕は残されておらず抜き取られたものと考えられる。壁溝は鉤の手状に巡り全周しない。深さは5 cm前後と非常に浅い。

出土遺物には土師器杯・椀・甕・小形甕・鉢・壺、須恵器杯・甕・瓶があり、個体数で47点を数える。土師器杯はほとんどが小片で24点検出された。第127図1～8は比企型杯の系譜を引く土器群で、腰高の椀タイプのもの(1・2)と腰の位置が低く底部がやや偏平なもの(3～8)がある。9は口縁部と体部の境の稜がはっきりしており模倣杯の影響を受けている。10～12は有段口縁杯で何れも黒色処理された痕跡が残る。10については不明確であるが、後2者には白色針状物質が含まれ在地にお



- | | | |
|-----|---------|-------------------------|
| 1 | 暗褐色土 | 焼土粒少量・ローム粒子多く含む。 |
| 2 | 黒褐色土 | 焼土粒子を多く含む、ローム粒子1層より少ない。 |
| 3 | 暗黄褐色土 | ローム質でくすんだ色調を呈する。暗褐色土混入。 |
| 4 | 暗黄褐色土 | ロームブロック3層より黄色味強い。 |
| 5 | 暗褐色土 | ローム粒子を多く含む、くすんだ褐色を呈する。 |
| 貯蔵穴 | | |
| 6 | 黒褐色土 | ローム粒子・小礫を少量含む。 |
| 7 | 暗褐色土 | 黒色味強く、ローム粒子を1層より多く含む。 |
| 8 | 暗褐色土 | 砂礫主体の層。 |
| 9 | 暗黄褐色砂礫層 | |
| ピット | | |
| 10 | 黒褐色土 | 少量の焼土粒子を含む。礫混じり層。 |
| 11 | 暗黄褐色土 | ローム混じり。包合物なし。 |
| 12 | 暗褐色土 | 小礫を多量に含む。砂質土層。 |

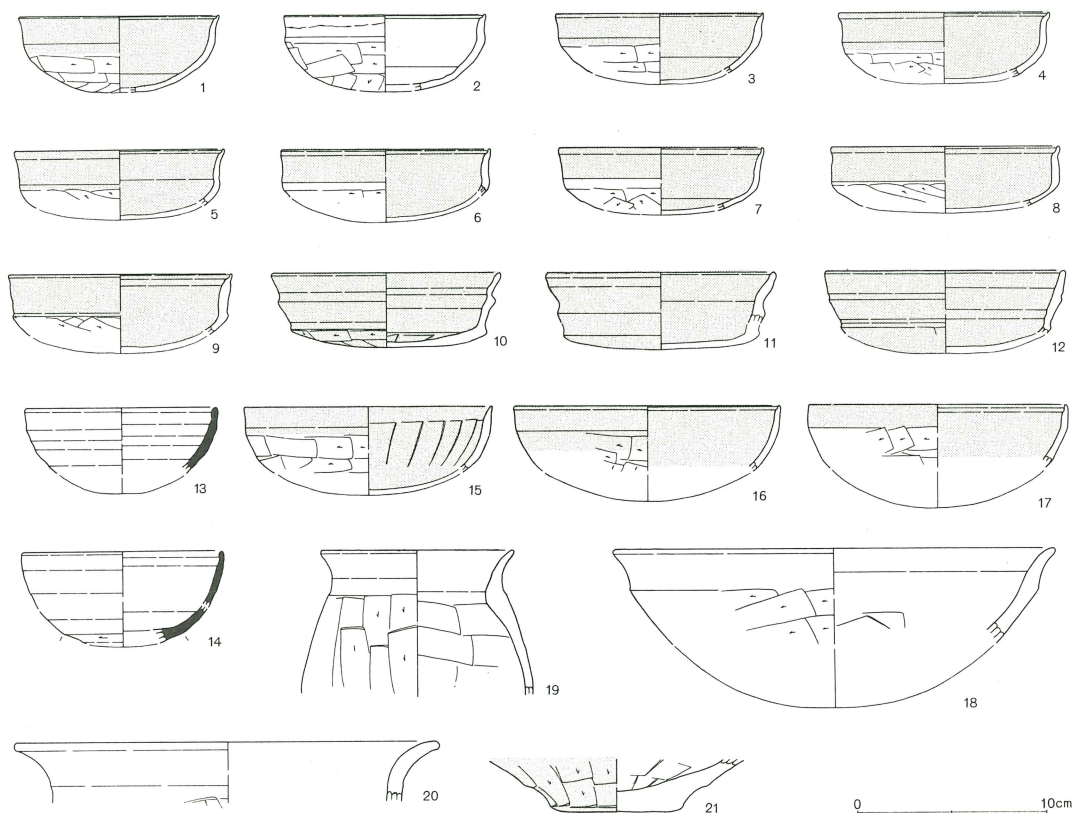
- | | |
|------|----------------------------|
| カマド | |
| I | 黒褐色土 少量の焼土・ローム粒子を含む。 |
| II | 暗赤褐色土 砂質でI層よりも、焼土粒子の含有量多い。 |
| III | 黒褐色土 灰を多く含む。 |
| IV | 暗黄褐色土 焼土粒子を含みやや赤褐色を呈する。 |
| V | 暗灰褐色土 焼土微粒子を含み全体にボソボソした土質。 |
| VI | 暗赤褐色土 粘土粒子の含有量多く赤色味強。 |
| VII | 暗赤褐色土 粒径2mm前後の焼土粒子をやや多く含む。 |
| VIII | 灰褐色土 灰色粘土主体。焼土粒子含む。 |

0 2m

第126図 B区第48号住居跡

いて生産されたものと考えられる。椀(15~17)には器形の窺えるものはないが丸底を呈するものと推定される。

須恵器は坏2点、甕2点、瓶類の胴部片が1点検出され、図示したもの以外は混入である。第127図13・14は形態は類似するが胎土がやや異なり別個体であろう。口縁部内面が凹む点は共通するが後者の方が凹みが明確である。14は2片あり接合しないが、底部は回転ヘラケズリされる。何れも胎土が精良で14は湖西産と推定される。13はやや砂っぽい胎土でおそらく東海産ではあろうが湖西産かどうかは確言できない。蓋とするか坏とするか判断に迷うが、深めの器形で外面口縁部下に縷れや沈線が見られないことから一応坏と考えておく。土師器の坏の様相から稲荷前III期後半~IV期に比定される。



第127図 B区第48号住居跡出土遺物

B区第48号住居跡出土遺物観察表(第127図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(10.5)	4.0		AB	A	にぶい橙	40%	No.172,173 カマド内 赤彩
2	坏	(10.6)	4.0		A	A	にぶい褐	40%	No.167,175 P ₃ 内(-19cm) 無彩
3	坏	(10.9)	3.1		ABE	A	橙	10%	No.117 覆土(+7cm) 赤彩
4	坏	(11.4)	3.4		ABC	A	にぶい黄	15%	No.145 壁際覆土(+13cm) 赤彩
5	坏	(12.0)	3.0		ABC	A	にぶい橙	15%	No.86 覆土(+13cm) 赤彩
6	坏	(11.0)	2.5		ABC	B	にぶい橙	10%	No.76 覆土(+9cm) 赤彩
7	坏	(10.7)	3.3		ABE	A	浅黄橙	10%	No.153 覆土(+13cm) 赤彩
8	坏	(11.8)	3.2		AB	A	にぶい橙	15%	No.178 貯穴内覆土(-20cm) 赤彩

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
9	坏	(11.7)	3.2		A B C	A	にぶい橙	10%	No.156 壁際 赤彩
10	坏	11.9	3.9		A B E	A	にぶい橙	80%	No.134, 171 覆土(0~+14cm) 黒色処理
11	坏	(11.9)	2.6		A B C E	A	にぶい橙	15%	No.27 覆土(+8cm) 黒色処理される
12	坏	(12.5)	3.3		A C E	B	浅黄橙	10%	No.50 覆土(+13cm) 在地産 黒色処理
13	坏	(10.0)	3.5		A B	A	灰白	10%	No.79 覆土(+9cm) 東海系
14	坏	(10.4)	4.8		B	A	灰白	15%	No.88 覆土(+11cm) 東海系
15	椀	(13.0)	3.5		A B C	A	浅黄橙	25%	No.103, 108 覆土(+8cm) 赤彩
16	椀	(14.0)	3.4		A B C	A	橙	5%	No.133 覆土(+7cm) 赤彩
17	椀	(13.5)	3.3		A B C	A	橙	5%	No.39 覆土(+21cm) 赤彩
18	鉢	(23.0)	5.0		A B C E	A	にぶい黄橙	15%	No.112, 143 覆土(+15cm)
19	甕	(10.0)	7.6		A B	A	浅黄橙	20%	No.91 覆土(+5cm)
20	甕	(27.0)	3.2		A B C E	B	浅黄橙	10%	No.82 床面 わずかにケズリ痕残る
21	壺		2.7	7.0	A B E	A	橙	30%	No.83 覆土(+15cm) 赤彩

B区第49号住居跡(第128図)

D・E-9区に位置する。第54号住居跡に北東コーナー一部上面を破壊されていた。また第2~4号及び7号掘立柱建物跡が重複し、貼床が観察されなかったことから何れも住居よりも新しいものと判断される。西壁に掛かって検出された土壌状の掘り込み(P₇)との切り合い関係は明らかではないが一応住居よりも古いものと考えておく。形態は整った方形を呈し、規模は長軸5.02m、短軸4.86m、深さ30cmを測る。主軸方位はN-12°-Wを示す。

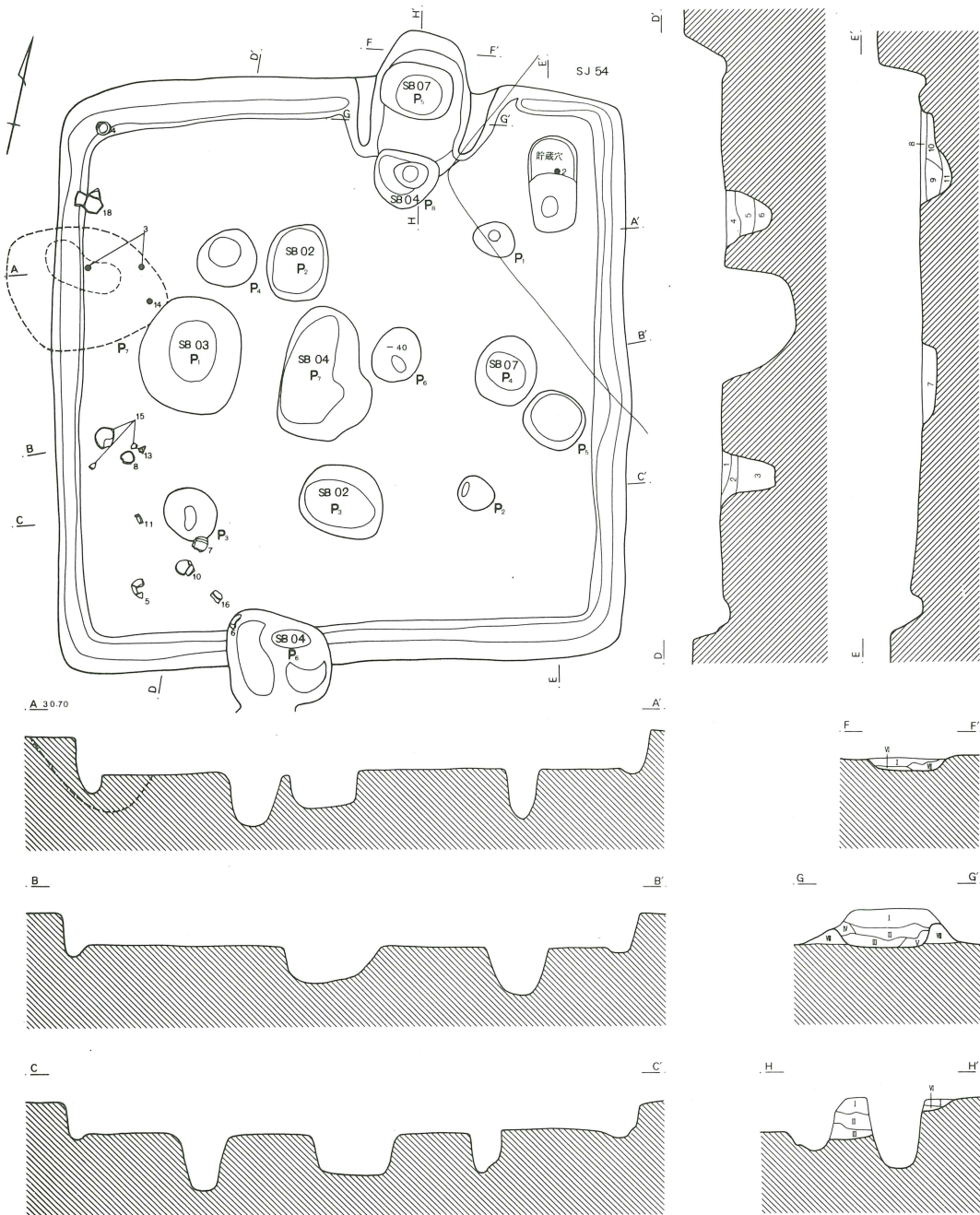
床面は南東コーナー付近がやや高い。覆土にはローム粒子・焼土粒子を少量含まれ、暗褐色土から黒褐色土壌で構成される。下層ほど黒みが強い傾向にある。堆積状態は明らかにできない。

カマドは北壁に設けられる。第4号掘立柱建物跡の柱穴によって焚口部を、第7号掘立柱建物跡に燃焼部を破壊され遺存状態は悪い。規模は全長122cm、燃焼部幅80cmで、底面は床面下に約10cm掘り込まれている。煙道部は燃焼部と同じ幅で続き先端は緩やかに立ち上がるようである。覆土は8層に分かれる。第I層はカマド崩落後の埋土、第III層中に灰層が含まれるとすると第II層・VI層が天井部崩落土に相当しよう。第V層は袖流出土か。袖はローム混じりの粘土で構成されていた。

貯蔵穴は北東コーナー部に位置する。隅丸長方形プランを呈し底面は2段に掘り込まれている。規模は長径82cm、短径42cm、深さ28cmを測る。覆土は不自然な堆積を示し、第8層が貼床状に覆っていた。第9~11層にもロームが多く含まれ、住居廃絶までの間に埋め戻されたものと推定される。ピットは掘立柱建物跡柱穴を除くと7本検出された。P₁~P₄は配置から支柱穴と考えられるが、柱痕は認められなかった(第1~6層)。P₅とP₆は床面を切っており住居よりも新しい時期の掘り込みである。P₇については既述したとおりである。壁溝はカマドを除き全周する。幅20~40cm、深さ約10~15cmを測る。

出土遺物は比較的多く口縁部破片数で173点を数える。覆土中~上層から出土した遺物が多い。器種としては土師器坏・椀・皿・甕・小形甕・鉢、須恵器坏・蓋・甕・壺がある。須恵器は重複する第54号住居跡に含まれるものが大半であり、確実に伴うものは抽出できない。

土師器坏は82点検出された。第129図1~10は比企型坏である。1・2は口縁部が一度内傾してから口唇部が短く外反するもので、形態的には他の比企型坏に比較してやや古手の特徴をもつ。前者



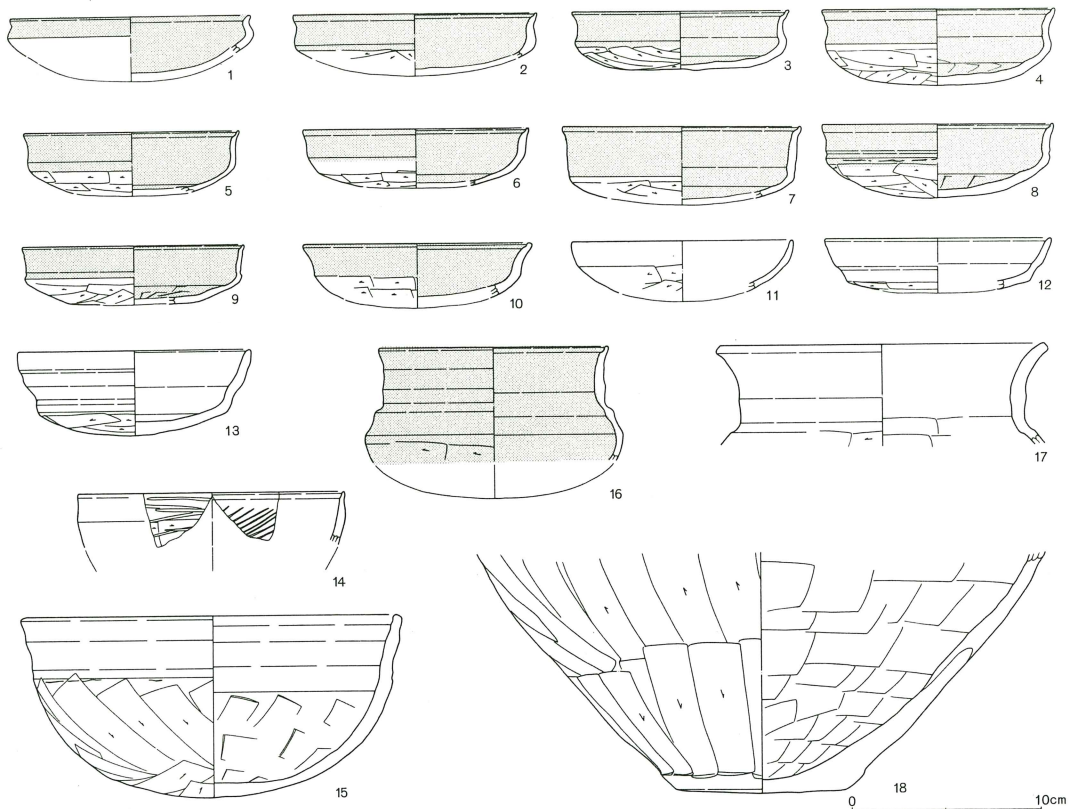
- 1 褐色土 ローム粒少量混入。
- 2 暗褐色土 ローム粒少量・焼土粒微量混入。
- 3 黒褐色土 粘質。ローム粒少量混入。
- 4 黒褐色土 ロームブロック・焼土粒微量混入。
- 5 暗褐色土 ローム粒・焼土粒少量混入。
- 6 黒褐色土 粘質。混入物なし。
- 7 暗褐色土 粘質。ローム粒・焼土粒少量混入。
- 8 褐色土 ローム粒少量混入。
- 9 暗褐色土 ローム粒・焼土粒少量混入。
- 10 暗褐色土 ローム小ブロック多量混入。
- 11 黒褐色土 ローム粒焼土粒少量混入。

カマド

- I 暗褐色土 ローム粒・焼土粒多量、炭化物少量混入。
- II 暗黒褐色土 黄褐色粘土粒・焼土粒・炭化物多量混入。
- III 暗黄褐色土 焼土粒・炭化物多量混入。
- IV 暗褐色土 ハードロームブロック多量混入。
- V 黄褐色土 粘土ブロック。焼土粒多量混入。
- VI 暗黄褐色土 ローム粒多量・焼土粒少量混入。
- VII 暗黄褐色土 混入物なし。
- VIII 黄褐色土 粘質土主体とし、ローム混じる。

0 2m

第128図 B区第49号住居跡



第129図 B区第49号住居跡出土遺物

には内面の沈線はなく体部外面は丁寧にナデられ、ヘラケズリの単位がはっきりしない。3・4は同様な口縁形態を採るが、口縁内面に沈線が巡り、腰の位置がやや下がる。5～7は口縁下半が直立し、腰の位置が更に低くなっている。8～10は模倣坏の影響が強いもので、8・9は口縁部直立、10は口縁部が外反する。11は北武蔵型坏か。12・13は有段口縁坏。後者は両面に黒色処理された痕跡が残る。14の碗は硬く焼き締まる。口唇部内面には沈線が巡り、内外面はヘラミガキが施される。

出土状態をみると、完存率の高い遺物は西壁側に集中する傾向が認められる。しかし、ほぼ完形の土器であっても3・13の坏と15の鉢は10cm以上浮いた位置から出土しており、埋没過程の混入(投棄か)と見做される。最も遺構に伴う可能性の高いものは4・8の坏で、比較的残存率も高くP₃の南側の床面から近接して出土した。比企型坏の様相から稻荷前II期～III期に位置付けてよからう。なお、11と14は8世紀初頭前後の遺物と思われ明らかに混入である。

B区第49号住居跡出土遺物観察表(第129図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.6)	1.9		ABC	A	におい橙	5%	覆土 赤彩
2	坏	(12.8)	2.4		ABC	A	におい橙	15%	覆土 赤彩
3	坏	11.3	3.1		ABCDE	A	橙	100%	No.23 覆土(+10cm) 赤彩
4	坏	12.1	4.0		ABC	A	におい橙	95%	No.31 床面 赤彩
5	坏	11.3	3.2		ABC	A	におい橙	30%	No.32 覆土(+4cm) 赤彩

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
6	坏	(11.8)	3.0		ABC	A	にふい橙	25%	No.29 覆土(+4cm) 赤彩
7	坏	(12.5)	3.8		ABC	A	にふい橙	15%	覆土 赤彩
8	坏	(12.1)	3.9		ABC	A	にふい橙	75%	No.30 床面 赤彩 口縁30%残
9	坏	(11.6)	3.1		AB	A	にふい橙	20%	No.50 覆土(+21cm) 赤彩
10	坏	(11.9)	2.9		AB	A	橙	15%	No.9,83 床面 白色針不明瞭 赤彩
11	坏	(11.6)	2.7		ABE	B	浅黄橙	20%	覆土 北武蔵系坏 混入であろう
12	坏	(11.8)	2.7		ABCE	B	にふい黄橙	15%	No.95 貯穴内(-8cm) 無彩
13	坏	12.1	4.5		ABC	A	にふい橙	100%	No.1 覆土(+20cm)
14	椀	(14.0)	2.8		BC	A	橙	5%	No.12 覆土(+22cm) 硬質
15	鉢	19.6	9.5		ABC	A	橙	90%	No.20~22 覆土(+10~15cm)
16	鉢	(12.0)	6.0		ABC	A	にふい橙	15%	No.33 覆土(+15cm) 赤彩
17	壺	(17.0)	5.4		ABCE	A	にふい橙	10%	覆土 無彩
18	壺		12.6	9.0	ABC	A	橙	40%	No.5,6 覆土(+23~24cm)

B区第50号住居跡(第130図)

B・C-10区に位置し、第10号方形周溝墓北溝上に構築される。形態は長方形を呈し、規模は長軸3.44m、短軸3.20m、深さ6~11cmを測る。主軸方位はS-83°-Eを示す。

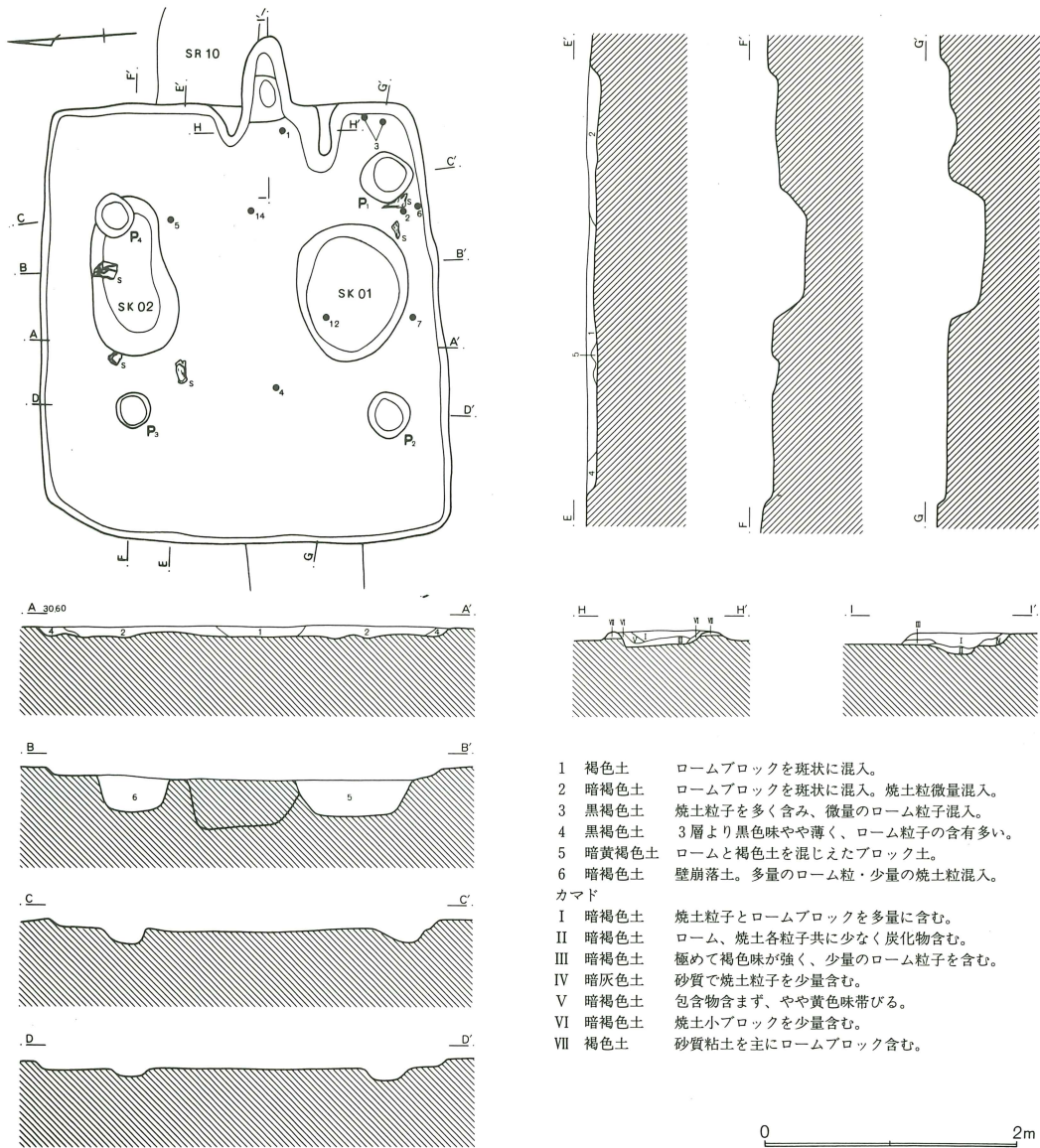
床面は凹凸が顕著で安定しない。覆土は4層に分かれるが、層厚が薄いため自然堆積としてよいかどうか判然としない。

カマドは東壁に位置し、壁を50cm切り込んで構築される。燃烧部幅は40cmで、底面は床面を6cm程掘り込んでいる。燃烧部奥壁には弱い段が認められ、煙道部との境を為すものと推定される。覆土は6層に分かれ、おそらく第II層が灰層、第I層が天井部崩落土であろう。壁内の袖は残存する。砂質粘土とロームブロック混じりの褐色土で構成される(第VII層)が、あまりしっかりしたものとはいえない。

ピットは4本検出された。土壌が2基検出されている(SK01・02)。ロームブロックを霜降り状に含む褐色土で構成され、住居に伴う床下土壌と推定される。

出土遺物としては土師器坏・甕・台付甕、須恵器坏、瓦がある。土師器坏は1片あるが混入、土師器甕も胴部破片のみで図化できるものはない。須恵器坏類は明らかな混入を除くと19点出土した。第131図1・2は器高が深く、口縁部を肥厚させて外反気味におさめる。体部は直線的に伸び、底部は回転糸切り後無調整で底径は口径の1/2以下に縮小している。4・5はやや大振りで椀とすべきかもしれない。

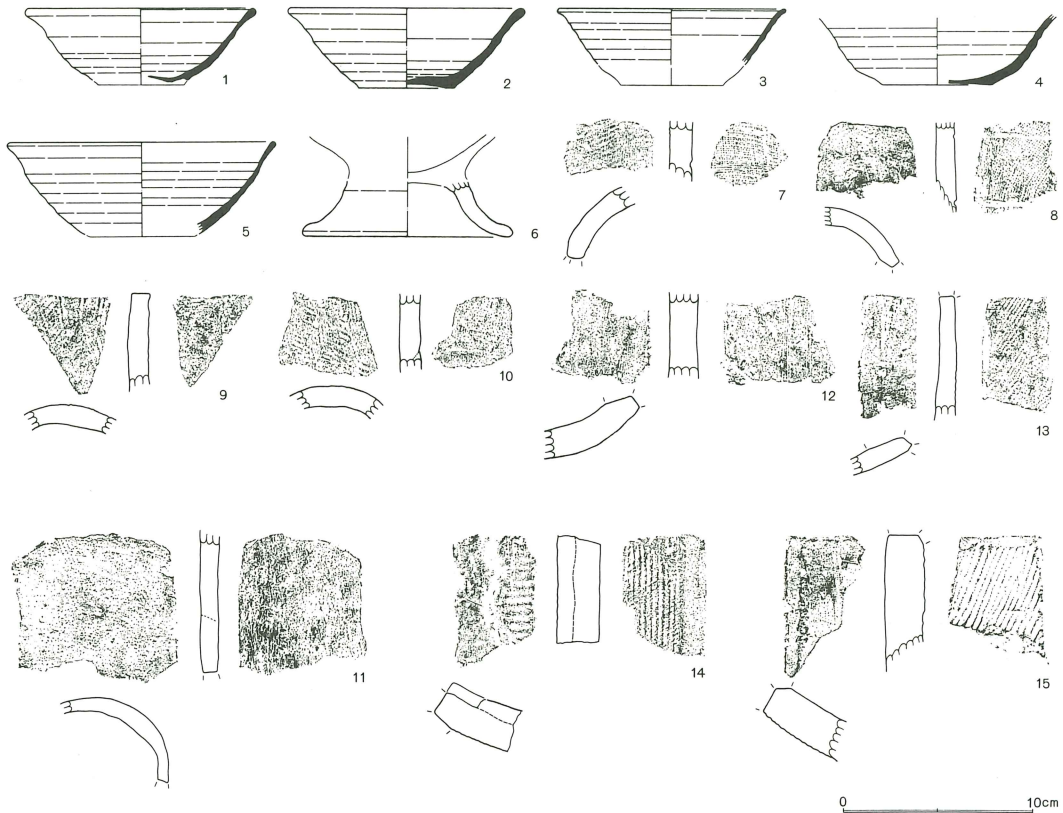
瓦は12点出土した。小形瓦が主体を占め10点、通常の瓦が2点である。小形瓦は丸瓦(7~11)と平瓦(12・13)がある。丸瓦は凸面平行叩き後ナデ調整、凹面は細かい布目(1cm当り経糸約9本、緯糸約8本)を残すものと、撫で消すものがある。平瓦は凸面の整形は同様で凹面は撫でられている。14・15は平瓦である。凸面は斜格子叩きか。何れも粘土板を2枚張り合わせた痕跡が残る。14の凹面は布目と思われるが風化している。瓦の出土状態は確認面から床面まで散在的に出土し、特に纏まる様相は見られない。また9は床下土壌内から出土した。住居の年代としてはカマド内及び床面から出土した1・2の須恵器坏を基準に稲荷前XIV期頃と考えられる。



第130図 B区第50号住居跡

B区第50号住居跡出土遺物観察表(第131図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(11.8)	3.9		ABC	C	にぶい褐	20%	No.26 カマド内 底部剥落
2	坏	(12.2)	4.2	5.0	ABC	A	緑灰	80%	No.40,41 床面
3	坏	(11.8)	3.0		ABC	A	灰白	20%	No.5 覆土(+5cm)
4	椀		3.7	(5.9)	AB	B	にぶい橙	20%	No.33 床面 酸化焰焼成か?
5	椀	(13.8)	4.8		AC	A	灰白	20%	No.39 覆土(+4cm)
6	台付甕		2.9	(10.7)	ABE	A	にぶい黄橙	20%	No.13 床面
7	丸瓦				ABC	B	淡黄		No.16 覆土(+4cm)
8	丸瓦				ABC	A	灰		覆土 ヘラ描き沈線2条
9	丸瓦				ABC	A	灰		床下土壌1
10	丸瓦				ABC	A	灰		No.17 覆土(+4cm)



第131図 B区第50号住居跡出土遺物

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
11	丸瓦				ABC	A	灰		覆土
12	平瓦				ABC	A	灰		覆土
13	平瓦				ABC	A	灰		覆土
14	平瓦				ABC	C	灰白		No.35 覆土(+14cm)
15	平瓦				AC	A	灰白		覆土

B区第51号住居跡(第132図)

C-9・10区に位置する。第9・10号方形周溝墓の周溝上に掛かって構築されていたが、確認の遅れから周溝墓を先に掘り下げてしまい、正確な形態や規模は不明な点が多く残ってしまった。小形の住居跡で形態は不整形を呈するものと推定される。残存規模は東西1.45m、南北2.30m、深さ20cmを測る。主軸方位はN-83°-Eを示す。

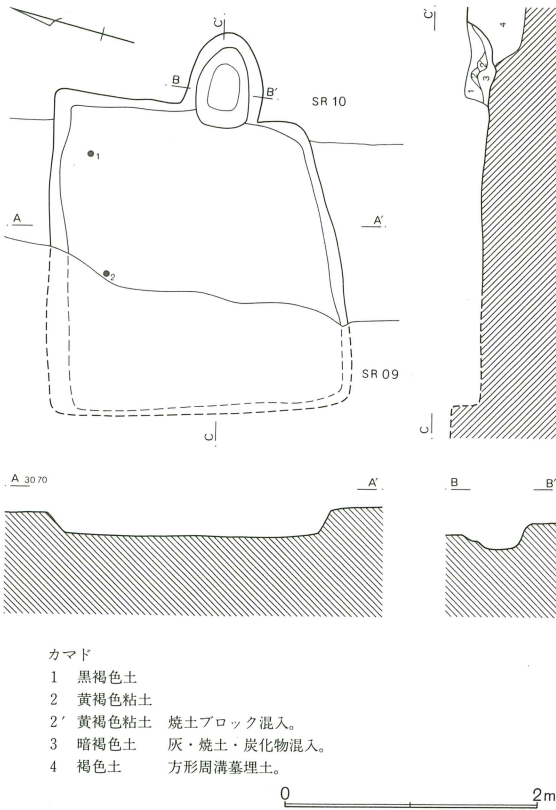
床面はほぼ平坦である。覆土はローム粒子を多量に含む黒褐色土で構成されるが、堆積状況の詳細は不明である。

カマドは東壁に位置し、壁を約60cm切り込んで構築される。燃烧部幅60cmを測り、底面は床面から7cm程掘り下げられている。奥壁は急角度で立ち上がり、煙道部は削平され残存しない。袖は検出できず、壁ラインが焚口部に相当するものと考えられる。土層は3層に分かれ、I・II層が天井部崩落土、III層が灰層と考えられる。

出土遺物は極めて少なく、土師器甕胴部小片が2片、小形瓦が3点検出されたに留まる。

第133図1は小形の丸瓦。凸面は平行叩き後ナデ、凹面は布目(2cmあたり経糸18本、緯糸14本)。また、横方向に延びる紐状圧痕が1条認められた。圧痕部に布目は見られないことから成形台に被せた布を緊縛したものと考えられる。側縁はヘラケズリ調整される。胎土に白色針状物質を含み、色調は黄灰色。床面出土。註記No.2。2は小形の平瓦。凹面は横方向のナデ、凸面は平行叩き後ナ

デ。狭端面の両端縁部は面取りされる。胎土に白色針状物質を含み、須恵器と同一の硬い焼きで色調は灰色を呈する。床面出土。註記No.1。土器が伴わないため時期決定は難しいが、カマド形態や小形瓦を伴うことから一応稲荷前XIII期またはXIV期頃と考えておきたい。



- カマド
- 1 黒褐色土
 - 2 黄褐色粘土
 - 2' 黄褐色粘土 焼土ブロック混入。
 - 3 暗褐色土 灰・焼土・炭化物混入。
 - 4 褐色土 方形周溝墓埋土。

第132図 B区第51号住居跡

第133図 B区第51号住居跡出土遺物

B区第52号住居跡(第134図)

C-10区に位置する。第10号方形周溝墓を切って構築される。形態は方形を呈し、規模は長軸3.94m、短軸3.58m、深さ10~20cmを測る。主軸方位はN-90°-Eを示す。

床面は若干起伏をもち、西壁側がやや高い。南壁と西壁はかなり崩落しており壁の立ち上がり角度が緩くなっていた。覆土は4層に分かれ、第1層と第2層はほぼ同一層として良い。第3層はロームの含有量が多く幾分褐色味が強い。第4層は壁崩壊土と思われる。

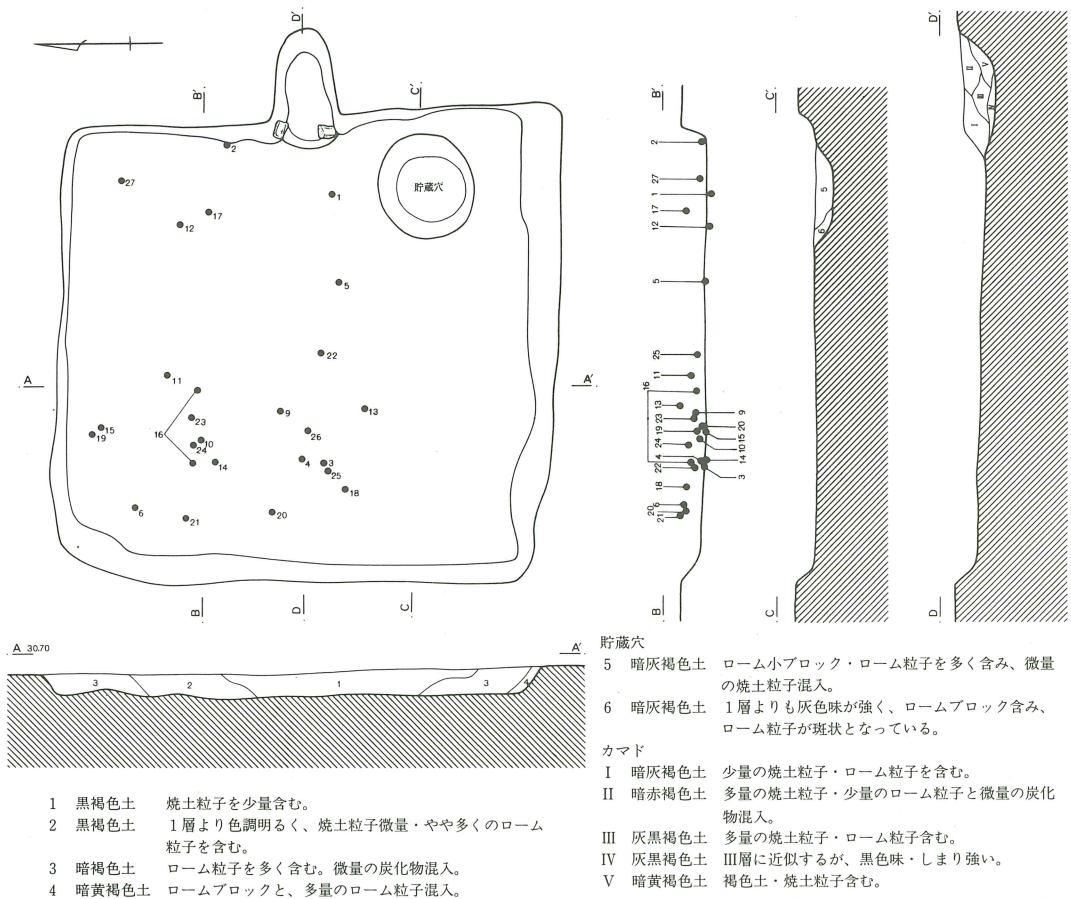
カマドは東壁に位置し、壁を約70cm切り込んで構築されていた。焚口から先端までの長さは94cm、最大幅は55cmを測る。焚口部には左右2個礫が遺存していた。何れも底面から数cm浮いて横倒しになった状態で検出され、カマドの袖石が外れたものと推定される。燃烧部底面は鍋底状を呈し、奥壁は45°程の角度で立ち上がる。カマド覆土は5層に分かれる。第II・III層が天井部崩落土、第IV層が

灰層と思われる。第V層はカマド内流入土か。

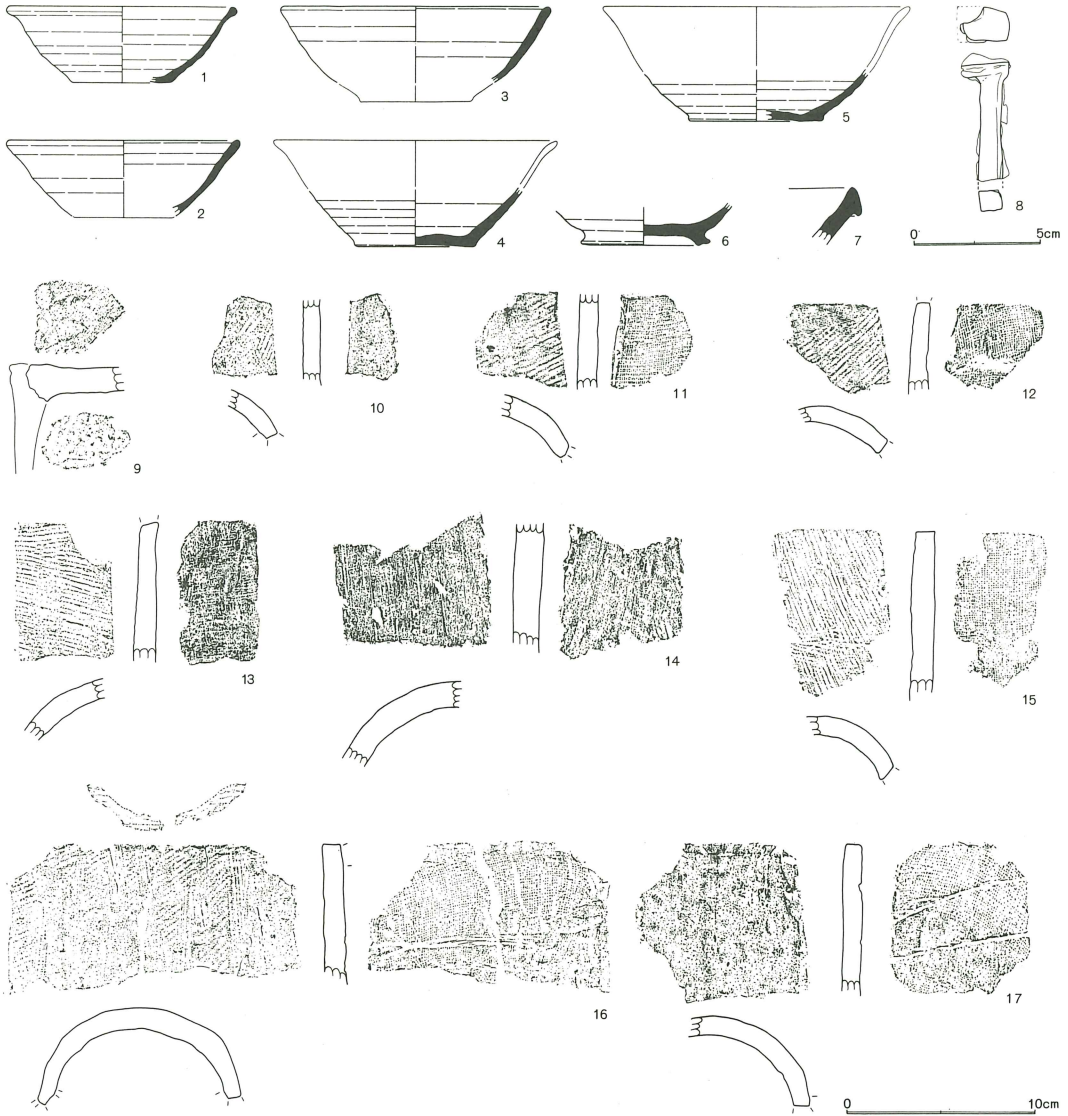
貯蔵穴はカマド南側のコーナーにある。ほぼ円形プランを呈し、規模は直径80cm、深さ14cmを測る。ピット、壁溝は検出されなかった。

出土遺物は少なく全て小片である。土師器甕、須恵器坏・高台坏・椀・蓋・甕・壺と瓦、鉄器が検出された。土器の中では須恵器坏類が8点あり、他は各1点出土したのみである。坏は器形のある程度判明する資料は第135図1のみである。体部中位にやや膨らみをもち、口縁部は肥厚する。3～5は椀で底部は糸切り後無調整である。3の口縁部内面には油煙が付着する。8は鉄釘である。残長4.6cm。方形の頭部に一辺0.8cm程の断面方形の基部が取り付けられている。かなり錆化が進んでいる。

瓦は破片数で32点出土した。小形瓦が29点を占める。小形瓦には3種あり内訳は軒丸瓦1点、丸瓦13点、平瓦12点となる。色調は灰白色から黄灰色を示すものと、須恵器と同一の焼きで灰色を呈するものがある。全て白色針状物質が含まれている。軒丸瓦(9)は瓦当面を欠く。凸面はヘラケズリ、凹面は指ナデ調整される。丸瓦(第135図10～17)は厚さ1cm前後、両側縁の遺存する16を見ると頂部を結んだ接線の長さで10cmを測る。凸面は基本的には平行叩きが施される。その後撫で消すものと、削り調整されるものがある。凹面は2cmあたり、経糸18本、緯糸16本前後の細かい布目痕を



第134図 B区第52号住居跡



第135図 B区第52号住居跡出土遺物(1)

残すものと、ナデ消すものがある。狭端面はヘラケズリされるものの他、16には凸面と同一原体の平行叩きが施されている。小形平瓦(第135図18~24・27)は厚さ1cm前後で、凸面は平行叩き、凹面はナデられ布目の有無は不明である。狭端、或いは広端面の遺存するもののうち22はヘラケズリ調整されるが、他は平行叩き痕が残る。通常の大サイズの瓦は3点あり、2点を図化した(第136図25・26)。何れも平瓦で、25は凸面斜格子叩きと思われる。凹面はナデか。26は凸面篋ナデ、凹面はナデか。杵板状の痕跡が残る。

遺物は住居北半に偏る傾向があり、特に瓦類について垂直分布を見ると、覆土上層から床面まで散在し特に纏まる様相は認められなかった。主として住居北西側から流入、あるいは投棄されたものと考えるのが妥当であろう。遺構の時期は須恵器の様相から稻荷前XIII期~XIV期と推定される。